

コードギアス転生って誰でもハードモードじゃね!?

女神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

皇歴2002年神聖ブリタニア帝国に一人の皇子が誕生する。

その子供は、今後の世界に多大な影響を与える事になる。

これは、幸か不幸か神聖ブリタニア帝国の皇子として転生してしまつた男の話である。

「あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるぞ」

目次

第1話	アリエスの日常	1
第2話	僕。	6
第3話	御引越し	11
第4話	嚮団	17
第5話	大人の話	26
第6話	ブリタニア帝国	32
第7話	E・Uへ	43
第8話	新しい出会い	54
第9話	諜報活動始めました―前編	61
第10話	諜報活動始めました―後編	67
幕間1	特別な日	75
第11話	帝都狂乱―序	84
第12話	帝都狂乱―破	90
第13話	帝都狂乱―急	99
第14話	帝都狂乱―結	109
第15話	狂乱の裏側とその後	120
第16話	はじめてのお使いinアゼルバイジャン―前編	132
第18話	はじめてのお使いinアゼルバイジャン―後編	140
幕間2	ルルーシュ兄様の受難	155

第1話 アリエスの日常

皇歴2009年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン

帝都ペンドラゴンに存在するペンドラゴン皇宮・アリエスの離宮の中庭では、二人の幼い男女が走り回っていた。正確には、6歳ぐらいのお転婆な妹を9歳ぐらいの心配性な兄が追いかけている状態である。そんな幼い兄弟を離宮の窓から見守っているのが二人の母である。そしてもう一人庭先の木の上で子猫よろしく丸まっているのが二人の兄妹の弟であり兄にあたる子供である。

そんな家族のひと時に執事が主人たる女性に来客を知らせる。

その来客は、白髪で屈強な体に純白のマントを纏い全身白の服装で現れる。彼こそこの帝国最強の名を冠する”ナイトオブワン”『ビスマルク・ヴァルトシュタイン』である。

「いらつしやい。ビスマルク」

窓際で子供達を見ている女性、兄弟たちの母である『マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア』皇妃は、執事に案内されて部屋に入ってきたビスマルクに聖母のような笑みを浮かべて歓迎する。

「マリアンヌ様、失礼いたします」

ビスマルクがお辞儀をしながら挨拶をする。よく見ると顔の至る所に細かい傷が付いている。

「レレーナに用があるのね」

「マリアンヌ様には、すべてお見通しなのですネ」

「当然よ。我が子のする事ぐらい把握済みよ」

ビスマルクが今日アリエスの離宮に来たのは、マリアンヌの次男でレレーナ・ヴィ・ブリタニアが皇宮内に設置した悪戯と言う名の殺戮装置の数々について本人に直接注意を行う為である。それらの罠は、どれも常人であれば死んでしまう様なものばかりであった。

それらの罠をビスマルクが他の皇族・貴族が掛かる前に自分で掛かり撤去して来たのである。そのお陰でビスマルクは、ボロボロになったので服を着替えてからアリエスの離宮へ来たのである。帝国最強

のナイトオブワンすらボロボロになる程の罾が皇宮内に設置されていたのだ。

これはまずいと考えビスマルクが直接来たのだが、マリアンヌの慈愛に満ちた笑みを見るとその気も削がれるというものであった。まあ罾を仕掛けた当の本人は、木の上でひなたぼっこに勤しんでいるので少しイラッと来ているのだが。

「あの子の悪戯を受けてその程度の傷で済んでいるのは、さすがナイトオブワンね」

「恐れ入ります。常人であれば死人となっている所でしょう」

ビスマルクは、思い出す。

足首の高さに張られた風糸を切ると後頭部に向けて飛んでくるコンクリートの弾丸。

ドアノブに付けられた象を即死させる毒針。

廊下に落ちていた現皇帝の記念メダルを拾うとメダルの下から吹き出してくる毒ガス。

中庭に出るとナイトメアフレームのアサルトライフルによる精密射撃などの多種多様な殺戮装置の数々を。

やはり一度しっかりと注意すべきだと思う。

「ごめんなさいね。あの子も悪気はないの」

悪気が無いのに、あの様な殺戮装置を皇宮内に大量に設置するだろうか。

「日頃のストレス発散とストレスの原因を排除しようとしているだけなの」

”だけ”と言うよりも全てであろう。マリアンヌは、皇妃であるが出自は平民であった。それ故に他の皇族や大貴族からは、蛇蝎だかつの如く嫌われていた。当然マリアンヌの子供たちであるレレーナや兄妹たちも嫌われており酷い虐めを受けていた。

そこでレレーナが思ったのが「死人に口無し」である。

ビスマルクはレレーナの性格を知っているので罾がレレーナの設置したものであると分かったが、別の者であれば犯人の特定は不可能であったろう。それほど狡猾な罾であった。

「殿下方の現状は知っておりますが、殺してしましますと後々煩わしい事になりますので」

「ええ。私も煩わしいのは面倒だから、貴方が罨を撤去してくれて感謝しているわ」

「はっ！」

ビスマルクは、思う。体を張って罨を撤去してよかったと。

「レレーナには、私からしっかり言っておくわ。それで今回は、許して頂戴」

「御意」

ビスマルクは、礼をして辞して行く。

「さて、レレーナー……こっちいらっしやい！」

マリアンヌが木の上でひなたぼっこをしている我が子と呼ぶ。

「むむ」

木の上で小さな塊がムクリと動く。

”むむ” じゃないわよ。早くいらっしやいレレーナ」

マリアンヌが急かすと、レレーナと呼ばれた小さな塊が木の上から降りてテクテクと歩いて来る。

「なんですか母上」

その子供は、ブロンドヘアの直毛でロイヤルパープルの瞳。女の子の様に線が細い体。100人が100人美人と答える容姿の子供である。

「レレーナ、悪戯をするのは構わないけどバレない様にしなさい」

ビスマルクが聞いたなら「そう言う事ではありません！」と叫ぶであろう内容を我が子に言うマリアンヌ。

「ビスマルクにバレてしまいましたか」

レレーナは、腕を組み右手の人差し指と親指で自身の顎に添えて考えるポーズをとっている。

実際レレーナの悪戯をレレーナの仕業と見破るのは、難しい。目撃者も無く、指紋などの痕跡も一切残さない様に設置されているので普通は気付かれないだろう。ただビスマルクは、レレーナの癖を知っていたので悪戯がレレーナの仕業だと見破ったのである。

「レレーナ。ビスマルクは、貴方の悪戯の癖に気付いているから見破られるのよ。次からは、他人の癖を使って擦りつけなさい」

この様にレレーナの悪戯に対して、マリアンヌが助言をして助長してしまうのでレレーナが悪戯を辞めないのである。と言うよりも今までのレレーナの悪戯だとビスマルクが思っているモノの中には、マリアンヌが仕掛けたものも存在したがビスマルクは気付いていない。母は、息子よりも上手であるのだ。

レレーナとマリアンヌが話していると其処に走って近づいてくる影が二つ。

「レレーナお兄様！また悪戯をされたのですか!？」

一人は、レレーナと同じ色の髪をした妹の”ナナリー・ヴィ・ブリタニア”である。

「レレーナ！また悪戯をして来たのか」

二人目は、レレーナと同じ様に直毛で黒髪である兄の”ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア”である。

「そうだよ。でもまだまだ母上には、敵わないよ。もつと精進して最高の悪戯を試してみせるよ」

「流石です！お兄様」

ナナリーは、お兄様フィルターによってレレーナの殺戮装置の悪戯すらも兄の素晴らしい芸術作品程度の認識になっているのである。

「いや辞めなさい。それからナナリー、レレーナの殺戮装置は流石に危険だよ」

一方ルルーシュの方は、弟の悪戯を正しく殺戮装置として認識しているので辞めさせる様に努力をしているが結果は思わしくない。と言うより母と妹が助長するので悪戯が過激化しているザマだ。

昔は顔面に墨が掛かったり、顔面に小石が飛んでくる程度であったのに、今では殺しにくるので流石に危険だとルルーシュは認識している。

実際の所ルルーシュもレレーナに毒されている。顔面に石が飛んで来るのも十分に危険である。

「レレーナ、悪戯も程々にしないとダメだぞ。ユファイに何かあると

コーネリア姉上が鬼の形相ですつ飛んで来るから」

「ああ。ユファイ姉様は、悪戯避けれなさそうだもんね」

ルルーシユの意見を聞いてユファイが掛からない様な悪戯を作ろうと決めるレレーナ。

ルルーシユの受難は、これから始まるのである。

ビスマルクの受難は、これからも続くのである。

第2話 僕。

皇歴2009年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン

こんにちは、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアの次男 レレーナ・ヴィ・ブリタニアです。

ここは、ペンドラゴン皇宮の中にあるアリエスの離宮内の僕の自室です。

僕には、前世の記憶があります。自我が芽生えた時にはすでに前世の記憶というものを持っていて、当時は非常に混乱した挙げ句に高熱を出してしまいました。

その結果、僕は体の弱い子供だと周囲に思われている様で、皆非常に甘やかしてくれます。

それでも前世の記憶のおかげか増長する事はないですが。

結果、皇族として非常に珍しい慎ましい人だと使用人に思われていて、良い皇族になると期待されています。

この話し方は疲れるから、生前？の話し方に戻すね。

一方で母マリアンヌは別の方で期待している様で、僕にはギアスの適性が非常に高く備わっているらしく、母は実験が成功したと喜んでいました。

まあ詰まる所、小説であった遺伝子操作を行なってギアスの発現率を高めていたんだろう。

遺伝子操作に関しては、前世でもデザイナーズベイビーと言われるものがあつたので、どの世界でも考えるのは同じかと思わされた。

母は、僕のギアスの適性が高いことは喜んでいたが、体が弱いことを嘆いていた。だからこそ妹のナナリーを作ったのだ。親としてはまあ酷い人だが、良い母を演じるその演技力は凄まじく、演技だとは感じさせない。

その母の血を受け継いでいる僕も演技力はそこそこで、一度たりとも前世の記憶を持っている事を悟られていないはずだ。

まあ、前世の記憶などと言うものを持っていると思う奴なんて、初

めから居ないんだろうけど。

そんな状態で兄ルルーシユと妹ナナリー、そして母マリアンヌと使用人の人たちで生活してきたが、ルルーシユ兄様本当にいい人!!
母もいい人だけど、あれは演技だから。

それに対して兄様は、本当に素でいい人。母くれるし、勉強教えてくれるし、ナナリーが生まれてお転婆具合に手を焼いている中でも僕のこと気にかけてくれるし、優しいし、イケメンだし、カッコイイしで凄いなだよ!

…失礼。

僕は、初めルルーシユの弟転生とか幸運だと喜んだのです。

あのルルーシユの弟で、容姿端麗で皇族だよ!

「人生勝ち組じゃん!」と思ったんだけど、よく考えればこれってアリエスの悲劇の際にナナリーの役を僕がする事になるのではないかと思ひ直したときは、恐怖でどうにかなりそうだった。その後ナナリーが生まれて一安心したのだが、今度は妹のナナリーが撃たれるのだと思うと、これまたすごい複雑な気持ちになる訳ですよ。赤ん坊の頃から知っている妹が傷付くのは、想像するだけでも心苦しい。

今は夜で、側から見れば僕は部屋で静謐せいひつなひと時を過ごしている様に見えるかもしれないが、実際は自身の心臓の鼓動が早くなって煩く感じるほどに緊張している。想像するだけでこれである。当日になればどうなるか想像もつかない。実際、ナナリーが居るからといってナナリーが撃たれるとは限らず、未来は未定である。

というか、この世界に転生するって結構ハードだよな。

ブリタニア：圧倒的実力主義と貴族主義、生まれがモノを言うけれど何処に生まれても過酷。

日本：戦争の後奴隷、生きられる気がしない。

ユーロブリタニア：将来展望なし。戦争最前線!

ユーロピア：衆愚政治、圧倒的不利な戦況。

中華連邦：安定の虫けら扱いの民衆。

オーストラリア：永世中立という名の空気。どういいう国か分からない。

「ジルクスタン王国：戦士国。

だからこそ僕は、自分が生き残るための生存戦略を立てる事にしました。

まず僕の目標。

1. ルルーシユとナナリーと3人で仲良く暮らす。ゼロレクイエム断固反対!!

やっぱり兄弟仲良く一緒に暮らせるのが良いよね！平和が一番だと僕は思うよ。

お先真つ暗だけど…気にしちや負けだ！

2. 五体満足に生き残る。

今の現状では、難しいかも知れない。ナナリー…どうしょ。

3. 出来れば原作の人達に会いたいなあ

ミレイとかカレンとかC. C. とかレイラとかアキトとかオルフェウスとか美男美女に会いたいよね！

扇さん？知らない人ですね。

反省してもダメです。

まあ、こんな感じの目標を掲げてこれから先生きて行こうと思いません。

目標遂行のためには、まずは肉体作りと体力作り、そして知恵をつける事である。勉強は母や兄様に教えてもらいながら家庭教師と共に行い、体の方は母とビスマルクに教えてもらう事になっている。

ビスマルクとは悪戯の件で面識が出来た。僕のことを如何にかしようともがく様は、さしずめ父親の様である。

ちなみに、本人にそう言ったら「私とマリアンヌ様の子!？」と呟き暫く呆然した後、「私が殿下を立派な皇帝へとしてみせます」と言っていた。

その発言は不味いだろうと思うが、おかげで色々教えてもらえるので結果オーライと言う事で。

ビスマルクが母を慕っているのは原作知識で知っているが、まさかここまでとは…。

二人の関係は、存外長く。

皇帝である父と母の関係と同じぐらいの長さである。

父と母の関係が変わったのは、皇歴1997年5月6日起きた『血の紋章事件』の時である。

この時に母とビスマルクの関係も変わって行った。

当時皇帝に即位したシャルルに対して、叔父であるルイ大公が反乱を起こしたのである。その際にナイトオブブラウンスがビスマルクとマリアンヌ以外全員が反乱側に加担した。これは、反乱の首魁しゅかいたるルイ大公の老獪なる策によるものであった。

ルイ大公は、貴族たちの自尊心や功名心を煽り、さらに利益で釣って反乱に加担させて行ったのである。本人もここまで裏切ってくれるとは思っておらず、驚いていたらしい。

お陰で皇室間の大規模闘争となったこの事件で、シャルルは反乱勢力を粉碎し、権力基盤を磐石のものとした。その事件の最中に、シャルルはマリアンヌにプロポーズしていた。凄^ひい馴れ初めである。

結果、マリアンヌが皇妃となったのでラウンズはビスマルク一人となり、同僚であったマリアンヌはビスマルクにとって守るべき皇族となった。

よし、難しい事を考えたら眠たくなってきたし、ルル兄様とナナリーと一緒に寝るか。そうと決まれば早速ルル兄様の寝室へ行ってきます。

——— おかしい。

何故僕はここに居るのだろう。

ルル兄様たちと一緒に寝たはずなのに、どうして僕は何処ぞの研究所のような場所で起きているのだろう。

まさかな…。

「おはよう。目が覚めた様だね」

僕は、何も聞いてない。見てない。

扉の方にブロンドヘアの白い服を着た子供が居るなんて見てない話しかけられてない。

「あれ？挨拶出来ないの」

知らない。何も聞こえない、見てない。

「ころs「お早う御座います」うん。お早う」

この人、マジで怖いわ。勝手に拉致しておいて殺すとか。

いやまあ、拉致してる様な人間が人殺すのは、普通か…。

この人、ギアス嚮団の嚮祖だもんね。

「僕のこと覚えてるかな」

V・V が聞いてくるが、最後に会ったのは1歳の時の検査の時だから普通覚えてないよ！僕覚えてるけど！

しかし覚えてると可笑しいから、ここは知らないふりをしよう。

「うん？」

首をコテと傾けて知りませんアピール。唸れ僕の演技力!!

「まあ、普通覚えてないよね、うん。じゃあ改めて。初めまして、僕の名前はV・V。」

V・V 伯父様、容姿と声は可愛いけど本当にやばい人だから会いたくなかった。

「突然ここに来てビックリしてるよね。大丈夫、怖い事は何もないよ」
そう言つて優しく微笑んで来るV・V。

いえ、あなたの存在そのものが恐怖でしかありません。

側から見れば天使の笑みも、真実を知っている僕にとっては悪魔の笑みにしか見えない。

「今日ここに来てもらったのは、君に用があったからなんだ」

あたかも僕が自発的にここに来たかのように言うのはやめてほしい。誘拐してんだから。

まあ、そんな事言える訳もなく丁寧に対応する。

「用ですか？」

「うん。」

そうですか。

帰りたいなあ。

第3話 御引越し

皇歴2009年 ギアス嚮団

目の前にいるのは、金色の長髪の合法シヨタな伯父にして秘密結社『ギアス嚮団』の嚮主である“V. V.”である。

一見可愛い容姿をしているけど、全てを知ってしまった者としては恐怖しか感じない。

どうしよう。

そもそも、僕がここに来る事は結構不味いんだよ。ギアスの事がバレたらどうなるか分からない。

なぜなら僕ってギアスが自然発生？したから、その事でギアスの研究材料にされる可能性が高いんだよなあ。

自然発生の原因は、大凡見当がついてる。

原因は、僕がデザイナーズベイビー的存在であると同時に、ギアスユーザーの両親、そして子供時代にいったギアス嚮団の紋章付きの扉で見た骸骨さん。

特に骸骨さんは、怖かった。子供だから泣く事しか出来なかったけど、お陰で母マリアンヌからは、初めての場所に行って泣いている臆病な子と認識されてしまった。

どうせ僕は怖がりですよ。

そう言う事だから、V. V. と関わるのは嫌なんだよなあ。何もなくても嫌だけど。

「僕に用とは、何ですか？」

「うん。レレーナ、僕に隠してることあるよね」

「…何のことでしょう？」

何!? 隠してる事って。まさかギアスが使えることがバレた!?

「隠し通せると思ってるの?」

やっぱりギアスの事か! 確かにコードユーザーであるV. V. には、何かギアスを感じる力があるのかもしれない。

どうしよう。殺される? 人体実験? 絶対無理!

どうする。

「君だよ、シャルルの天然ロールをストレートにしたのは」
「…」

そっちなあ。確かにシャルルのロールをストレートにする悪戯をしたのは事実だけだ。

それでお兄ちゃんが出てくるか。

「君だよ」

「…僕です」

「どうしてそんな事するの？」

えっ！何、説教されるの？

「シャルル泣いてたよ」

あのシャルルが泣いてたの。本当に？

ちよつと見てみたかったな。

「シャルルのアイデンティティー無くしたら可哀想でしょ」

確かにあれば、シャルルのアイデンティティーかも知れないけどあれいつも朝にセットしてるんじゃないの!?!天然なの!?

「人が嫌がる事したらダメだってママに教わらなかった？」

教わってないですね。

僕のママにそんな一般的な常識はございません。

と言うか、言ってる事は正しいのにすごく納得がいかない。

人体実験や人殺しをして何とも思わない人が言う事かそれ？

鏡見てから言えよ。

「何？言いたい事があるの？」

「何でもありません」

怖いよ。そんな目で見ないで、ちびりそう。

「もうしちゃ駄目だよ」

「はーい」

「…本当に分かってる？」

分かったよ、分かってるよ！

僕だって命が大事だよ！シャルルの髪型とか僕の命、比べるまでもないよ！

「勿論です！」

「まあ、いいか。じゃあ本題ね」

えっ?! 本題、これが本題じゃないの? やっぱりギアスのこと気づいてる??

「大丈夫、怖い事はしないよ。今はね」

今は?! 本当に勘弁してよ! やっぱV・V・鬼畜だわ!!

「なにを、するおつもりで?」

「少し検査をするだけだよ」

「検査?」

「うん。その検査が終わった後は、すぐ帰してあげる」

「:どんな返礼をいただけるので?」

「:君、怖がりの癖に案外凶々しいんだね」

うるさい。タダ働きは、御免蒙る。

ちよつとぐらいお札の品があってもいいだろ?

「:…」

「:分かったよ。好きな物を用意してあげる」

「ありがとうございます!」

「その代わり、しっかりと検査させてもらうからね」

「身体に害がない範囲でお願いします」

流石にお札の品を貰っても体がボロボロだったら意味が無いからね。 ”命大事に” をモットーに生きてますから。

「じゃあ逝こうか」

なんか字が違う気がする!!!

やっぱこいつ僕のこと殺すつもりだろ!!!

あれから、体の隅々まで調べられた。もうお婿に行けない。検査の後は、少し嚮団内のギアス被験者の子供達と時間を過ごした。

ロロとかオルフェウスとかエウリア、トト、クララなんかも居た。

ロロとオルフェウス、エウリアとは少し話したけど、ロロさんもう少し心開いてよ。僕が一人喋ってるみたいで、側から見たら痛い奴だと思われちゃう。

オルフェウスの「可哀想な奴」と言わんばかりの目で見られた僕の羞恥を、少しは慮って欲しかった。

因みに、オルフェウスとエウリアと話している時のクララの形相と言ったら本当に怖かった。

僕が、君に何をした？なんで嫉妬と憎悪の瞳で僕を睨んでくるんだ！

怖かったからさっさと嚮団を後にしたよ。

ブリタニア本国に帰国した時は、“黄昏の間”を通過して皇宮に帰った。

黄昏の間に入った際、父シャルルと母マリアンヌが待っていた。そしてマリアンヌに手を引かれてアリエスの離宮へ帰った。

因みにV・Vから貰ったお礼の品は、“いつか僕がほしいと思ったものをくれる”という権利。シャルルの前で約束の確認をしたから破らないと思う。

…破らないよな？

その後、シャルルはV・Vと何か話している様子だったが、内容までは聞こえなかった。

「レレーナ、検査の結果はどうだった？」

マリアンヌがさっきの検査について聞いてきた。多分後でシャルルから聞くだろうから、嘘を付く必要は無い。

まあ、僕も詳しい結果内容は聞かされていないんだけど。

「特に体に異常は無いとのことでした」

「そう。それは、良かったわ」

「はい！母上」

マリアンヌよ、もう少し安心した顔とか嬉しそうにしまよ。普段演技うまいんだから、何もなかった残念とか思わないで欲しい。

V・V相手に生きて帰ってきた事を褒めてほしいぐらいなのに、検査結果がっかりされるなんて。

そんなことを思いながら帰っていたら離宮に着いたようだ

「おかえり！レレーナ!!」

僕が帰って来たことに気付いたルル兄様が駆け寄って来て出迎えてくれた。ナナリーは、今お勉強中だから後で挨拶しておこう。

「レレーナ、体は大丈夫だったか？」

「はい、ルル兄様。検査の結果、特に悪い所も無いとの事でしたので大丈夫です」

「そうか、良かった。でも無理しちゃダメだぞレレーナ。何かあれば僕を頼るんだぞ」

「はい」

見たか？皆の衆。ルル兄様のこの優しき、尊さを。今のブリタニアにこの人以上の善人は存在しないと断言してもいい程優しい御仁である。

本当にかっこいい!!!

まじ”オールハイル・ルルーシュ”!だわ。地獄の果てまで付いて行きます！ルル兄様!!!

そんな事を言っていた時期がありました。

今現在、僕がいるのは何とまたまたギアス嚮団。

何でかって？

簡単だよ。母マリアンヌが暗殺されたからだよ。その際にナナリーは、目と足を不自由にした。そしてルル兄様とナナリーは、日本へ留学と言う名の人質として送られた。なのに何故僕が此処に居るかと言うと、V・V・V.によってこちらに拉致されたのだ。

あの人ほんとに拉致が好きだよ。反人道的でクズ野郎じゃねーか。

全く、見た目子供だけど中身ジジイなんだから子どもばっか誘拐するんじゃ無いよあのロリコン・シヨタコンが!!

失礼。

でもまあ、生きてることに自分自身安堵してる。ナナリーは、原作通り目と足を不自由にしたけど命はある。僕も五体満足で生きてる。僕は、日本にも送られていない。土蔵の中に押し込められてないし、戦争に巻き込まれない。

兄と妹がそんな目にあうと言うのに、巻き込まれない事に安堵してる自分は、本当に醜いと思う。

ギアス嚮団はギアスの研究と暗殺者の育成を行なっている場所だ。いざという時は、僕のギアスを使つて逃げればいい。

相手は、何処を攻撃して来るかわからない軍隊じゃ無い。

体感時間を止めるギアスと相手に命令を強制させるギアス、筋力増強ギアス、相手の体を遠隔操作するギアス、そしてギアスの効かない冷酷バケモノ…。

あれ、もしかして逃げられない？無理かな？

いやオルフェウス達が原作で逃げたのだから行けるか？

あつ！でもあの時最終的にエウリアがプルートーンに殺されてるじゃん!!!無理無理無理。

生き残れる気がしない。どうすればいい。

温室離宮育ちの僕に石造りの小部屋に硬い布団という新居は、流石に身体に堪えるよ…。

第4話 嚮団

皇歴2011年 ギアス嚮団

僕が嚮団へ拉致されてから数年が経過した。

此処にきてからいろんな検査を受けV・V・とギアスの契約をするはめになった。けれど僕がギアスユーザーである事が、バレた様子はない。バレなかった理由は、わからない。

本当にバレてないかは分からないけど、何も言っていないと言うことはそうなんだろう。

さてこの半年の僕の生活は――

6：00に起きて歯磨きと顔を洗う

6：30に朝食を食べる。

7：00から健康診断を受け

8：30から座学を受け

11：50から昼食を取る

13：00から定期検査して

13：30から戦闘暗殺技能教習を受け

17：00から殺人実技訓練する

18：30から検査検診を受ける

19：00から夕食を取る

20：00からお風呂

20：30から自由時間

22：00に就寝

なんて健康的な刑務所生活：殺人訓練は、健康的では無いな。しかしまあ、こんな生活を数年していると頭がおかしくなりそうだ。

ロロやクララ達がおかしくなったのも頷ける。寧ろオルフェウスやエウリアが正常を保てるのがおかしいと思える。

そんなオルフェウス君たちは、もうじき嚮団から脱出するみたい。まあ僕は、付いて行かないけど。

付いて行った暁には、ハンガリーの田舎の村でオルフェウス達を追ってきた”プルトーン”によって殺されかねない。エウリアを

助けてやりたいけれど僕のギアスは、”KMF”には効果無いんだよ。

「どうしたの、レナ。こんな所で体育座りして」

淡いピンク色の髪をした少女が僕の顔を覗き込んでくる。少女こそオルフェウスの恋人たるエウリアその人である。

「何かあったのか？レナ。お腹痛いのか？」

エウリアの隣で同じ様に僕の事を心配してくれる金髪に翠色の瞳を持つイケメン——オルフェウスである。

「うん。午後の悪戯を考えてるの」

まさか貴方達が脱走した後の事を考えてるなんて言えないし。この二人に誘われたら、例えば地獄の片道切符だと分かっても付いて行ってしまいそうだから知らないフリをします。

ナナリーの時もそうだけど本当に僕って意気地なしのクソヤローだと思う。

目の前の少女が殺されるかもしれないのにそれを言わず自己保身に走っているのだから。こんなに優しくして良い子なのに……。

「…又悪戯か」

「…この前みたいな悪戯は、危ないよ」

知ってるぞその目。ルルーシユ兄様が、悪戯がバレてマリアンヌにアドバイスされてる僕を見る時の目だ。

それにしてもエウリア。昨日の悪戯のターゲットは、嚮団の研究員だよ。君に対して厭らしい目を向けてたロリコンだよ。「イエス・ロリタ・ノータッチ」と言うロリコンの鉄の掟を守れない屑だよ。君に注射する時に、痛がる君を見て興奮する変態だよ。

…本当に優しいなエウリアは。

「この前の悪戯は、流石に不味いだろ」

「そんな事ないよ。彼のコレクションをV・Vに見せたただけだよ」

「正確には、女子達の肌色の写真集をギアスの実験データとしてだろう」

「しかも研究員からの報告書として嚮主様に見せる畜生ぶり」

「エウリアのデータは、全て削除しておいたよ」

「良くやった」

オルフェウスに頭撫でられたよ！やったよ！

昔は、良くルルーシユ兄様に頭を撫でて貰っていたけど『アリエスの悲劇』以降生存確認すら出来てない状況で、頭撫でられたのは久しぶりだよ。

やっぱり褒められるのは、嬉しいね。

「…私のデータもあつたんだ」

「うん。スリーサイズからシャワー室の中の写真まで」

「あのクソヤロー。絶対殺す」

「もう死んでるでしょ」

そう。かの研究員は、昨日V・V.によって直接物理的に処罰が下された。当然、それ以降彼を見た者はいない。

自分のせいで人が死んだにも関わらず罪悪感が全く感じないのは、彼がクズだったからかそれとも嚮団での殺人カリキュラムのせいか。エウリアを見殺しにする事は、納得いかないのかの研究員は気にもならない。

「…ねえ、レナも見たの？」

「当然。見たからある事に気付いたんだ」「殺す」なんでっ!？」

待ってくれオルフェウス！さっき褒めてたじゃん！

アレか！「俺以外がエウリアの裸を見る事は許さん！」って言うやつか！

不味い、殺される!？」

オルフェウスが短刀を逆さ持ちで斬りつけてくる。それをバックステップで躲しオルフェウスの手首を掴むレレーナ。すかさず右膝でレレーナの腹を攻撃しようとするオルフェウス。

腕を離し距離を取ろうとするが、オルフェウスは膝を伸ばし蹴りを入れる。

まともに腹に蹴りを受けたレレーナは、後方へ後ずさる。

本気で殺しに来てる!!!

レレーナは、そう思った。このままでは、本格的に危ないので慌ててエウリアに助けを求める。しかしエウリアは、いつの間にか側に来

ていたクララとお話をしていた。一瞬クララがこちらを見た事に気付いたレレーナ。

「…あのヤロー」

その時のクララの顔をレレーナは、後にこう語る。「邪魔者は、死ね」と言う言葉を表したようなゲスい顔であったと。

「余所見とは随分余裕だなレナ！」

「ギャアあああ！」

オルフェウスとレレーナの仁義なき戦いは、その後V・V・が止めに来るまで続いた。

「本当に酷い目にあった」

「悪戯も程々にね」

「納得いきません。僕がエウリアのデータを削除してあげたのに…」

現在僕は、オルフェウスとの仁義なき戦いをV・V・の仲裁のおかげで3発ほど殴られるだけで…3発も殴られる形で終えてV・V・と二人である研究室に向かっている。正直、オルフェウスに殴られた場所はもう痛く無いけど納得がいかない。

なんで僕が…。

「まあいいじゃない。研究員の方なんか君のせいで死んじゃったんだよ。」

まるで自分は関係ないみたいな風に言ってますが、殺したのあなたですよ。て言うか僕のせいって気付かれています？

「気付かれない訳ないでしょ」

「筆跡も指紋もトレースしてあの人に衣装して他の研究員を通して提出したのに」

おかしいな。結構頑張って衣装して指紋筆跡も変えたからバレないと思っただけだ。

「相変わらず無駄に変装のクオリティ高かったね」

「あれ？ひよっとして見られてました？」

「うん。メイクしてる所からバッチリ」

「気付いててあの人のこと殺したの？やばい奴じゃん。知ってたけど。」

「何？」

「何でもありません」

V. V. がやばい奴である事は、だいぶ前から知ってるから今更だけど。面白半分で殺されたあの研究員は、ご愁傷様。

「歩きながらだけど要件を言うね」

「今日はまだ悪戯してませんよ」

「ブリタニアに帰らない？と言うよりも帰って欲しいんだけど」

【朗報】俺氏、大監獄 ギラス嚮団”よりの出所を申し渡される!!!

やりました！レレーナ・ヴィ・ブリタニア、母が殺され兄妹達と離れ離れにされ母を殺した下手人に人体実験されて早数年。漸く解放される日が来ました。正直脱走以外でこの場所から出られる日が来ると思いませんでした。生きてこの場所から出て帰れるんですね…。

V. V. とか言う永遠のシヨタでサディストで畜生な嚮主。まさに梟雄^{きょうゆう}。悪党の中の悪党にこんないい事が出来るとは、僕はあなただの事を見くびっていました。本当に良かった。

しかし此処で大喜びしたらこのサディストの気が変わるかも知れない。此処は、慎重に対応すべきだ。

「…どうしたんですか、急に？」

「前々から思ってたんだけどね。君此処での生活向いてないと思うんだ」

いや、寧ろこんな人体実験される生活が向いてる人って誰ですか!? しかもこちとら温室離宮育ちのボンボンだぞ！こんな過酷な生活エンジョイできる訳ないだろ！

「…向いてはないでしょう」

「うん。だから出て行って欲しい」

そう言つてV・V・が僕に頭を下げる。この人が他人に頭下げられる事に、そして凄く切実に出て行って欲しいと思われている事に驚く。

人にこんな「出て行って欲しい」と言われたのは初めてで、結構ショックを受けている自分がいる。

そもそもこの人なら邪魔になった段階で殺しそうなものだけど、殺そうとは考えなかったんだろうか。何だかんで甥っ子だから見逃された感じ？

分かん。

しかし出て行けと言うならば出て行こう。此処に留まるのは、危険だ。最終的にルル兄様によつて殲滅される嚮団に留まれば巻き込まれて殺される可能性が高い。あるいは、ルル兄様に対しての交渉のカード扱いされる可能性もある。早々に此処を離れるべきだろう。

「という訳だから、宜しく」

「はい、分かりました」

「じゃあ明日PM7:30に黄昏の間に集合ね」

待つて明日帰るの!?準備できる訳ないじゃん。家具や服、雑貨、本、PCとかが多くあるのに用意できないよ。

「服は、持つて行って。家具とかは、ブリタニアで再購入して」

待つてあの家具は、デザイナーズチェアやデザイナーズベッド、高級マット、高級ソファとすごいお金が掛かっているのに持つて行けないの!?

「あのベッド。僕まだ殆ど使えてないんですけど」

「仕方ないよ。こんな場所であんなベッド用意したら子供達が寄つてたかつて来るのは、明白でしょ」

「…」

「そもそもあの高級家具達は、何処から持つてきたの?」

「通販で…」

「…」

嚮団への配送は、無理だろうなと思いつながらも物は試しと挑戦して

みたら届いてしまったのがこの高級家具達なのだ。

レレーナ自身中華連邦の配送屋スゲエとなったが、それ以上に商品の写真よりも実物が金ピカしていたのは衝撃であった。

そして嚮団でその家具達は、凄く悪目立ちしている。今までコンクリート剥き出しの小部屋に金ピカな家具達が設置されているのは、場違いであるが子供達にとって初めて見るもの、肌触りなのだ。子供達が居座るのも当然であった。中には、オルフェウスやエウリア、ロロ、クララなども混ざっておりレレーナは購入以降一回しかベッドで寝ていない。

趣味の悪そうなベッドだったが寝心地は大変素晴らしく、レレーナは殊の外気に入っていた。

「まあ家具は、諦めて。どうせ向こうでは、アリエスの離宮で暮らすんだから要らないよ」

「確かにそうなんですけど…」

「宜しくね」

「それじゃあ、引越祝いに何か戴けます?」

「相変わらずがめついね。お祝いなんて自分から求める物じゃないよ」

そんな事言ってもV・V・に対して恩を売っておきたいし。

あつ! そうじゃん。プレゼント貰えば良いじゃん。

「もう直クリスマスですしその祝いも兼ねてくださいよ」

「…はあ、本当に凶々しく育って」

「この前の欲しいもの何でもくれると言うお願いも込みで! お願いしますー!」

これで2つ3つV・V・からプレゼントが欲しい。

「何が欲しいの?」

「オルフェウスとエウリア」

この二人は、原作でこれから嚮団を脱出する。でもハンガリーで捕捉され村ごと殲滅される。そしてエウリアはそこで殺され、オルフェウスは復讐に囚われ苦しい戦いを強いられる事になる。

知らなければ何とも思わないけど知ってしまった以上助けら

れる様に行動しよう。

二人を助ける事が出来れば、ブリタニア本国へ帰国した後に僕の理想を叶える為に行動できるかもしれない。

「…そう来たか」

エウリアは、現状ギアスが発現している様子がないので問題無いだろうがオルフェウスは、自身の姿声などを誤認させる事が出来る暗殺向きのギアスを発現させているので難しいかもしれない。

でもこの二人は、嚮団に来てから本当によくしてくれた。皇族としての生活を送っていた僕に嚮団のモルモット生活は、思いの外ストレスで参っていた。そんな僕を二人は、精神的に支えてくれたのだ。お陰で今も元気にやれている。さっきの理不尽な喧嘩だって意外と楽しい。生きている事を実感できる。ルル兄様やナナリー同様、オルフェウスとエウリアも僕は好きみたいだ。ルル兄様とナナリーの時は、何も出来なかったけど…。

だからこそこの二人を何とか助けてあげたい。自分のエゴだけでも、二人は何とも思っていないかも知れないけれども、僕はこの大きな恩を二人に返したいと思っている。

「エウリアは、兎も角。オルフェウスは、優秀な人材だから引き抜かれるのは困るなあ」

確かにオルフェウスは、優秀だ。V. V. にとっていざれ外で活動できるギアスユーザーとなるであろうオルフェウスは、手放したく無いのかも知れない。しかし此方も譲れない。

「クリスマスプレゼントでエウリア。前回の検査の返礼及び引越祝いでオルフェウスをお願いします」

「僕が君にあげたギアスの分は」

「勝手に押し付けたんじゃ無いですか!」

「じゃあ返してくれるの?」

「嚮団を出ますよ」

「生活費も出してやるよ」

「…」

あつ。これダメかも…。

「本当に僕も甘いね」

「何か仰いましたか？嚮主様」

「いや、何でも無いよ」

V・Vが呟いた内容は、側使いの嚮団の神官には聞き取れなかった。しかしV・Vの表情からは喜色満面であった。

第5話 大人の話

皇歴2012年 Cの世界

そこは、夕暮れ時の様な陽の光がさす天空の神殿。この神殿は、人の心と記憶が集まる世界に存在する。V・V・たちはこの世界を”集合無意識”Cの世界”そして”神”と呼んでいる。

V・V・とその双子の弟シャルル・ジ・ブリタニア、その妻マリアンヌたちは、『神を殺す』計画の為にこの神殿の形をした『アーカーシャの剣』を長年掛けて開発したのだ。

その”アーカーシャの剣”に二人の影が延びる。

一人は、世界三大勢力の筆頭『神聖ブリタニア帝国』の第98代皇帝”シャルル・ジ・ブリタニア”。

身長190cm以上で恰幅が良く威厳のある顔、そして何より特徴的なのが白髪たてがみの鬘たてがみロールである。嘗てレレーナによってストリートにトリートメントされた髪は、見事なまでのロールへと戻っていた。

一人は、超常の力『ギアス』を研究し歴史の裏に隠れる秘密結社”ギアス嚮団”の嚮主を務めるV・V・。

皇帝シャルルの双子の兄にしてレレーナの伯父にあたる。しかしその姿は、未だに10代前半に見える。シャルルを皇帝にする為に数多の暗躍を行い、弟を守る為に人為らざるモノになる事を躊躇わなかった生粋のブラコン。

二人は、アーカーシャの剣の上で並んで佇んでいる。

「兄さん、宜しかったのですか。レレーナを嚮団から出して」

シャルルは、V・V・が自身と亡き妻マリアンヌとの子供を嚮団から出すと決めた事が不思議であった。

シャルルは、知っていた。

V・V・がマリアンヌを殺した事を、そしてレレーナを使ってギアスの研究を加速させようとしていた事を。V・V・は、マリアンヌ暗殺の事は何も知らないと言っていた。嘘のない世界を作ろうと約束したにも拘らず。そうまでして何かを望んでいたのだろう。

だからこそ不思議であった。

V. V. がレレーナを嚮団から出そうとする事に、一体どんな思惑があるのかと。

「うん。僕は、レレーナを甘く見ていたみたい」

「…」

「これ以上レレーナを嚮団に置いておいたら、嚮団を乗っ取られかねない」

「それ程ですか!?!」

シャルルは、V. V. のレレーナに対する評価の高さに驚く。V. V. は、ブリタニア皇族故か不老不死のコードユーザーであるが故か、他者に対して見下した様な見方をする事が多い。そんな兄がレレーナの事を評価している。

「僕がレレーナにあげたギアス『全知全能』^{The Allmightly}」

「確か未来を改変するという能力だと聞きましたか」

「うん。僕も初めはそう思ってたし、レレーナ自身もそう思っていた節がある」

「でも本当は、レレーナが想像した力を発現させる力だった」

「!?!」

シャルルは、レレーナのギアスの力を聞かされ驚愕する。ギアスの力は、本来一人につき一つであり能力はその人の本質や願いを表すと思われる。だからこそレレーナのギアスが異常である事がわかる。

シャルルは、過去を変えたいと願った。

C. C. は、他者に愛されたいと願った。

レレーナは、一体何を願ったのか、何を願ったら想像した力を発現する力を発現できるのか。

「…想像した力を発現するとは、こういったものなので」

「正確には、嚮団の子供達のギアス能力を使えたり全く知らない能力を使えたりとかかな」

「…」

「少なくともロロやクララ、オルフェウス、アリス、サンチア、ルクレティア、そしてシャルルとビスマルクのギアスも確認できているよ」

「!?!」

まさか自身やビスマルクのギアスをコピーされているとは。いつの間にもどうやって自分達のギアスを知ったのかと言う思いを抱く。

さらに複数のギアスを使えると言う事実。複数のギアスを使えるという事は、あらゆる超常の力を使う事ができるという事。

それは、まさに――

「…全能」

「そう。神にも等しい力を持った怪物」

「兄さん、何故レレーナを本国に返す必要があるのです」

シャルルは、考える。確かにそれほどの力を持ったレレーナを嚮団へ置き続けるのは、危険だろう。しかしだからと言って帝国本国へ返しても本国で力を付けてしまつては、それはそれで危険である。一思いに嚮団で殺してしまつた方が自分達の計画の為に、良いのではないか。むしろV・V・Vならば適当な理由を付けて暗殺をし事後報告だけして来るのではないかとすら思える。

何故…。

「…」

言つてはいないが、V・V・V自身実際にはレレーナを何度か暗殺しようとした事がある。しかしレレーナのギアスの前には、全てが無駄であつた。

基本的にレレーナの使っている”未来を改変”する力は、不特定多数の未来を見て最も自分の為になるものも未来を選択出来る力でありそれは、未来を見る事が出来るのと同義なのである。

自分が死ぬ未来を見たらそれを回避する未来を選択し生き永らえ、ヤバイ薬を盛られそうになればその薬を未来で壊し自分に盛られない様にして、さらに薬を盛ろうとした研究員を悪戯抹殺者リストの対象に加える。それが嚮団へ来てからのレレーナの生活であつた。

「さつきも言つたけどこれ以上嚮団へ置いておけば嚮団そのものを奪われ僕達の計画も達成出来なくなる可能性が高い」

「…」

「そしてレレーナを暗殺しようにも未来を選択し改変できる能力の前

では、あらゆる暗殺方法が無意味になる」

「兄さん自身であればレレーナのギアスであったとして未来を見る事も改変する事が出来ないのでは無いですか」

シャルルは、コードユーザーであるV・V・であればギアスが効かないのではないかと提案してみる。

実際にレレーナのギアスをもつてしてもV・V・の未来を見る事は出来ない。

しかし――

「確かにレレーナのギアスでも僕の未来を見る事は、出来ない。でもレレーナ自身の未来を見る事は、できる」

つまりいくら暗殺者であるV・V・の動きを察知出来なくても、自身が死ぬ未来を見る事が出来る。そして自身が殺される際に下手人の姿を見られればその人物に対して警戒を行い下手人を先に殺せばいい、見る事が出来なければ見れないギアスで見れない相手――

――コードユーザー――を想定すれば良い。という事になつて一度も暗殺は成功しなかった。

成功していればレレーナの帰国の話はないのだけれど。

「ならば遅効性の毒や致死率の高いウイルスを用いれば良いのでは？」

「レレーナの未来を見る力は、力の一端であつて全てじゃない。レレーナの未来を改変する力は、複数の未来を見た上で自分にとって最も都合のいい未来を作り選択出来るもの」

「…」

「わかりにくいよね。簡単に言うと致死率の高い毒を盛られたとしても、何かしらの事象によって助かる未来とそのまま死んでしまう未来がある。

『右手でリンゴを掴み食べる未来』と『左手でリンゴを掴み食べる未来』の様に。

仮に右手に毒を塗られていけば『右手でリンゴを掴んで食べる未来』を選択した瞬間にTHE ENDとなる。しかし『左手でリンゴを掴んで食べる未来』を選択すれば毒を喰らう事はなく、その時はT

HE ENDとなる事はない。これがレレーナの未来を見る力。

そして仮に毒を盛られて体を蝕まれたとしてもレレーナは、『毒の耐性を奇跡的に持っていて重体にならない』と言う未来を作り選択出来る」

「!？」

「レレーナを殺す事は、事実上不可能なんだ」

「な、何か弱点の様なものは、無いのですか？」

「分からない。正直僕じゃ手に負えない存在だよ」

シャルルは、思う。「兄さんの手に負えない」存在をどうやって自分は手懐ければいいのだと。

「でも心配しないでシャルル。レレーナは、扱いを間違えなければ大丈夫だよ」

レレーナが聞けば「僕は危険物か！」とツツコミを入れるであろうセリフをV・V・が口にする。

「扱いですか？」

「そう。今回嚮団を出る際に強請られてね、ギアスユーザーを二人引き抜かれる事になってね」

「ギアスユーザーが二人……」

レレーナ一人ですら受け入れに右往左往しそうになっているのに、他に二人もギアスユーザーがブリタニア本国へ。その上自身の住むペンドラゴン皇宮へ来ると言う事にシャルルは、らしくなく自身の顔が引き攣るのが分かった。

「二人は、自身の姿声を他人に誤認させるギアス。暗殺任務に向いている能力者だね」

「暗殺……」

シャルルは、自身がレレーナに好かれていないであろうと思っている。彼の母をみすみす暗殺された挙句、暗殺者であるV・V・に対して何も出来ないでいるのだ。その上彼の兄ルルシユとナナリーと妹を實質人質として日本へ送り攻め込んで死なせた事になっているのだから。レレーナが自分を嫌いにならない理由が無いのだ。

そんなレレーナが暗殺技能を持った仲間と共に本国へ帰ってきた

場合、間違い無く自分に対して暗殺者を差し向けて来るだろう。

ギアスユーザーの暗殺者など悪夢以外の何物でも無い。

「大丈夫だよ、シャルル。レレーナは、そんな短絡的な事をするような子じゃ無い」

「…」

「情けは味方、仇は敵也」

「？」

「レレーナが以前言っていた言葉なんだけど、あの子は恩を仇で返すような子じゃ無い」

「しかし…」

「だからこそ今回あの子が嚮団を去る際に二人のギアスユーザーを引き抜く代わりに、僕が指定した人間を10人暗殺してくれる事になった」

「10人暗殺ですか」

「うん」

「だからシャルル。レレーナの事宜しくね」

V. V. は、弟シャルルの方を見上げて楽しそうに笑う。

それを見てシャルルは思う、自分の兄は少し見ぬうちに変わったと。レレーナに関わって変わったのだと思った。レレーナに対して少し嫉妬した。自分の兄に対して影響を与える事が出来た事に。そして気付く。

マリアンヌを殺され嘘を吐かれ、兄に対して失望した。憎悪した。それでも自分は、兄を家族として大事に思っているのだと。

兄が楽しそうに笑っている。

これからレレーナが帰って来る。

シャルルは、密かに願う。自分が11人目の暗殺対象ターゲットにならぬ事を…。

第6話 ブリタニア帝国

皇歴2013年3月28日 アリエスの離宮

「誕生日おめでとう！レナ！」

「おめでとう。レナ」

「ありがとう、二人とも」

今日は、僕の誕生日。そして就職する事になった。その為今日は、嚮団から引き抜く事に成功したオルフェウスとエウリアと3人でいつもより少し豪華な料理を食べている。

普通の皇族であれば多くの貴族や皇族、文化人、官僚、軍人などがお祝いに駆け付けるであろうが、生憎僕にはそんな風にお祝いに駆け付ける者は居ない。この場所に居るのは、3人だけ。使用人すら居ない。

昔、まだマリアンヌやルルーシユ兄様、ナナリーが居た頃は、後援貴族のアッシュフォード家を筆頭に貴族や軍人が多く訪れていた。オデユツセウス第1皇子やギネヴィア第1皇女、シユナイゼル第2皇子などの誕生日に比べればはるかに少ないがそれでも今日よりは列席者が居た。と言うよりも今日が居なさ過ぎなだけであるが…。

そもそも嚮団から帰って来た僕が2011年から二年間どうしていたかと言うと。

遡る事二年前

皇歴2011年

嚮団から『Cの世界』を経由して神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴンへ帰国した。ペンドラゴン皇宮の”玉座の間”へビスマルクの先導で行き、シャルルへ帰還の報告を行う。

シャルルがV・V・と『Cの世界』で何を話したかは知らないが、碌な事を話していないであろう事は見当が付く。なにせシャルルが異

様にこちらを警戒しているのだ。

帰還報告で謁見した際に”ナイトオブワン”のビスマルクに元”ナイトオブツ”のベアトリス・フアランクス帝国特務局総監さらにギアス嚮団の神官達がシャルルの両側に整列していた。

凄い眼力で僕を睨み付けてくるシャルルは、本当にV・V・に何を言われたのだろうか。

「…良くぞ戻ってきたレレーナ」

そう言うならもつと嬉しそうな顔しなよ。凄く不本意だと顔に出ていますよ。

全く、子供じゃないんだからもつと社交辞令が上手くならないと皇帝辞めた後苦勞するよ。やめるときは、死んだ時なんだろうけど、この人の場合。

それでも日本人をもつと見習うべきだと思う。ここまで露骨に嫌そうな「お帰り」は、聞いた事がない。

「お久しぶりです、父上。レレーナ・ヴィ・ブリタニア本日帰国いたしました」

スツと片膝をつき玉座に頭を垂れる。我ながら上手く出来たと思うがシャルルたちは、全く反応しない。

正直気が重い。

「お主の帰国を嬉しく思う。今後のことは、ビスマルクに伝えさせる故今日はもう休むが良い」

そう言うときシャルルは、玉座を立ち上がりさっさと玉座の間を出て行ってしまふ。それに続いてビスマルク以外の者達もいそいそと出て行ってしまふ。

本当に歓迎されていないなと思う。

「無事の帰国、このビスマルク嬉しく思います」

シャルル達が出て行った後、ビスマルクが僕に近づいてそう言った。ビスマルクの顔には、少し緊張感が表れていた。シャルルといいビスマルクといい何をそんなに警戒しているのか分からないが、此方としては今後の僕たちの生活を保障して貰えれば良いので無茶する予定は無いのだけどね。

「これからレレーナ殿下が生活される事になるアリエスの離宮へご案内致します」

「またあそこに住めるんだ。他の二人も一緒だよね？」

「はい。嚮団より来た他の二人もご一緒です。その方が殿下も居心地が良いだろうと陛下が仰っておられました」

「それは、感謝しないとね。まあ後援貴族も居ないのにあんな広いところで三人生活だと施設管理だけで大忙しだろうけど」

「ご安心下さい。既に我が家の者達が掃除等を行い、殿下をお出迎えする準備は、整っております」

「そっか、ありがと。なら行こうか」

そう言った後に僕は、玉座の間を出る。その後ろをビスマルクが付いてくる。これから住むアリエスの離宮は、以前家族で住んでいた場所であり皇宮内の道も以前と同じなので迷う事は無い。しかも途中から馬車なので間違う事も無い。

唯一の懸念は、道中で他の皇族貴族にバツタリしないかどうかだろう。

貴族は、まだいい。精々出会い頭に嫌味をネチネチと言ってきて殺したくなるだけだろう。問題は、皇族だろう。母マリアンヌは、騎士侯であったが出自は、平民であった。その為に他の皇族や貴族からは、快く思われておらず大変嫌われていた。側から見ても凄い嫌味を常に言われていた。

まあしかし、そう言った有象無象の者達を一切気にせず凜とした態度で向き合っていた母マリアンヌは、なんだかんだ思う所はあってもカッコ良かった。ルル兄様やナナリーは、そう言った嫌味や嘲笑を気にしていたし、僕自身すごく不快であって顔を顰めることが良くあった。そういう顔をすると「どうしたの？」と薄笑いしながら言ってくる皇族や貴族達を思い出すだけで地獄に叩き落としたくなるが、後々煩わしくなるので悪戯は、程々にするように以前ビスマルクに言われている。アドバイスをくれる母も居らず、話を聞いてくれるルル兄様達も居ない。

その上にオルフェウスとエウリアを嚮団から引き抜く際にV. V.

より出された条件を遂行する為に忙しくなるので愚人供の相手をしている暇は、無いのだ。

まあ実際貴族達は、僕より宮廷政治や暗躍に優れた者ばかりなんだけれども。性格が本当に悪い！

そうこう考えていると『セントダーウィン通り』沿いにあるアリエスの離宮へ到着した。

”セントダーウィン通り”は、皇族の離宮が建ち並ぶ通りであり、元々は皇族の私道であった。現在も皇室の許可無く通行することは出来ない。アリエスの離宮もこの通り沿いに存在している。

アリエスの離宮の正門前を抜け車寄せに馬車が止まり玄関前に降り立つ僕とビスマルクを迎えてくれたのは、ヴァルトシュタイン家の執事とメイド、そしてオルフェウスとエウリア達だった。彼らは、玄関の両端に整列し頭を下げた状態で僕らを迎えてくれる。オルフェウスとエウリアだけは、面白そうに興味深そうにそう言った状況を見ていた。

辺りを見回すと数年間家主がおらず手入れがされていなかったにも関わらず、埃や汚れが全くと言って良いほど見当たらず、玄関から見える庭には雑草などが一切なく草木は確りと手入れされていた。こう言った状態を見ると自分がブリタニアの皇族だという事を嫌という程感じる。

皇宮内では、同じ皇族でも母の身分や位を意識せざるを得なくて自身が同じ皇族であるという事を忘れそうになるが、外では自分もまた皇族で他の人達と違うのだと感じる。地位があり、名誉があり、そして責任がある立場なのだと思い知らされる。と言うよりも勘違いしそうである。自分が選ばれた人間だと。今でも若干これが当たり前だと思えてしまう事に、僅かながらの恐怖とこの世界に馴染んでいると言う安堵が心に存在する。

「じゃあ、これから宜しく――」

これからこのアリエスの離宮で過ごすのかと思うと少し楽しみだと思っていたんだけど、この後すぐにビスマルクの言葉を聞いて絶望した。

「殿下、来週より『ボワルセル士官学校』へ入学して頂きますので、ご準備の程を宜しくお願い致します」

「…え」

「私は、明日もう一度参りますので本日は、ゆっくりとお身体をお休めください」

「ちよつ!？」

ビスマルクが一方的に来週の事を告げるとそそくさとアリエスの離宮を後にした。

「レナー！」

ビスマルクが乗った馬車が車寄せから出立するのを見送る形になった僕は、背後から近付いてくるオルフェウスとエウリアに気付かなかった。エウリアに背後から飛び付かれ身体が前に倒れそうになるのを右足で支えながらエウリアの方へ顔を向ける。

「エウリアー！いきなり飛び付かないで！ビックリしたよ！」

「気を抜きすぎよレナ」

「そうだな。レナなら気付けただろう」

オルフェウスは、ギアスの力の事を言っているのだろうが、ここでは執事やメイド達が居るので“ギアス”と言う単語を使わないようにしているようだ。その判断は、正しいと思う。もしギアスの事を言えば、幾ら子供だろうと頭がおかしいと思われかねずこの場所に居るのが難しくなかりかねないからだ。

「常日頃から見てる訳じゃないんだよ、オルフェウス兄さん」

「まあ確かにそうだろうな」

「それにしても以前は、こんな大きな場所に住んでいたの？」

「そうだよ。母様とルル兄様、妹のナナリーと使用人とかと一緒に住んでたんだよ」

「本当に皇族だったのね」

「今も一応皇族だけどね」

二人には、嚮団を抜ける際に僕の出自について説明して一緒に嚮団を出ないかと提案した。最初は、二人とも驚いていたけど勝手に脱出するリスクとここで合法的？に脱出するメリットを説いて一緒に来

て欲しいとお願いした。それは、もう凄くお願いした。必死にお願いした。

お願いの甲斐あって二人は、一緒にブリタニア帝国へ来てくれる事になった。

意外にもV・Vが二人を後推してくれた。僕が二人を引き抜くにあたっての条件や本国での僕の扱いについて説明してた。一瞬「コイツ本当にV・Vか!」ってなったけど、その後凄く殺気をぶつけてきたから本物だと理解した。

説明を聞いた後、二人とも凄い顔で僕の事を見てた。

「どうしてそんな無茶をしたのか」や「一人でやろうとするな」など、もお本当にこっぴどく怒られた。正直この世界に転生してから初めて本気で怒られたような気がする。強くてニューゲームな状態の僕は、人に怒られるような事をする事がなく母のマリアンヌも自由にさせてくれたので本当に怒られない。だからだろうか少し本気で怒られた事が少し嬉しかったのは僕が子供に戻ったからかな？

二人が僕を心配して怒ってくれている事が分かっているので嬉しいんだろ。結局二人には、今後は何かあったら相談する事手伝わせる事などを約束させられた。

人に心配されるのは、嫌じゃないね。

「これからどうする?」

「レナは、来週から士官学校という場所に行く事になるんだろ」

「そうだね」

エウリアとオルフェウスと共にアリエスの離宮の僕の部屋へ向かって歩いている途中で、これからの事を考える。

ビスマルクの話では、僕はボウルセル士官学校へ行く事になる。士官学校ということは、僕は軍人になれと言うことだろう。後援貴族がない僕にとって自分の力だけで生きていかなければならない。要職に就けるほど力も無い。だからこそ軍人として出世すること。要職に就き、他の貴族達に害される事も無くなるだろうと言う考えなんだろう。

僕が実力行使で皇族や貴族を殺さないように離れさす目的もある

のかもしれない。

「まあ、後援貴族のいない僕が力を持つには、自分の力で出世できる軍の方が都合がいいんじゃない」

「そう言うものなの？」

「嚮団の外の事はレナの方が詳しいだろうから任せるが、何かあればちゃんと言うんだぞ」

「はーい！」

「本当に分かってるのか…」

それから士官学校へ通い軍事学の社会科学的分野の安全保障学や戦争学、軍事行政学、戦略学、戦術学、統率論、さらに軍事工学、軍事心理学、軍事地理学などを勉強した。正直言ってレレーナ・ヴィ・ブリタニアのポテンシャルが高過ぎて余裕であった。

さすがマリアンヌの息子でルルーシュ兄様の弟だと思った。勉強すればするほどスポンジの様に知識を吸収できた。

おかげで飛び級で二年で士官学校を卒業した。

因みにオルフェウスも同じボワルセル士官学校へ入学し同じ年に卒業しました。オルフェウス本当に有能！

エウリアは、アリエスの離宮の管理と施設管理と経営学、経済学などを離宮で勉強し、片手間で僕の指示に従って株の売り買いをして資産を作ってもらっていた。二年間で結構稼がさせて貰った。

未来を見るギアスを使えば株価を表す折れ線グラフの先を見ることができ、最安値で株を買い最高値に近い所で売り儲けを出すことができる。ギアスの無駄遣い？有効利用です。

まあそうやってそれぞれこの二年間を生活していた。

「レナ！オルフェウス！学校卒業おめでとう！」

「ありがとうエウリア！」

「ありがとう！エウリア姉さん！」

エウリアが僕の誕生日をお祝いしてくれた後に卒業に関してもお祝いしてくれた。オルフェウスは、少し頬を染めて恥ずかしそうであつたがからかうと後が怖いのでやめておく。彼の扱いは、ここ二年間で学習した。嚮団の時よりもお兄ちゃんらしくなった。

ちよつと小つ恥ずかしいけど嬉しいものである。

「二人は、これからどうするの?」

エウリアがこれからの事を僕の分のサラダをお皿に取りながら聞いてきた。

「俺は、明日からビスマルクのもとで騎士としての訓練を受ける事になつている」

オルフェウス、仮にも義理の親を呼び捨てて…。オルフェウス・ヴァルトシユタイン、それが今のオルフェウスの名前である。

初めオイアグロ・ジヴオンという男がオルフェウスをジヴオン家で預かりたいと言ってきたが、ジヴオン家は『メル・ブリタニア』の後援貴族で下手をしたらオルフェウスをメル家に奪われかねないので丁重にお断りした。

確かオイアグロは、オルフェウスの叔父に当たる人だつたはずだから、同じジヴオン家の男として捨てられたオルフェウスに思うところがあるんだろう。僕には、関係ないけど。

そのオルフェウスも士官学校を飛び級で卒業したのでビスマルクの直属部隊に勧誘された。オルフェウスは、将来的には僕の選任騎士に就く事を目指してくれているので頑張ってもらいたい。本当にありがとう!オルフェウス!!!

「オルフェウスがレナの騎士になってくれたら私も安心だわ」

「だろ」

「二人は一体僕をなんだと思つているの」

「士官学校の入学式で教官のカツラを吹き飛ばした人が何か?」

「いえ。何でもありません」

確かに入学式でカツラを吹っ飛ばしたのは僕だ。けどあれは、故意じゃない。貴族の後援を受けている態度のデカイ学生がうざつたかつたので、体育館のステージで証明書を受け取った後に其奴の証明

書が入った筒を後ろから突き飛ばし、飛ばした先にカツラの教官がい
らっしゃったのだ。

僕の代わりに態度の悪いその学生が教官に怒られ、学生指導室へ引
きずられて行った。日頃の態度が悪いから言葉を信じて貰えないん
だよ。

「あの時、バルトシュタイン卿が天を仰いでたよ」

「あああの全身真っ黒だった不審者」

「父兄席に居たな」

ビスマルク：なんでお前がそこに居る。あと父兄席で「マリアンヌ
様。レレーナ殿下は立派に育っておりますぞ」と号泣するんじゃない
！おかげで僕の後ろにナイトオブワンが居ると思われて学校生活は、
比較的健やかに過ごす事が出来た。それは、感謝してるよ、うん。

「僕の方は「殿下!!!御卒業！おめでとう御座います!!!」：。ジェレミア
卿か」

僕が自分の事を話そうとしたらそれを遮る暑くるs熱の籠った声
が僕らの部屋に響き渡る。

「このジェレミア！心より！心より！お祝い申し上げます!!!思い返せ
ば殿下がボワルセル士官学校へ入学された日！その日は、その年一番
の快晴であり前日の大雨が嘘の様な青空でありました！まさに天気
すら殿下を祝福するかの様で！このジェレミア感動のあまり目から
大粒の雨が流れてしまう程でした！そして入学式では、不屈き者を見
事撃退され帝国最強と名高いビスマルク・ヴァルトシュタイン卿すら
も感動のあまり涙を流しそうになり天を仰いでおられました!!!」

「：あれって喜んでたのか？」

「どちらかと言うと嘆いてた方かな」

「さらに学校では、常に最優秀な成績を収められ史上初の二年での飛
び級を成し遂げられました!!!」

「オルフェウスも一緒にだけどね」

「当然だ」

「二人とも流石よ」

その後もジェレミアの僕へ過大な賛美は続き最終的にオルフェウス

スによつて物理的に止められた。そこで漸く冷静さを取り戻したジエレミアは、自分が許可もなくアリエスの離宮へ立ち入ってしまった事に気付いた。そこで再び僕に対して謝罪の言葉の嵐が起きる。正直長いよ。

「もういいよ、ジエレミア卿」

「しかし殿下！」

「レナがもういいって言っているだろ」

「オルフェウス！貴殿がそんな事を言つてどうする!? 貴殿は、いずれ殿下の騎士になろうというのに殿下の警備に関してちゃんと考えんか！」

「問題ない、不審者だったら入った段階で殺している」

「貴殿の様な子供に殺される程このジエレミア・ゴットバルトは、弱くはないぞ」

「どうかな、あんたの様な熱しやすい男など直ぐに制してやるよ」

「何をおお!!!」

「やるかああ!!!」

いつの間にかオルフェウスとジエレミアが二人で喧嘩を始めたので、僕はエウリアと一緒に夕食を続ける。

正直オルフェウスとジエレミアは、結構仲がいいと思う。ああやつて会うたびに喧嘩をしているが何だかんだで楽しそうであるし、オルフェウスは年上の同性とああやって絡むのはジエレミアが初めての様だから楽しんでる節がある。

まあ実際二人の実力は、手段を選ばずに殺し合いをすればオルフェウスが勝つ可能性がない訳ではない。しかし正面から騎士として戦えばジエレミアが勝つだろう。まだ子供のオルフェウスに負けるほどジエレミアは、弱くない。騎士としては、間違いなく一流である。

「結局レナはどうするの」

エウリアがさっきの続きを聞いてきた。

「僕は明日から機密情報局へ入局する事になったよ」

そう。僕は、士官学校を卒業し明日からブリタニア皇帝直属の諜報機関『機密情報局』へ就職する事になりました。

なんで？

第7話 E・Uへ

皇歴2013年 帝都ペンドラゴン

今僕は、皇帝直属の諜報機関『機密情報局』が入っている庁舎に来ている。

入局式を終えた後に同期となる人達と挨拶を行い、新人研修を受けた。3ヶ月程の新人研修で情報収集技術としてヒューミントとシギントについての研修、エージェントの獲得方法、護身術、KMF操作技術、監視術の研修そして拷問耐久訓練を行なった。

僕って皇族だよね？

皇族が拷問耐久訓練するの？

士官学校やギアス嚮団で拷問耐久訓練をやって来たけど、本当にキツかった。

まあでも一度やった事のある訓練は、他の人より余裕ではあった。拷問耐久訓練中の指導官が化け物を見る様な顔で僕を見ていたのは大変遺憾である。

確かに嚮団での訓練の方が苛酷だったのは事実だ。特にV・V。がする時は、悲鳴が上がるのは当たり前、途中から心を閉ざしてしまいう事が多々あった。その経験が役立ったのは、嬉しい様な悲しい様な…。

そして今日、今後の配属先について辞令が出される。

同期の面々と講堂に集まり正式に行政本部長より言い渡されるのだ。既に僕以外の面々は、新たな配属先が決まり直立不動で整列している。

「レレーナ・ヴィ・ブリタニア殿下！」

「ハイ！」

「貴殿をユーロピア作戦部諜報第1課への配属を命じる！」

「イエス・マイ・ロード！」

「貴官らの健闘を祈る！」

行政本部長から辞令を受けてそれぞれが講堂から出て行く。僕も自身に与えられたデスクに戻った。

そして頭を抱えた。

なんで僕が最前線勤務!?

敵国で諜報任務とか、皇族のする事じゃないだろ!

いや確かにルル兄様やナナリーは、これから戦争ふっかける国に実質人質として送られたのも異常だと思うけど、諜報員として送るのも如何かと思う。これがブリタニアか…。

せめて大使館付きとかにして欲しかった。

ブウウウ、ブウウウとデスクの上に置いていた携帯端末が音を立てて振動した。端末を手に取り開くと、ビスマルク・ヴァルトシユタインと表示されていた。携帯に出ると直ぐに庁舎の正門前に呼び出されて、特務局職員にそのままペンドラゴン皇宮へ連れて行かれた。

連れて行かれた先で皇帝”シャルル”、特務総監”ベアトリス”、ナイトオブワン”ビスマルク”が待っていた。

「レレーナよ、貴様はユーロピアに派遣される事になったそうだな」

「はい」

そりやあ皇帝直属の機情構成員で皇族の人事なのだ、皇帝に話が伝わるのは当然だろう。シャルルが知っている事は、不思議じゃない。しかしそんな他人事の様にならなくても…。こっちは結構絶望的状态で困惑しているのに。

「殿下。思う所もありましたが、殿下が嚮主V・Vとの約束で暗殺する対象があと3人残っております」

「そうだね士官学校時代に国内の対象を七人始末したから、後3人だね」

「残りの3名は、外国におりますので軍に所属すると暗殺を遂行するのに何かと不便でしょうからと」

「ああなるほど、配慮して頂き有難う御座います」

確かにV・Vからオルフェウスとエウリアを引き抜く条件として出された暗殺対象者10人の内7人は、すでに始末したが残りの3人は外国の政治家や軍人なので今の状態では、手を出せないのだ。特に『導師』というE・Uの裏の実力者は、とても手を出せる状況では無い。まず居場所が分からない。

そういう意味では、E・Uでの諜報任務は自由時間もありません。導師の捜索、暗殺に時間を割けるかも知れない。此方に配慮した人事だったのだ。

「来週からユーロピアに潜入する事になるのだ。速やかに支度をして見事役目を果たしてみよ」

「イエス・ユア・マジエステイ」

全く遺憾ではあるが、此方に配慮して貰った以上此方も全力で任務を全うしなければいけない。

E・U侵攻に役立てる様に頑張りましょう。

アリエスの離宮

シャルル達との面談を終えて機情の庁舎へいったん戻り荷物をまとめてアリエスの離宮へ帰ると、オルフェウスとエウリアが食事の準備をしながら待っていてくれた。

そこで来週からE・Uへの諜報活動をしに行く事を伝えた。二人とも驚いていた。僕も驚いたよ。

「しかし皇族が敵国で諜報活動とか正気とは思えないな。レナ、お前本当に皇族か？」

「皇族の筈なんだけどねえ」

「オルフェウスも一緒について行ってあげられないの？」

「下っ端の諜報員にお付きが付いたらおかしいでしょ」

「何かあったらどうする。やっぱり俺も」

「大丈夫だよ。いざとなればギアスもあるし」

僕のギアス全知全能をもってすれば諜報任務は、問題なく遂行できるだろう。

問題は、導師の暗殺任務の方だ。

導師は、“双貌のオズ”においてオルフェウスが暗殺ミッションを受けたターゲットである。E・Uの影の支配者として長く君臨しE・

Uの政財界の上層部から絶大な信頼を得ている人物であり、ギアスの事を知っている謎の人物でもある。占星術師を名乗り盲目でありながら相手の運命や本質を見抜くことができる。オルフェウスがギアスを使い他者へ変身しているにも関わらず、その正体を看破しオルフェウスを捕らえ拷問を行なった事や未来が分かっている様な事を言っている事からギアス嚮団の関係者である可能性が高い。

機情ですら正確な情報が入手出来ない謎の人物である。そんな彼の暗殺を行わなければならないとは、ほんとと困ったものである。

「レレーナ殿下！ユーロピアに赴任されると言うのは、本当でありますか!？」

また熱い男が来た。

「ジェレミア卿、また勝手に…」

「ジェレミア！入る時は、ちゃんと確認しろと言っているだろう!」

僕は、ジェレミアの登場に眉間を抑える。

オルフェウスは、いつもの様にジェレミアに注意を行なっているがジェレミアには、響かない。

「殿下！お一人で敵国に潜入など危のうございます！このジェレミアがご一緒致します!」

「あつ結構です」

「イエス・ユア…、何故ですか!？」

荒ぶってるなあジェレミア。でもさつきも言ったが下っ端の諜報員にお供がいたらおかしいだろ。

「俺もさつきから同行すると言っているんだが、許可してくれないんだ」

「何を言っているオルフェウス！それを説得するのが貴殿の役目であろう!!!」

「分かっている！だからさつきからレナを説得しているんだ！邪魔をするな!」

「何をおお！ならば何方が殿下に同行するか今ここで決めようではないか!!」

「いいだろう！俺が貴様を倒してレナの護衛をする!!!」

またまた始まったオルフェウスとジェレミアの真剣勝負。「私の為に争うのはやめて」と言わなければならぬかな？

柄じゃ無いね。何方かと言うと「争え、勝った方を大事にする」かな…違うな。

「また始まったね」

「オルフェウスもジェレミアもなんだかんでお互いの事を認めてるんだらうね。いつも楽しそうだ」

「本当にね」

「まあ、どっちが勝っても連れて行けないけどね」

「どうして？」

「向こうに行ったらまた大学にでも行こうと思う。そこで中央に近づけそうな子供を使って政治家や官僚に接近しようと思ってるね」

「二人がいると出来ないの？」

「オルフェウスはともかく、ジェレミアはスパイを疑われるだらうね」
常識的に考えて子供と大人だと子供の方が疑われ難い。確かにオルフェウスを連れて行ってもいいんだが、彼を連れて行くとエウリアが本国で一人になってしまう。他の皇族や貴族達がどう動くかわからない上に、V・Vが本当に何もしてこないのか分からない。

だからこそオルフェウスには、本国に残ってもらいたいエウリアとアリエスの離宮を守ってもらいたい。

その事をエウリアに伝える。

「なるほど、つまり私が心配なのね」

「そりゃねえ。オルフェウスとエウリアには、出来れば幸せになつて欲しいからね」

「ふふ。ならこうしましょう」

「？」

エウリアが何か思いついた様に嬉しそうに笑う。

「オルフェウス！ジェレミア卿！ちよつと来て！」

エウリアが二人に声を掛けると二人が武器を納めて此方に戻ってくる。二人は、エウリアが何か嬉しそうにしているのを見て僕同様に首を傾げる。

「どうかしたのかエウリア？」

「どうしたのだ？」

「あのねレナは、私が心配でオルフェウスを連れて行けないらしいの。だからオルフェウス以外の人に私を守ってもらってオルフェウスにレナを守ってもらうのは、どうかな」

「エウリアが心配？」

「エウリア嬢は、しっかりとしておられると思いますが？」

二人は、どう言うことなのかと聞いてくるので先ほどエウリアに伝えた事を伝えた。勿論ジェレミアが居るので、V・Vの事は隠したが、それでも皇宮内での僕の立場を言えば二人も他の皇族や貴族がエウリアを害そうとする可能性がないとは言えない事に気付く。

「確かにエウリア嬢が一人で残るのは、危ないかも知れませんが」

ジェレミアは、自分がレレーナの赴任先を知った理由を3人に伝える。

ジェレミアは、皇宮内で他の皇族貴族達がレレーナがE・Uへ赴任するのは実兄のルルーシュやナナリーと同じで人質的役割であり皇帝の勘気に触れたのだと言われていたのだ。そのため居ても立っても居られずジェレミアは、アリエスの離宮へ赴いたのである。

「言い触らしているのは、ギネヴィア姉様かカリーヌ辺りだろう。ヴィ家の事がとことん嫌いのようだからね」

「でも如何してそんな事を…」

「士官学校を飛び級主席で合格した事と機情への入局で殿下の評価は上がっております。その上ナイトオブワンのヴァルトシュタイン卿が、殿下の後見をしております。そのため一部貴族の中で、殿下を支持しようと言う声が出てきております」

「具体的には」

「ゴットバルト家」

「…」

「まあ、分かってはいた」

「他！」

「元貴族であります、ヴィ家の元後援貴族の”アツシユフォード家

“

「ルーベンか」

ルーベン・アツシュフオード。母マリアンヌの後援貴族であり爵位を没収された後もそれ相応の力を持つている爺さんである。現在は、先の『アリエスの悲劇』で警備上の責任を負い当主の座を息子に譲り、隠居をしてエリアーでアツシュフオード学園の理事長に収まっている。しかし隠居をして尚強い力を持つており、アツシュフオード家の動向には確実にルーベンが関与していると思われる。

ルーベンが僕を支持する…。アリエスの悲劇で被った汚名を返上する為かな。それともルルーシユ兄様の為？善意は無いだろうか。

考えても分からない。

「…他には？」

「後は、軍部に居るマリアンヌ様を支持していた者達かと」

「…最前線勤務で皇族や貴族の邪魔が入れば僕達の命が危ないんだけどね」

皇帝直属の機密情報局とはいえ、皇族や大貴族と繋がりのない者が居ないとは限らない。敵国に居る諜報員ならば敵国に情報を流すだけで自分の手を汚さずに始末出来る。僕のような後ろ盾のない皇族なら外交交渉にもならないだろう。敵国で一生刑務所かなあ、無理だな。

「申し訳ありません。軽率な行為でした」

ジェレミアが殊勝に頭を下げて謝罪を口にする。それを見たオルフェウスが「全くだ」と言つてジェレミアをジト目で見ると、それに気づきジェレミアは、「くっ」と声を漏らす。

「まあいいよ。僕は、ジェレミア卿を信頼しているから」

僕がそう言うとおお！殿下！なんと寛大な！！」とジェレミアが仰々しく応えマシンガン讚美を行おうとする。するとエウリアが手を叩きながらその流れをぶった斬る。

「ハイハイ、そう言うのいいからこれからの事言うわよ！」

「イ、イエス・マイ・ロード！」

「なんかエウリア、肝っ玉母ちゃんみたい」

「何か？」

「何でもないです」

「迫力凄いよ、エウリア。」

「ゴホン。それでどうするんだエウリア？」

「オルフェウスが咳払いをし、話題を元に戻す。」

エウリアを、ブリタニア帝国で一人にするのは危ないから、オルフェウスは連れて行けないとするレレーナを、説得する妙案をエウリアが提案する。

「簡単よ。まずレナがユーロピアに行くまでの間にレナの味方になる人を見つけてるの」

「味方？」

「それならばこのジェレミアが！」

「ジェレミア卿は、配属先があるでしょ」

そう、ジェレミアがよくアリエスの離宮を訪れているので勘違いしそうであるが、彼は既に24歳で軍に所属しているので本人が言うほどレレーナやエウリアを守ると言うことは、難しい。それを指摘され「そうでした」とガツクリと膝をつく。

「それでレナには、準備期間の一週間でレナの信用できる味方を作ってもらおうわ」

「一週間で信用できる人は、出来ないよエウリア」

「その方法は、後で考えるところとしてレナが新しく作った味方に私を守ってもらいオルフェウスには、レナを守ってもらう。どう？」

エウリアさん、それギアス使って味方作れっことですね。ジェレミアが居るから具体的に言わないだろうけど、ギアスかあ。

余り使いすぎてシャルルやビスマルクを刺激したくないけど、仕方ないかなあ。

「オルフェウス、どう思う？」

「やり方次第だろ」

「そうだね…。ふう、エウリアの案を採用して、味方でも作るかな」

ギアスを使えば確実だしね。さて、そうと決まれば誰を味方に引き入れるか…。

「…殿下、味方に引き入れる者、このジェレミアにお任せ頂けませんか」

「ジェレミア卿に？」

「ハイ」

ジェレミアが神妙な表情で此方を見ている。先ほどの事を気にしているのかとも思ったが、ジェレミアは、原作でも此処でもその忠誠心を疑うまでもない。皇族と祖国に絶対の忠誠を誓うこの男が、皇族である僕の不利になる人物を推薦する事はないだろう。いざとなればギアスを使えば完璧だ。

「いいだろう。任せるよジェレミア卿」

「イエス・ユア・ハインース！」

さてさて誰を推薦してくるかな…。

でもジェレミア、本当によくヴィ家の人間に協力しようと思うね。

他の皇族・貴族達に目を付けられかねないのに…。

その忠誠心は、賞賛に値するよ。

僕だったらずまず出来ないと思う。小心者だし。

僕の新しい味方は、ジェレミアに任せて僕は、E・U・へ行く準備でもしよつと。

皇歴2013年 / 革命暦224年 E・U・ルクセンブ

ルク州 ルクセンブルク市

僕が、ブリタニア本国を離れて1ヶ月がたった。機情の潜入先として選んだのは、ルクセンブルク州だ。

ルクセンブルクは、南にフランス、西と北にベルギー、東にドイツが存在している。その為ルクセンブルクでは、英語やフランス語、ドイツ語といったE・U・の主要言語が全て通じる場所であり、さらに州策として金融と情報通信分野が産業振興を図っているので、E・U・における放送メディア産業の中核を担う場所となっている。

E. U. の情報を収集するなら国際金融センターとメディア等を抑えるのが妥当だろうとオルフェウスと共にこの場所に拠点を置いた。

「レナ。拠点も戸籍も作ったが、これからどうする」

オルフェウスが今後どうするかを尋ねてきた。

E. U. へ潜入してから真っ先にしたのは戸籍を作る事である。しかし情報化社会において、ハッキングによる偽造は簡単であるがリスクがある。その為アンダーグラウンドで闇取引されているモノを購入して戸籍を確保した。

電子通貨が一般的になっているE. U. では、偽札等が使用出来ないので他人のIDを拝借して支払った。拝借した人ごめんね。

その後E. U. 市民としてルクセンブルク市の郊外に一軒家を購入して拠点にした。更に念の為に複数のアパートや平家を別名義で購入しといた。

「まずは、E. U. の機密情報を探る為に何処を攻めるかだけど…」
「俺たちで探るのは、時間と労力を使う割には成果が期待出来ないだろう」

「そうだね。だからこそ調査をするのは、他の人に任せよう」
「他？」

「そう。ジャーナリストと言う民主主義の代弁者なる人たちにね」
「だがどうやって調べさせるんだ？」

「まずは小さい出版会社を手に入れよう。後は、適当に煽れば火がつくだろう」

「…なんか本当に適当だな」

そんな事言ったってねえ。複数のモニターを使いながらPCで株式の売買を行ってお金を稼ぎながら思いつく事なんてたかが知れているよ。

「政治家に近づけば機密情報がある場所の情報なんかも手に入るだろうからね」

「40人委員会だったか、E. U. の政治の意思決定機関は」

「そう、もうじき委員の半分が任期満了で入れ替わる。それに一枚噛

もうかなと」

選挙があると言う事は、委員にとってお金が必要。さらにライバルの醜聞は欲しいだろう。選挙で負ければ無職になる。今後の生活の為に委員として豪勢な生活の為に、みんな必死だ。彼らにとっては、人生の岐路といっても良いだろう。間違いなく利用できる存在だ。

「オルフェウスは、これから買収する出版会社に記者として入って貰って委員の醜聞を探してくれる？」

「脅しの材料だな」

「交渉のカードだよ」

脅しだなんて物騒なことと言わないでよ。僕が悪い人みたいじゃないか。

「似たような物だろ」

「ううう」

だって導師が何処にいるか分からない以上知っている人に聞かなくちゃダメでしょ。政治家なら政財界の情報も知っているだろう。

早く導師達を暗殺しなきゃV・V・Vがどう動くか不安だ。

「ふっ。それでレナは、どうするんだ」

「ここに行くよ」

僕がオルフェウスに見せたのは、ある大学のパンフレット。

E・U・Uでは、上位に入る大学で原作ではインド人の天才少女”ネーハ・シャンカール”が卒業したのもこの大学である。

「E・U・U 総合工科大学？」

「うん！」

E・U・Uで確りと地盤を作って諜報活動をして行こう。五体満足で生き残る為に慎重に確実にしなければね。

その為には、たとえ子供であったとしても子を想う親だとしても利用させて貰おう。

第8話 新しい出会い

皇歴2013年 革命暦224年 E・U.

レレーナが、E・U. 総合工科大学へ編入して4日が経った。僅か11歳の子供が入学して来たことに、大学中が驚愕に包まれた。

何せこの大学史上最年少合格者であったからだ。ただ最年少合格という栄誉な称号は、レレーナの価値を上げるものであると同時に周りからの妬み嫉みの感情を向けられる事になった。

その為、大学でレレーナは、浮いた存在となり大学内での交友関係を広げるのに苦慮する事になった。

「はあ」

ふと、溜息が出る。大学へ編入して4日が経過したにも関わらず、未だに友人を作る事が出来ず交友関係が広がらないのだ。これでは、学生を使って政治家や官僚、そういった人物に接触できる人物に出会うという目的が果たせない。

そんな事を考えながら大学内の廊下を歩いている。大学での勉強は、そこまで難しくない。ブリタニアで学んだ事が大半である。ただ唯一違うのは、民主主義についてとそれに伴うブリタニア帝国についての事である。

E・U.でのブリタニア帝国は、すごい極悪国家として語られている。まず皇族や上級貴族が格下の貴族や平民を蔑み、中級貴族は平民を慰み者にし、下級貴族は平民を区別し、平民はナンバーズを見下して自分達の優位性を示している。こういった歪みが帝国を侵略国家へと誘っているのだと声高々に批判している。さらに帝国では、皇族などの後援貴族が軍需企業の役員であったり会長である場合が多く企業利益を求めて他国へ侵攻しているのだと書かれている。帝国臣民の皇族・貴族への不満を外へ逸らしてさらに企業利益を貴族が求めて侵略戦争をしているのだと教科書に書かれている。これを読めば

ブリタニア帝国は、ひどい国だと思う。尤も皇帝以外は、そういった考えがあるだろうから否定出来なくて苦笑いするしかなかった。

本当に酷い国だよブリタニアという国は。

「さてさて本当にどうしようか」

E・Uの上層部に繋がりを持つには、それ相応の身分の子供が必要なのだ。しかし相応の身分の子供と会う事も難しい、接触出来なければギアスも掛けられない。何処の国でも身分ある人間と言うのは、勿体ぶる事が好きなようだ。

これからの予定を考えながら歩いていると廊下の角を曲がった際に誰かにぶつかった。そしてそのまま後ろに倒れそうになった時に誰かに腕を掴まれ倒れずに済んだ。

「えっと、有難うございませす」

僕の腕を掴んだ人は、青い瞳に青い髪で後ろで三つ編みをしたイケメン。顔を見た時に「あっ」と声が漏れた。

日向アキト。

『コードギアス亡国のアキト』の主人公でヨーロッパ生まれヨーロッパ育ちの日本人（人種的な意味）である。彼の一族は、ギアスに関わりのある一族であり、兄である日向シンは髑髏と契約する事でギアスを得て一族を皆殺しにしてしまう。本来であればアキトも死ぬ筈であったが、何故か生き残ってしまったと言う設定だったか。

アキトの能力は、高く優れた戦況判断能力と身体能力でKMFを携帯用対物火器で倒してしまうほどであり、KMFの操作技術に至っては特殊な状態とは言え、四大騎士団のE級やアシュレイから「化物」「死神」と呼ばれるほどである。彼を味方に引き込めれば非常に強力な戦力となるだろう。

「すみません。考え事をしていて確り確認をしていませんでした」

取り敢えずぶつかってしまった事を謝罪する。

「いや、此方も気付かなかった。すまない」

アキトは、そう言う僕に頭を下げ謝罪して来た。そして僕が怪我をしてないか確認してくれた。

どう見てもまだ子供だけど、確かアキトは、皇歴2017年の段階

で17歳だから今は、13歳という事になる。だけど対面しているアキトの様子は、大人びていてクールな感じがする。

なんか少女漫画みたいな出会いだな、これ。

「いえ、本当に此方こそすみませんでした。僕、レレーナ・ランペルジ」と言います。後々何かあれば連絡して下さい」

「日向アキト。分かった、じゃあ」

「っ!？」

僕が頭の中でアキトの評価とこれから彼をどうするかで悩んでいると、彼は早々にここを去ろうとしてしまい焦って彼の腕を掴んでしまった。

正直アキトに会えた事で僕は、少し興奮していた。色々言われているが僕自身『亡国のアキト』は、結構好きでアキトとレイラを推していた。イケメンと美女、メシウマだったなあ。

おっといけない、これは人によるんだった。

「…何」

「…いや、ちよつとお茶でもしない?」

なんで僕は、初対面の人間をお茶に誘ってるんだ…。これじゃ、ナンパじゃん。ダメだ、思った以上に僕は、アキトに会えて冷静さを欠いている!

落ち着け!レレーナ・ヴィ・ブリタニア!アキトの僕への印象を良くしておかないと!!!

「…その歳でナンパか?」

「ちがつ!？」

「すまない。俺は、そっちの毛色はないんだ」

「僕も無いよ!!!」

誤解だ!

クソ、不味いぞ!これじゃ第一印象酷いだろ!どうする!?

「ふっ、冗談だ」

なん…だと…。

無表情で鼻で笑われた。

僕は、アキトに遊ばれたのか…。コイツ、焦る僕を見て楽しんでい

やがったな!

「お茶しに行くのか?」

「…うむ」

「うむって、揶揄って悪かった。だから機嫌を直せ」

クソ!こんな子供でイケメンだから微笑む姿すら様になってやがる!気が立って口が悪くなったね。フウ、落ち着こう。

と言うよりもアキトってこの段階で、こんな性格なの?

レイラ達と出会ってから性格が明るくなった訳じゃないのか、どうなってるの?

「お詫びにお茶を、奢るよ」

「自分の分くらい出すよ」

「子供なんだから無理するな」

「君もでしょ!」

「お前よりは、年上だ」

「ぐぬぬ…」

このイケメン、ルル兄様やオルフェウスとは、また違うイケメンだ。真顔でツツコみどころのある様なない様な事を言いやがる。

全く仕方ないから奢られる事は、納得しよう。しかしアキトのこの性格は、どうなっているんだろう。それにこのアキトをどうやって此方側に引き込むかと考えながら、アキトと大学の中にあるカフェへと向かう。

「それで、どうして俺を誘った?」

「迷惑だった?」

「いや。だが不思議には、思っている」

そう言ってアキトは、視線を周辺へ動かす。それを見て気付いた。ここは、E・U・の大学であるから西欧人が多い。しかしアキトは、日本人であり黄色人種であるので正直目立つ。しかもアキトは、名前から日本人である事が分かっている。そして現在日本人は、ブリタニア帝国によって祖国を占領されイレブンと呼ばれている。

E・U・でも何故か日本人は、敵性国民とされ既に差別の対象にされている。意味が分からないが、大方E・U・の国民の憂き晴らしの

為の生け贄なのだろう。そして今アキトは、周辺の人間に嫌な目を向けられている。

僕も見た目は、E・U・の人間と同じで白人系だからそつちと同じに思われているのかも――

「ぶつかったお詫びとボツチ卒業かな」

「ボツチ？」

「僕、ブリタニアから来た上にこの年齢だから誰からも相手にされないんだよ」

「ブリタニア？」

「そう、お家争いでこつちに送られたんだ」

嘘は、言っていないぞ。皇位継承権争いで後援貴族のいない僕が力を持つには、自分で力を付けなければいけない。その為に機密情報局へ送られたのは事実だ。それで任務でE・U・へ派遣されたんだから。

「貴族だったのか」

「貴族じゃないね。貴族じゃないけど偉い人の息子だよ」

「…そうか」

そんな話をしていたらカフェに着いた。窓側の席に向かい合う形で座りメニューを注文する。

「それでボツチのレレーナは、一体こんなイレブンに何の用だ？」

「ボツチ言うな！」

人が気にしている事を…自分で自虐として言うなら兎も角他人に言われると心穏やかじゃないぞ！

全く、無表情で目だけ楽しんでやがる。アキトってこんな性格だったのかなあ。確かにレイラを揶揄って楽しんでいた事もあったかも知れないけどなあ。

「ふう、あと僕がブリタニア人だからってイレブンなんて言わなくて良いよ」

「いや、イレブンでいい。E・U・で生まれて育ったが、E・U・人ではない。そして日本人とも言えない。何者でもないんだ俺たちは」

法律的には、彼らはE・U・の人間だろう。民族的には、所謂日本人なのだろう。ハーフとかダブルとか言われる混血の人達にも当て

はまる事もあるだろうけど、日本人であって日本人でない、E・U・人であってE・U・人でないそんな中途半端さが本人と周りに壁を作り、本人の帰属意識を曖昧にしてしまう事もある。自分が何者なのか分からなくなっているのだろうか。

ただ話的に重いよ…。そもそも子供に話す内容じゃないだろう、それ。

「この大学に来ているんだから分かるだろ」

「心を読むな」

なんで機情の諜報員の僕が、子供に心を読まれているんだ。ダメじゃん！

「目は口ほどに物を言うというやつだ」

「日本の諺だね」

本当に気が緩んでるな。ちゃんと引き締めないと、此処は敵国、下手したら死ぬ。

それからアキト、日本の諺を使ってる時点で日本人だと思うよ。

「これくらいの諺は、誰でも知っているだろ。お前だつて知っているじゃないか」

「僕は、日本が好きだからね。それから「お前」じゃなくてレレーナ・ランペルージだよ。親しみを込めてレナと呼んでくれ」

「レナか、ブリタニア人なのに日本好きとは、変な奴だな」

「ブリタニアの国是は、差別ではなく弱肉強食だよ。日本だからどうのって言うのは、国是を曲解している奴だけだよ」

実際個人の技量に関わらずブリタニア人だからと言って自分まで日本人よりも優秀だと言う輩は、多い。しかし日本人の中にも優秀な人間は、多い。そもそも人種や国籍に関わらず優秀な人は多いんだ、小さい事で国益を損なう事は無いだろうに。

自信を持つて言える、有能人間は人種や民族に関係なく登用すべきである!!!

「本当に変わった奴だなレナは」

そんな感心した目で見られると照れるなあ。

「感心した目は、向けてないぞ」

コイツ…。

「まあ、これから友達としてよろしく」

僕って分かりやすいのかなあ？でもそれだと諜報活動とか無理じゃね？どうすんだよ、これ—— いやアキトが異常に他人の心を読むことが出来るんだろう。そう言う事にしておこう。

そんな事を考えながらアキトに向けて手を出し握手を求める。

「今日会って友達か？」

「何事も」始めまして”があつてその先があるんだよ。いつ会ったかは、友達になるのに関係ないよ」

「…そう言うものか」

アキトが一瞬周囲を見た。僕やアキトを「子供の癖に」や「生意気だ」とか「イレブンが」などと陰口を言つて妬み嫉みの視線を送ってくる。正直いい気はしない。

そしてそれを見たアキトを見て何と無く分かった気がした。僕もアキトも此処に居場所が無いんだと。努力しても認めて貰えず差別され余計に嫌われる。心が少しずつ蝕まれていく感じである。人の悪感情に長く晒されると心が荒むんだよ。だからそんな無表情になるんだ…。

僕もブリタニアのペンドラゴン皇宮で皇族や貴族達と過ごしていた時は、あいつらの陰湿な嫌がらせや陰口で殺したくなる事が結構あつた。

アキトは、ただでさえ一族が皆殺しになっていて精神状態が良好とは言えない上に、こうやって差別に晒されてきたなら心を閉ざすのも分からなくない。

「仲良くしよね！アキトくん」

「アキトでいい」

フツとアキトが笑い、僕の手を握り返してくれた。うん、やっぱりこの歳でもアキトは、イケメンだ。アキトと友達付き合い出来るのは、楽しみだ——

第9話 諜報活動始めました―前編

皇歴2013年 革命暦224年 E・U 総合工科大学

アキトと友達になって数週間。今僕は、大学内にある8畳程の教室にいる。その教室の入り口から右手奥の壁側に机があり机の前の壁にモニターが数台掛けられており、そのモニターに株価やE・U内の政治・経済・軍事ニュース、ブリタニア帝国のニュース、ユーロブリタニアのニュースなどが映っている。僕は、その机の前に座りPCとモニターを比べながら今後の計画を立てていた。

この教室は、元々ある教授のゼミ用の教室だったが教授は今部屋の隅で黙って自分の仕事をしている。その両目は、薄っすらと赤く光っているから僕の邪魔になる事は、ない。

2日前に僕とオルフェウスが拠点にしていた場所がE・Uの”国内治安総局”と”対外情報総局”と呼ばれる情報機関に家宅搜索を受けた。しかも一箇所だけでなく、複数のダミーの拠点も押さえられたのだ。

具体的には、7つあった拠点の内6つが押さえられた。正直言ってかなり焦ってしまった。何せその6つの拠点は、其々本国の機密情報局、帝国国防省国防情報局、ユーロブリタニア参謀情報部に伝えている拠点なのだ。そして残った1つの拠点がオルフェウスと二人だけの拠点だった。

情報局や情報部に報告していた拠点が全て制圧されたのが偶然かそれとも誰かが意図的に情報を漏らしたのか分からないが、少なくとも用心に越したことはないとして少し調べてみたら、案の定情報のリークがあったようだ。

ユーロブリタニア参謀情報部から対外情報総局へ情報が送られ、其処から国内治安総局へ情報提供が行われたらしい。

ただ今回のリークに機密情報局が関与していることは、ほぼ確定している。

如何にE・Uの情報部が優秀であろうと皇帝直属諜報機関にスパイを入れるのは、不可能であろう事は明白だ。当然、本国と対立構

造を持つユーロブリタニア系の人間も機情局に殆ど配置されていない。それこそ僕と同じ前線勤務の者ぐらいだろう。しかし機情局の情報が流出した事は、間違いない。

となると考えられるのは、

1 それぞれの情報機関からE・Uへ情報が流れた

2 機密情報局内にスパイがいて国防情報局と参謀情報部の情報にアクセスして情報を流した

3 国防情報局内にスパイがいて参謀情報部へ情報がリークされてそれがE・Uへ流した

4 参謀情報部にスパイがいてそれぞれの情報を不正に取得しE・Uへリークした

などの色々な可能性があるが、一番可能性があるのは機情局内にいるスパイが参謀情報部を通してE・Uへ情報をリークしていた線だ。ただしスパイは、E・Uのスパイではなくブリタニア本国のスパイだろう。

正確に言うなら反ヴィ家の皇族・貴族だろうと。僕の情報をリークする所はそこぐらいしか無いと思う。実際如何に皇帝直轄であろうと、そういった皇族や貴族の皇位継承争いに無関係でいられる者は少ない。機情局の幹部の中にも他の皇族の後援をしている貴族が存在する。当然そうなると皇族・貴族達からしてみたら皇位継承権を持つ後ろ盾のない僕は、サクツと暗殺出来る程度の存在だろう。そういった貴族が皇族の意思か皇族への忖度かで僕の情報を売ったのだろう。僕をE・Uに始末させる為に…。

そう考えると物凄く不愉快だ。

背中から刺されたような感じ、裏切られた気分だ。まあ実際どうかは、まだ分からないが何かしらの事があったのだろう。だから此方も何か対応をしないとイケないだろう。

だけど今は、まだ何もできない。こんな屈辱を味合わせられて何も

出来ない事が歯痒いが、今は暗殺任務とキャリア形成の為にこの任務を遂行しなければいけない。

ただ情報を知りたくしたクソヤローは、いつか必ず見つけ出して地獄へ落としてやろう

皇歴2013年 ウズベキスタン共和国カシユカダリヤ州カルシ
カルシ・ハナバード空軍基地

日も沈み辺りが真っ暗となり目視では、数m先も見通す事は出来ない。そんな暗闇の中を二つの陰が動く。

「やっところまで来れた」

「流石に時間が掛かったな」

僕とオルフェウスは、ウズベキスタン カシユカダリヤ州にあるウズベキスタン共和国軍の空軍基地に潜入している。

何故ならこの基地に僕がV・Vから出された指令の暗殺対象が、来る事が分かったからだ。暗殺任務は、好きではないがこれも致し方ない。

「ターゲットは、何処だろう?」

「基地司令部庁舎3階西側の角部屋らしい」

「今回も簡単かな」

「帝国貴族達よりかは、難しいだろ」

数年前にボワルセル士官学校在籍中に暗殺したブリタニアの貴族は、愛人関係のメイドにギアスを掛けて毒物を飲み物に盛り毒殺した。別の貴族院議員を暗殺する際には、議員と対立していた議員の秘書にギアスを掛けて両議員諸共自爆させた事もあった。用心深く欲深い軍人を暗殺する時は、車の運転手にギアスを掛けて谷底へ車ごと落ちて貰う等して徹底的に自分が表向き関わらない形で暗殺を実行していった。

「ターゲットと繋がりのある人物を探すのは大変だね」

「直接やるか？」

「しようがないね。関係ない人間に一々ギアスを掛けても無駄だしね」

そんな事を言いながら基地司令部庁舎の見取り図を見て侵入ルート決める。

「僕は、変装して正面から行くよ。警備室を抑えて監視カメラを無効化したらオルフェウスには、ターゲットに化けて貰って時間を稼いでもらうでいい？」

「構わない、時間は？」

「5分」

「了解」

僕が言った時間にオルフェウスが応答する。なんかスパイみたいでカッコイイ！

スパイは、僕なだけけど。

まあ今回も簡単に片付くでしょ

———と思っていた時期が僕にもありました。

現在僕は、オルフェウスと一緒に基地内の廊下を走っている。背後から機関銃を撃ってくる兵士に追い掛けられながら。

「なんでこんな事になるの!?!」

僕は、叫ぶ！そして走る！背後から近づいて来る敵兵から逃げる為に！

「レナが遺体を目撃されるのが早過ぎたんだ！」

「いやあ、遺体を隠すのに時間が掛かっちゃって！」

「全く！油断するなよレナ！」

「ハーイ！左の角から7秒後に3人！」

「了解！」

僕は、オルフェウスと話しながら全力で走る。その際にギアスで先を見て敵がどこから出て来るか見て、オルフェウスと対処しながら脱出を目指す。しかし集中してギアスを使えないので、未来を見る事がらしいか出来ないのが惜しい。

「折角ターゲットをスムーズに始末したのに」

「仕方ないだろ。次失敗しない様にしよう」

「うん。次の角を曲がった先に6人！」

「手榴弾だな」

そういつてオルフェウスは、手榴弾を僕に渡す。受け取ったそれをピンを抜いた状態にし角に目掛けて投げる。手榴弾は、壁に当たり角を曲がった先に弾かれ転がっていき敵兵の足元に辿り着く。

「手榴弾!?!」

「回避!!」

角の先でそう言った叫び声が響く。その直後、角の先で大きな爆発音と黒い煙、火薬の匂い、焦げ臭い匂いが周囲に広がった。僕たちは、その角を通り過ぎ倉庫に辿り着いた。倉庫の扉を閉めて鍵を掛ける。

倉庫の中には、見覚えのある兵器が鎮座していた。

「なんだこれ?」

オルフェウスが鎮座している兵器を見て首を傾げる。イケメンだ。違う!そんな場合じゃ無い。

鎮座している兵器は、戦車の車両部分に胴体が乗せられ両腕が大砲になっていて一人乗り用の新型機動兵器の試作先行機『パンツァー』である。これは、E・U・が対ブリタニア戦におけるグラスゴー対策として開発している兵器で所謂KMF擬きだ。

コイツの情報は、僕も持っている。E・U・の情報機関に拠点を抑えられた際に情報收拾をし、その中にコイツの情報が入っていたのだ。

恐らく今後E・U・の主力になるであろう『パンツァフルメン』の旧型と言った所だろう。ちょっと形が似ているし…。

「パンツァーだね。E・U・の次期主力兵器だよ」

「これでKMFに対抗しようと考えているのかE・U・は!?!」

「そうだよ」

「品位を疑うなコイツは」

兵器に品位もへったくれもないでしょ。まあ確かにKMFの方が遥かにかっこいいけど!

いつか僕らもKMFの専用機を貰える様に頑張るけど！今はこの
ダサイKMF擬きでこの状態を脱しないといけないんだからね！

「まあ、コイツでどうにかするか」

「そうだよ、オルフェウス」

そう言つてオルフェウスとそれぞれパンツァーに乗り込み起動す
る。正直初めて乗る機体なので操作が心配だがなんか感覚的に出来
るだろうと思つた。操作方法は、一応パンツァーのデータを手に入れ
た時に見て覚えた上に今も敵が入つて来る前に操作方法をいろいろ
試している。

オルフェウスも今の内に操作を完璧にするつもりだろう。マニユ
アルすら見ずに動かし始めているのだから流石オルフェウスだ。

と言う事でオルフェウスも大丈夫だろう。

さてさつさと終わらしてE・U・へ戻りたいね――

！。

第10話 諜報活動始めました―後編

皇歴2013年 ウズベキスタン カルシ・ハナバード空軍基地

カルシ・ハナバードはウズベキスタン共和国南部に在る空軍基地であり、対ブリタニア帝国戦における後方支援基地としての役割も有している。この基地に昨日の昼頃から政府要人が視察する事となった。視察は極秘で、要人が来訪する事を知っていたのは軍の高官と基地司令部の司令と警務部隊の精鋭チームだけである。よって基地要員としては、要人を狙った暗殺が起きる事など寝耳に水であった。しかし現実として既に要人は暗殺され、この基地に配備されていたE・Uの最新型機動兵器の先行試作機が敵方に奪取された事実は如何にもならない。

「まだ敵を排除する事は出来ないのか！」

「ダメです！敵はパンツァーを完全に使い熟しています！」

「たかが子供の乗る機体2機！何故止められない!?!」

基地司令部では基地司令がレーダー要員と口論をしていた。当初司令部内部では要人が暗殺された事で困惑が広がり、更に下手人が子供二人組みである事で更にそれが広がった。それでも子供二人、簡単に事態は解決できると司令部の要員は考えていた。しかし蓋を開けてみれば、子供二人はE・Uから対ブリタニア用として貸し出された新兵器を奪い、基地内部を縦横無尽に駆け回り、破壊の限りを尽くしている。基地の警備部隊だけでは足りないとい一般兵士達まで動員しているにも関わらず、未だに事態は終息していない。

「敵機A！航空機格納機へ向かっています！」

「!?!」

「ば、爆撃機はまだ出撃出来ないのか!?!」

「ダメだ！滑走路が壊されて出撃出来ない！」

「対地攻撃用VTOLは!?!」

「敵機Bによって全滅させられました！」

「クソ！」

司令部内部ではレーナとオルフェウスに鹵獲されたパンツァー

によって齎される事態に悲鳴が上がっていた。喧騒に包まれ一部の者は錯乱してしまい、自身の業務もままならなくなってしまう。基地司令ですらまともに対応策を示せず、前面にある巨大モーターに次々と映る基地の損害情報を見送っていた。そして思ってしまう、自分達は一体何と戦っているのだと。

司令部が混乱し、真面に指示を出せなくなっている状況でも現場の兵士達は必死に鹵獲された2機のパンツァーを破壊しようと戦いを挑む。しかし挑んで行った者から順にレレーナとオルフェウスによつてこの世から永久退場させられる。しかもレレーナが駆るパンツァーは基地の兵士達を甲高い笑い声を上げながら蹂躪していき、兵士達の心を砕いて行った。まさに悪魔のような存在に兵士達には見えていた。

ある者は腰を抜かして動く事が出来なくなり、ある者は泣き叫びながら神に許しを請い、ある者は武器を捨て仲間を見捨てて逃げてゆく。しかし、悪魔は彼らを一人足りとも逃さなかった。

「ばつ化け物め！来るな！来るな！」

そう言つて自分の持つ機関銃をパンツァーに向けて乱射する。しかし機関銃程度ではパンツァーの装甲に穴を開ける事は叶わない。そして悪魔によつてその存在を認識された兵士は、悪魔の右手より放たれる銀の弾丸によつて文字通り四肢を割かれ、八つ裂きにされて死んで行った。悪魔はその人であったものに一瞥もくれず次の獲物を刈り始める。その姿はさながら全てを破壊し尽くす”破壊神”の様だった。

ただレレーナ自身はそんな事を考えている暇は無かった。

何せ常時ギアスを使用し未来を見て敵を粉碎していき、パンツァーの精密操作で神経をすり減らしていたのだ。さらにパンツァーは基本人が操作する為、子供の体であるレレーナでは足がペダルに届かなかったり、操縦桿を動かすのに体全体を使わないといけなかったりと、かなり体力を消費していた。子供時代に車の運転席に座った時のアクセルやブレーキに足が届かない様な感じで体全体を使わなければ操作できないのである。

その上試作機はグラスゴーの試作機同様まともな空調機器がついておらず、コックピット内はまさに灼熱地獄の様な暑さだった。

レレーナは全身の毛穴から汗が吹き出した様な汗をかき、その中で複数の敵と命のやり取りをしていた。人間極限状態になると最後は笑えてくるらしい。その笑い声が兵士達にとっては悪魔の笑い声の様に感じるのだがレレーナにそれを意識する余裕はない。

さつきから敵がワラワラと基地内部から出て来て本当に面倒。このクソ暑いコックピット内に長時間籠って全身を使いパンツァーを操縦しているのだ。イライラを通り越して最早笑えてくる。人を殺しながら笑っているって、改めて考えるとんでもない狂人だなと…。

これじゃまるで大量殺戮だ。

「いい加減に諦めて降伏してくればいいのに」

ついそんな事が口から漏れる。自分は何時からこんなに無情な人間になってしまったんだろう。そう思う反面、この状況でも果敢に挑んで来る敵の兵士達を愚かだと思っ自分もいる。ブリタニア皇族として或いは、戦争優位国の人間として負けが分かっている戦いで何故命を賭けるんだと思う。自分が分からなくなる。ただやらなければ殺される。故にやられる前に殺す。そして気付けばこちらに向かつて来る者も逃げる者も居なくなり、瓦礫と物言わぬ屍だけが彼方此方に転がっていた。

「大丈夫か？レナ」

口から漏れた言葉を無線で聞き、オルフェウスがこちらに来る。すでにオルフェウスが向かった先の敵施設及び航空戦力は無力化して来たようだ。予想よりも大分早い。大方、僕の方を心配して早めに終わらせて来たんだろう。オルフェウスのパンツァーはよく見ると傷だらけである。

人に心配されるのは嬉しいものだ。ブリタニア皇族に転生してから他人に心配される事はよくあったが、下心無しに僕自身を心配してくれたのはルルーシユ兄様とナナリー、オルフェウス、エウリアだけだったと思う。

…ジエレミアも入るかな？

「大丈夫だよ。そっちも終わったみたいだね」

「ああ。後は、司令部だけだ」

「じゃあ其処を落としてさっさと終らせよう」

「分かった」

そう言う二人で基地司令部のある庁舎へ戻り、司令部に向かって両腕に付いている52口径120mm滑腔砲を放つ。何度も放つ。結果司令部はすっかり瓦礫の山となり、司令部要員は攻撃の最中に庁舎の外に逃げ、降伏した。

その降伏した者達は全員を拘束して一箇所に纏めて放置した。彼らはすっかり意気消沈して怯えながら俯いていた。

「終わったな」

「そうだね。これでやっとE・Uへ戻り任務を続けられるよ」

「まあ、増援が来るまではここに居なきゃ行けないがな」

「まだまだ時間は掛かるだろうね」

「寝てていいぞ、レナ」

「オルフェウスこそ疲れてるでしょ？寝ていいよ」

「レナよりは、体力もあるしギアスも使ってないから大丈夫だ」

「そう言われると反論できないなあ」

「なら寝なさい」

「ぐぬぬ」

口でオルフェウスに勝てる事は稀なんだ。今回も正論で言い負かされた。

僕の方が年下で体力でも劣りギアスも使用していたのだから、僕の方が疲れているのは明白だ。けれどオルフェウス一人に監視と警戒を任せて寝るのは、いくら凶太いと定評のある僕でもどうかと思ってしまう…。何かいい方法は無いだろうか。

「レナ、こう言う時は素直に甘えれば良い。これからは、お互いに助け合いながら生きて行こう」

「助け合いながら…」

「全部自分一人でやろうとしても失敗するだけだ。今レナがすべき事は体を休める事だ。監視と警戒は俺に任せろ」

まっすぐとこちらを見てそう言うオルフェウスに僕は息を飲む。イケメンが真剣な眼差しでこちらを見ているのだ。

仕方ない、今回はオルフェウスの案を採用して先に僕が休んで後でオルフェウスと交代しよう。

「…分かった。ならお言葉に甘えて、先に休ませて貰うよ」

「分かったならそれで良い」

「その代わり途中で交代ね。2時間で交代だからね！」

「分かった分かった。全く」

僕が妥協案を出した事で、オルフェウスも納得し仕方ないと言わんばかりの目で此方を見ている。しかしやっぱりお互い疲れているのだ、全部任せるのは良くないと思うんだ。

本当はギアスを使って捕虜を警戒に充てたいが、ここは離れていてもE・U・の勢力圏でどこで『時空の管理者』が見ているか分からない。あのよく分からない美女に目を付けられたら五体満足で生き残れないかも知れないから、なるべく使いたくない。特にスマイラスの側はいけない。時空の管理者を利用して友と言っていたレイラの父親である『ブラドロー・フォン・ブライスガウ』議員を暗殺しているのだから。かなりスマイラスと時空の管理者は近い存在なのだろう。全くもって面倒極まりない。

そんな事を考えながらパンツァーの胴体の上に座り眠りの態勢に入ると、オルフェウスがさり気なくブランケットを掛けてくれた。本当にイケメン。

「ゆっくり休め」

「…うん」

最後にそう言って僕の瞼はゆっくりと閉じて行く。思いの外簡単に寝れてしまう事に驚き、そしてオルフェウスがいる事に安心感があ

る事に気付く。やっぱりオルフェウスとエウリアは、僕にとって特別なのだと改めて思った――

「起きろレナ。迎えが来たぞ」

オルフェウスの声が聞こえるなあ。もう2時間か…うーん。

「むむ」

「〴〵むむ〴〵じゃない」

おお、懐かしいやり取り。お母様とよくやったやり取りだ…。

ああ起きなきゃ、見張りの交代だからね。…なんかやけに明るいな。

「オルフェウス？」

「朝だ」

朝？

「…朝!？」

「迎えも来たぞ」

「なんで!?!どうして!?!」

なんで朝まで僕は、寝ているの?あれ?起きれなかった…だと。

「疲れてたんだよ。起こしても起きなかったんだから」

「うわあ、嘘!」

「ぐっすり眠れただろ?」

「…うん。ごめんね」

「構わない」

構わなく無いんだよなあ。起こされたのに起きれないって言うのは、流石に命のやり取りをしているのに致命的だよ。

「心配しなくても、レナは俺が守ってやるから」

「…エウリアの守りもあるのに大変だよ。自分の身は自分で守らなきゃ」

「エウリアは本国でレナが手を打っただろ?それにレナの

The Allmightly
『全知全能』は万能ではあるがレナ自身が万能な訳では無いんだから一人で全てこなすのはさすがに無理があるだろう」

確かに全知全能はあらゆるギアスを使用できる上に『ワイヤードギアス』と呼ばれる先天性のギアスなので契約の影響を受けない。そしてV・V・と契約でさらに力を増大させた。本来であれば一度に一つのギアスしか発動出来なかったにも関わらず、契約後は一度に二つの能力を使えるようになったのである。簡単に言うと『ザ・パワー』を使いながら『ザ・スピード』を使えると言うことである。自分で言うのも何だがチートである。

それでもギアスを使用する僕自身の体がそれについて行かないのだ。体力的にも精神的にも…。

「もっと成長すればマシに成るんだろうけどね」

「まだ11歳だろ」

「オルフェウスは、13歳だね」

「ああ、お兄ちゃんだろ?」

「そうだね」

そんな優しい笑みで見られると照れるなあ。でもこう言う会話は、本当に貴重なんだ。

そんな事を考えていると”ラチエツト”率いるブリタニア軍第4師団第401大隊がカルシ・ハナバード基地にやって来た。ラチエツトたちは基地に来て驚いた顔をしていた。何せ自分たちが救援に呼ばれ来てみたら既に敵の基地は瓦礫の山と化し、司令官達の身柄も拘束された状態だったからだ。特に驚いた顔をしていたのはローゼンクロイツ伯爵だった。僕も驚いた、何でお前が居んだよ。

ローゼンクロイツ伯爵。

こいつはTVアニメでルルーシュ兄様が皇帝時に行なった改革に反対し、ジエレミアに鎮圧された貴族の一人だ。この世界では反ヴィイ家の貴族の一人でギネヴィア・ド・ブリタニアの後援貴族をしている。

事の次第をラチエツト達に説明している時、多くの将兵達は驚愕したり、怪訝な表情を浮かべたりしていた。ただローゼンクロイツは苦虫を噛み潰したような苦悶の表情を浮かべていた。大方僕を助けて

恩を売り、都合の良いように利用したいと思っていたのだろう。あわよくば此処で殺されてくれればラッキーみたいにかけていたに違いない。それとも救出作戦時にドサクサに紛れて殺すつもりだったのかも知れない。そう簡単にお前達の思い通りになると思うなよ。拠点の情報をリークした奴も含めて、必ず全員に引導渡してやる——

幕間1 特別な日

皇歴2011年 神聖ブリタニア帝国 アリエスの離宮

僕が、ギアス嚮団からブリタニア帝国へ帰国を果たしてボワルセル士官学校へ入学して暫くして。今日僕は、オルフェウスとエウリアに日用雑貨品や士官学校で使うノートや筆記具、破れた服を縫う為の裁縫道具などを購入しに行つて貰い、ジェレミアを密かにアリエスの離宮へと招いていた。

僕とジェレミアは、離宮の中のリビングで向かい合うように立っている。

「ではジェレミア卿。卿に特1級命令を言い渡す」

僕が腕を後ろに組み、胸を張つて仰々しくそう言うと「イエス・ユア・ハインース！」とノリ良く答えてくれるジェレミア。ノリが良いぞジェレミア！

因みに特1級命令は皇帝が出す勅命を指す言葉であり、原作では準1級命令と言うものをシュナイゼルが出していると思われる。つまりこの言動は、真面目に考えれば不敬罪に問われかねない発言なのだが、今回のニュアンスでは「それぐらいの気持ちでやってね」と言う事である。

「本日は、我が兄姉オルフェウスとエウリアの誕生日である！よつてサプライズの誕生日パーティーを執り行う事が決定した」

「つまり自分もパーティーの準備をせよとの事ですな」

「その通り！最高のパーティーを執り行う為に、卿の協力が必要不可欠である！心せよ！」

「このジェレミア・ゴットバルト！ご期待には全力で!!!」

そう言つてジェレミアは、早速誕生日パーティーの会場を設営し始める。

元々この企画は僕とエウリアとで考えたのだけど、そもそもオルフェウスもエウリアも自分の誕生日を知らないのだ。だから初めは、誕生日パーティーではなくて別の記念パーティーにしようかとも話し合つただけけれど、誰もが持っている誕生日を祝えないのは寂しい

と思い誕生日パーティーにする事にした。まあオルフェウスは、オールドリン・ジヴオンと双子なので調べれば分かるのだけれど、それをするとエウリアの誕生日だけわからないと言う事に成ってしまい僕の心持が悪い。

もちろんオルフェウスの誕生日のことは、オルフェウスとエウリアに話したが「知らなくて良い」とオルフェウスに言われたので伝えない。多分エウリアを気遣ったのだと思う。エウリアは、気にしなくて良いと言うが、そうはいかない。親しい仲だからこそ、使うべき気遣いもあるだろうと僕は思う。

で、まあオルフェウスの誕生日もあやふやに成ってしまったので、じゃあ新しく誕生日を作りましたしようと僕が提案しエウリアがそれに乗ったのが今日なのである。

さてジェレミアがせっせと会場を設営している間に僕も料理の方を作りますか――。

今私とオルフェウスは、帝都ペンドラゴンで一番大きなシヨピングモールに來ている。因みに交通手段は、レナがオルフェウス用にと買ったサイドカー付きバイク。買ったのだけど、レナが買ったバイクを改造してオルフェウス用にして最早別物とかしている。レナは機械工作も得意なようで、士官学校でもその才能を遺憾なく発揮している。

教官のパソコンにウイルスを仕込みテスト前日に試験問題が生徒全員にメールで配布させたり、授業用のグラスゴーを居住性抜群に改造したり、傲慢な先輩が搭乗するグラスゴーの操作パッドを変更して右足を動かすと左手が動くような設定にして落第させたりと才能の無駄遣いでは？と思わなくもないが、レナは才能に満ち溢れている。優しい子なんだけど…。

「親しいやつ以外には、エゲツない事をするがな」

「そうなのよねえ…うん？」

「全部口に出てるぞ、エウリア」

「え!?は、恥ずかしい!」

独り言をブツブツと言ってたと思うと恥ずかし過ぎて顔に熱がたまるのが分かる。

「それでレナの機械工作がどうかしたのか?」

顔を赤くしている私にオルフェウスは、可笑しそうに聞く。

手を繋いで並んで歩いているので、私がブツブツ言っている内容は、全て彼に聞こえていたのだろう。

「今日乗ってきたあのバイク本当ならオルフェウスでも乗るのが難しいでしょ?レナの機械工作が役に立つ事もあるんだなあと思って」

「あああ、何時もはよく分からない物ばかり作っているからな、レナは」

「パソコンは、まだ分かるんだけど」

「蓄電池にソーラーパネル、小型の火力発電機、小型ラジコンロボット、小型無人航空機、人工知能の開発とかかな」

「あの子は、一体どこに向かっているのかしら」

「まあ悪戯では、士官学校で役立つてるぞ」

レナは、士官学校でも悪戯をしているらしい。ギアス嚮団でもあの子は、悪戯と称して実験対象の私達に酷い事をする研究者などを色んな意味で抹殺していた。学校でもそんな事をしているのかしら?」

「そんな危ない事は、してないぞ。俺も見ているからな、精々ドローンで教官のカツラを飛ばしたり、試験問題を流出させたり、ラジコンロボットで女子風呂を覗く手伝いをしたり」

「女子風呂?」

「あ!」

「どう言う事?」

本当にどう言う事!?あの子そんな事してたの?オルフェウスなんて止めないの!?まさか貴方も一緒になって覗いてた訳じゃないでしょうね!

「ぐ、誤解だ!エウリア!覗いてない!覗いてない!」

本当に珍しくオルフェウスが狼狽している。

この様子だと本当に覗いていないのだろう。まあジト目で見てしまおうけど。

「た、確かにレナは、ラジコンロボットにカメラを搭載して女子風呂に突撃させて男子生徒の覗きを手伝おうとしたが、女子風呂に入っただけで構えていたら風呂の中に男の教官が素っ裸で入ってきて全員膝を着いて見るのを辞めていた!」

「…男子風呂に突撃してたって事?」

「…いや、女子風呂だった」

なんで女子風呂で男の教官が入浴してるのよ!大丈夫かしらその士官学校…。

「その教官は、その後クビになったから大丈夫だ」

「ナチュラルに心読むのやめて…」

「口に出てる」

「…またかあ」

思った事が口に出るのは、良くないわね。

ああ、だから私嚮団でも「スパイには、君向いてないね」と言われていたのか。確かに思った事を口にする諜報員や工作員は、居ないわね。

てつきりギアスが使えないからだと思ってたわ。

「まあこの話は、帰ったらレナに説教して終わりね」

「…すまんレナ」

「オルフェウス? 大体何であなたレナを止めないのよ? お兄ちゃんですよー!」

「いやまあ、そのお」

ええい! 歯切れが悪い! こんなオルフェウス初めて見た。

でもまあ、普段の冷静でかっこいい大人の感じも好きだけど、こう言うオドオドしてるのも新鮮で可愛いなと思ってしまふ私は、相当オルフェウスの事が好きなんだろう、何か自覚すると恥ずかしいなあ。まあ今問い質すのが先にね。

「その?」

「…買収されました」

買取!?まさかお金貰ったの?

「何を貰ったの」

「…バイク」

あれかあ。今日乗って来たやつね。うーむ役立つてるわね。仕方ない、私も恩恵を受けていた訳ね。

くっ、レナに上手くしてやられたわね。今日この場所にパーティーの為の時間稼ぎを依頼したのも、オルフェウスならバイクを使うと読んでのことね。私も使えば説教は、ないだろうと考えた訳だ。

「でもどうしてバイクで買取されたの?バイク好きだったけ?」

「エウリアと二人で出掛けるなら何か足があった方が良いだろうと思っ…」

うん、好き。

「そういう所も好きよ」

「ありがとう」

素直にそう言うオルフェウスは、少し頬を染めながらそう返してくれた。多分私も似たような顔をしているのだろう。

なんか周りから生暖かい目で見られるから早く買い物を終わらせて帰りましょう!

「うん!じゃっ早く買い物をしてデートでもエスコートして貰おうかしら」

「ふっ、喜んで My Princess」

オルフェウスがそう言って私の手の甲に口付けをする。

なんて様になっているのだろう。かっこいい…なんか私の反応レナに似てきたかしら。

ジレミアが会場の設営を終えて既に完成している料理を机の上に運んで並べてくれている。皇族や大貴族のパーティーみたいにごい量の料理がある訳ではなく、一般家庭でする様なパーティーなのでマリアンヌが健在であった時程も品数は無い。

そもそも僕が自分で作っているのですそんな品数を作れない。でもまあ喜んでもらえる様に頑張つて作りましたとも。

そんな感じで準備をしていると、エウリアからもうすぐ着くと連絡があつた。

程なくしてオルフェウスとエウリアが帰宅した。

「お帰りにくオルフェウス！エウリア！」

「ただいまレナ」

「ただいま」

僕の言葉にしつかりと「ただいま」を返してくれる二人。家族つていいねえ。

挨拶を終えた後、オルフェウスが日用雑貨を倉庫や収納に片付けエウリアが食材を僕と一緒にキッチンへ運ぶ。

「お疲れエウリア、デートはどうだった？」

「やっぱり気付いてたのね」

「バイクはその為だからね」

「女子風呂を覗いた件については、後でお説教ね」

「うえ!?オルフェウス、それも言ったの!？」

何で言つたんだオルフェウス!?そんなこと言つたらエウリアの評価が下がっちゃうじゃん！

「口を滑らせたわ」

「…」

オルフェウス。

「レナ」

「ごめんなさい」

だってあの教官が…。しかしここで言い訳をすれば説教が長くなる。

「ここは、耐え時だ。」

「まあこの話は、後にして準備は出来た？」

「勿論」

「なら私がオルフェウスをリビングへ連れて行くわ」

「了解」

さてきてサプライズパーティーの始まりだ

パンパンとクラツカーの音がリビングに響く。クラツカーから出た銀テープは、先ほど扉から入ってきた金髪のイケメンの頭にも引っ掛かっている。

金髪のイケメンは、目を開いて驚いた表情をしていて驚かす事は、成功した様だ。

「オルフェウス！エウリア！誕生日おめでとう!!!」

「おめでとう！オルフェウス、エウリア嬢！このジェレミア心からお祝い申し上げます！」

僕とジェレミアが二人に祝いの言葉を送ると、オルフェウスはさらに困惑した様子で僕とエウリアの方キョロキョロしている。勿論オルフェウスの気持ちもわかる。そもそもオルフェウスもエウリアも自分の誕生日を知らないので今日が誕生日と言われてもピンと来ないのだろう。

「ふふ、驚いたオルフェウス？」

「あ、ああ」

「実はね、オルフェウスの誕生日はレナが調べて分かったらしいけど、オルフェウスが私に遠慮して聞かなかったでしょ。だからそれだとあなたの誕生日をお祝い出来なくなってしまうし、レナはオルフェウスと私の誕生日をお祝いしたいと言ってってくれるから、貴方が貴方の誕生日を知るまでは、私と同じ今日を誕生日にしてお祝いしましょってレナと話したの！」

「え、あ、そうか」

「嫌だった？」

「いや、そんな事は無い。嬉しいよ」

「良かった！」

エウリアは、本当に嬉しそうにしてオルフェウスの手を引いて料理

が並べられた机の席に着く。オルフェウスも心成しか嬉しそうだったのでサプライズパーティーは、成功だろうか。

「この料理、全部レナが作ってくれたのよ！」

「全部レナが、凄いな」

「でしょう！」

「ああ、ありがとうレナ」

「喜んでもらえて良かったよ」

部屋の装飾は、ジエレミアがした事も伝える。すると「ありがとうジエレミア」とオルフェウスがお礼をジエレミアに言う。相変わらず呼び捨てなのね、オルフェウス。オルフェウスの礼に続きエウリアも僕とジエレミアにお礼を言ってくれた。

「しかし何故今日が二人の誕生日になったのですか？」

「ああ、それはね」

「今日は、俺とエウリアが初めて施設で出会った日だからだろ？」

エウリアが、ジエレミアの質問に答えようとすると、それを遮りオルフェウスが答えを言う。

「え!? 覚えてたの?」

「当たり前だろ?」

「さすがオルフェウス」

そんな話をしながらみんなで食事を始める。

「でもごめんねオルフェウス。勝手に決めちゃって」

「いや、エウリアと同じって言うのは嬉しいよ」

「でも本当の誕生日じゃ無いよ?」

エウリアとしては、本当のオルフェウスの誕生日をお祝いしてあげられないのが申し訳ないのかもしれない。気を遣われた事で少し後ろめたく感じているのかもしれない。オルフェウスは、そんな事気にしていない様ではあるが…。

よし、そんな二人にこの言葉を贈ろう。

「みんな同じさ、自分が生まれた日が何時か」なんて覚えている人なんて居ない」

「…」

「ただ自分が信頼する人が告げる日を、そのまま信じるしかないんだ。本当かどうかは、問題じゃない。『自分の誕生日を知っている』。それ自体がすでに幸せなんじゃ無いかと僕は思うんだ」

「…知っている事が」

「だから今日僕は、二人が生まれてきてくれた事を嬉しく思うし、心からお祝いするよ。誕生日おめでとう。オルフェウス、エウリア」

「ありがとう、レナ」

「ああ、ありがとうレナ」

そんな事を話しながら後々どんちゃん騒ぎを起こして賑やかに二人の誕生日を過ごした。途中からビスマルクが来てオルフェウスとエウリアに誕生日プレゼントを渡してきたり、ジェレミアがお酒を飲んでブリタニア国歌を熱唱していたり、届出人不明のオルフェウス宛のプレゼントが贈られてきて騒ぎになったり、日が暮れて中庭で打ち上げ花火を打ち上げたら警備の人間がすっ飛んで来たりと楽しい日になった。

あとオイアグロ、匿名でプレゼントを贈るなら剣にジヴオンの紋章を彫るな！

まあ、本当に忘れられない楽しい5月15日になった――

第11話 帝都狂乱―序

皇歴2014年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン

「これより」決闘の儀 を始める！両者前へ！」

闘技場の中央で高らかに宣言する帽子をかぶり白と薄紫のストラ
イプ柄の服とズボンを身に付けている男。

その男の声に従って闘技場中央へ歩を進める二人の影。

一方は、30代くらいの背の高い優男。優しげな顔の割にしつかり
と鍛えられた肉体は、服の上からでもよく分かる。腰には、二本の剣
を携えゆつくりとした足取りで闘技場中央へ向かう。

もう一人は、10代前半の様な子供であり体も未だ発達段階の未熟
なものだった。金髪で後ろ髪を編んでいるその子供は、誰が見ても美
少年でありその立ち振る舞いから高貴な子供である事は、すぐに分か
る。誰が見ても場違いなその子供は、しかししつかりとした歩みで闘
技場中央へ進みまっすぐと対面の男の顔を見た。

「両者！正々堂々一本勝負！始め!!」

帽子の男の宣言と共に金髪の子供が、対面の男に斬りかかる。その
速度は、常人では捉える事すら難しいものであった。しかし対面して
いた男は、その一太刀を自身の持つ二つの剣を胸の前で交差させて受
け止める。受け止められた金髪の子供は、それでも冷静に次の行動へ
移る。罅迫り合いの要領で反動をつけて後ろに飛び下がり、剣を構え
直す。そして再び初撃を上回る速度で攻撃を繰り返す。その上初撃
とは違い何度も何度も攻撃を仕掛ける。それを受け流し受け止め躲
すを最小限の動きでやってみせる男。戦いを見て観客は、この決闘の
レベルの高さに言葉を失う。二人の実力は、まさに一流の騎士だ。

「くっ」

「…」

一人は、ブリタニア帝国の下級貴族でありながら裏ではブリタニア
皇室に忠誠を誓い一切の汚れ役を引き受ける『プルトーン』の首領
を務める”ジヴォン家”の当主オイアグロ・ジヴォンである。

オイアグロは、ブリタニア屈指の剣術家でありその実力はナイトオ

ブラウンズに勝たずとも劣らないものである。そしてギアスの事も知っているブリタニアでも極めて少ない人物の一人でもある。

「これ程の実力とは……」

そんなオイアグロと対等に戦う金髪の少年に観衆の目は向く。その剣技は、オイアグロに劣らぬものでスピードに至っては、オイアグロを凌駕していた。そして側から見ては分からないが、剣を交えるオイアグロは、はつきりと感じていた。子供が振るう剣にしては異常に重く、それが自身の知る『超常の力』によるものだ……。

神聖ブリタニア帝国第17皇子レレーナ・ヴィ・ブリタニア。

オイアグロを相手に、剣を交える金髪の少年の名前。元ナイトオブシックスにして『閃光のマリアンヌ』『不死身の魔女』と呼ばれていた皇妃マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアの次男であり、現状確認されているヴィ家唯一の皇子である。その剣技は、亡きマリアンヌを彷彿とさせるものがありシャルルやビスマルク、コーネリアにとって懐かしきすら感じさせるものであった。

そもそも何故レレーナとオイアグロが戦っているのかと言うと、それは1週間前に遡る――。

レレーナとオルフェウスは、ウズベキスタンでの暗殺任務の後E・U・へ戻り機情局と国防情報局(DIA)、ユーロブリタニア参謀情報部からの情報リークについて調査を行なった。丁度いい事にウズベキスタンでの捕虜の中にE・U・の対外情報総局(FIGD)の諜報員がおり、その人物から『ザ・リフレイン』を使って記憶を読み取りFIGDの他の諜報員や暗号について情報を集める事が出来たのだ。その結果ユーロブリタニア参謀情報部より情報がリークされた事が分かった。その上機情局の情報までもユーロブリタニア参謀情報部からリークされていた事が判明。

レレーナは、ユーロブリタニアへ向かい機情局の情報をどうやって入手したのかを探った。

当然レレーナのユーロブリタニアへの訪問は、内密に行われていたので調査は難航した。しかし参謀情報部監察室の人間にギアスを掛

けて調査を代行させる事で情報は、思った以上に早く集まった。

結果として機情局の情報を参謀情報部へ流したのは神聖ブリタニア帝国第1皇女『ギネヴィア・ド・ブリタニア』の後援貴族であるバレッタ子爵だった。この貴族は、大陸系貴族でありユーロブリタニアに近い事は、公然の秘密である。

そしてギネヴィア自身、ユーロブリタニアの宗主であるヴェランス大公の息子と結婚しており娘が今年生まれている。その為彼女は、本国とユーロブリタニアの関係を改善しようと躍起になっている。又自身が皇帝になる為にユーロブリタニアの支持を必要としており、情報のリークはその為の点数稼ぎの一面もあった。

国防情報局(DIA)の情報を参謀情報部に流したのも本国の貴族だった。ただし此方は、大陸系ではなく神聖ブリタニア帝国第5皇女『カリーヌ・ネ・ブリタニア』の後援貴族をしている男だ。ギネヴィアもカリーヌも反ヴィ家の皇族で、その後援貴族達が命令か忖度かで情報を流していたのだ。

そしてローゼンクロイツ伯爵は、”レレーナがウズベキスタンへ向かった”と言う機情局からの情報を入手したギネヴィアが、軍統合本部へ圧力を掛けて増援として派遣させたようで、通信記録から捕虜となったレレーナを事故に見せかけて暗殺する様に命じられていた様だ。だからこそ基地に到着した際に、全て終わっていた事に苦悶の表情を浮かべていたのだ——ギネヴィアにどうやって報告するかについて考えていたのである。

こういった情報入手したレレーナは、一度本国へ戻り本国の情勢を自身の目で確かめようと考えた。

しかし本国へ帰国しアリエスの離宮へ戻ったレレーナを待っていたのは、オルフェウスを連れて行くこうとするオイアグロであった。ヴァルトシュタイン家の養子となっているオルフェウスをオイアグロは、ギネヴィア達と結託してビスマルクを説得しジヴォン家に引き込む事にしたのである。

図らずもウズベキスタンでの報告を受けていたギネヴィアは、レレーナとオルフェウスの強さについて知る事となった。その為、レ

レーナの力を削ぐ為にオルフェウスを奪い取りオイアグロに恩を売り、あわよくば自身の力としたい思惑があった。又自身の力にならずとも、家族をテロによって失った妹『マリーベル・メル・ブリタニア』の力になればと考えたのだ。

が、この事案がレーナの逆鱗に触れた。

自身の抗議を無視しエウリアを悲しませた事でレレーナは、遂に実力行使に出る事を決意した。レレーナは、真つ先にビスマルクに斬りかかり負傷させてしまう。結果レレーナは、内密にアリエスの離宮で謹慎する事が決定した。しかしレレーナは、今までシャルルやビスマルク、V. V. への配慮の意味も込めてギアスをあまり使用して来なかったが、この一件でその枷が外れてギアスを多用する様になる。

そして事件が起きる。ある大貴族が自身の邸宅から勤め先の会社へ向かっていた際に暴漢に襲撃され重傷を負わされたのである。この事件は、流しの犯行で犯人の特定には時間が掛かっていた。捜査機関が怨恨、通り魔の両方で捜査をするも犯人の足取りさえ掴めなかった。そうこうしている内に第2第3の事件が発生する。そしてさらに事件は過激化して行き、とうとう皇妃の一人までもが襲撃され重傷を負ってしまった。

事態を重く見た帝国特務局は、事件の捜査を捜査機関から特務局へ移し警備と捜査を行う。

すると特務局は、ある事に気付く。襲撃された皇妃や貴族には、共通点があったのだ。

襲撃された皇妃、貴族は、ヴィ家に対してキツく当たっていたのだ。所謂反ヴィ家と呼ばれる勢力だった。特務局がその事実気付いた時には、機情局の人間が皇妃や皇族の警護と言う名目で堂々と皇妃や皇族貴族達を監視していた。

監視している理由の一つに今回襲撃された皇妃、貴族達に機密情報漏洩の嫌疑が掛けられていたからである。

既に皇族や皇妃、その親衛隊から多くの苦情が機情局や特務局へ寄せられていたのだが機情局は、一切そういった苦情を受け取らなかつ

た。それどころか皇族貴族たちは、より厳しい監視下に置かれ現場では、親衛隊と機情局とで衝突が多発していた。当然苦情は、特務局へ集中し状況打開の為にベアトリス・ファランクス特務総監は直接機情局長官を糾そうと考え機情局庁舎へ向う。

当初ベアトリスは、ナイトオブワンであるビスマルクにも意見を聞きたいと思っていたのだが、襲撃事件はビスマルクも含まれていたのだ。しかもビスマルクは、この数日間ですでに50回以上襲撃をされていくらくに仮眠を取る事も出来ない状態であった為、意見を聞くのを見送りにしたのである。だからこそベアトリスが機情局庁舎を訪れたのである。

しかしそこでベアトリスは、衝撃を受ける。

初めは、少し違和感を感じた程度であったが長官と会談をしている内に長官の言葉の端々に襲撃された皇妃や貴族への嘲笑の様なものが感じられたのだ。さらによく長官を観察すると、長官の目が薄っすらと赤色がかっていた事に気付く。ベアトリスは、サーと血の気が引いて行くのを感じた。慌てて会談を終えて庁舎を出ようとした時にさらなる衝撃を受けた。よくよく周りを見ると庁舎の警備員や受付、案内人、すれ違う職員、誰を見ても皆薄っすらと目が赤く光っているのだ。ベアトリスは、機情局が何者かのギアスによって制圧されている事に気付くも時すでに遅しであった。

「こんにちは、ベアトリス特務総監」

後ろから聞き覚えのある声を掛けられ振り返る。振り向いた先に立っていたのは、帝国の皇子にして機情局の現役の諜報員レレーナ・ヴィ・ブリタニアだった。レレーナは、現在ナイトオブワンに斬りかかった為にアリエスの離宮で謹慎中の筈である。にも関わらずレレーナが堂々と機情局庁舎内に居るといふ事は、機情局を制圧したと思われるギアスユーザーは、レレーナであるとベアトリスは考え付く。

レレーナのお気に入りが入りがビスマルクの養子となっており、最近ジヴォン家に連れて行かれた事は、ベアトリスも把握していた。ビスマルクもベアトリスもそれを止める事はしなかった。その報復が、今

回の事件なのだと考えてしまう。

「…殿下」

「ふふ。何もそんなに怖がらなくてもいいでしょう」

ベアトリスは、今でこそ特務総監の地位にいるが元々は帝国最強の騎士の一人ナイトオブツールであり様々な苦難苦境を超えてきた。それでも今レレーナから発せられる異様な威圧感に膝をついてしまう様な、逃げ出してしまいそうな自身に驚いたと同時に、そうさせるレレーナに対して恐怖を感じていた。

これ以上一緒の空間には、居られないと思い足早にその場を離れようとするが周囲を機情局の職員に囲まれ身動きが取れない。

「殿下、これは一体どう言う事でしようか？」

「何、要件はすぐに終わりますよ。ここで気付いたことを忘れて貰おうと思ひまして」

「何を?」

「レレーナ・ヴィ・ブリタニアが刻む! 偽りの記憶を!」

レレーナの瞳から赤き光が飛び立ち、その光はベアトリスの瞳に吸い込まれて行く。そこでベアトリスの意識は途絶える。

ふと意識が戻った時、ベアトリスは既に機情局から特務局へ戻る車両の中に居た。そしてペンドラゴン皇宮でビスマルクと出会い機情局で得た情報を共有する。その際にビスマルクから機情局の様子を聞かれ特に変わった様子は無かったと伝えたのだった――。

第12話 帝都狂乱―破

皇歴2014年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン

帝都ペンドラゴンでは、現在厳戒態勢が敷かれている。数日前より大貴族や皇妃が何者かに襲撃される事件が多発し、その上未だに犯人が特定されていないからだ。襲撃された皇妃や大貴族は、特務局の捜査により所謂反ヴィ家派閥である事が特定されているが、一人だけ当て嵌まらない人物が存在した。

それが帝国最強の騎士ナイトオブワン―ビスマルク・ヴァルトシュタインである。彼は、ヴィ家のマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアと血の紋章事件以前よりの付き合いを持っておりマリアンヌとは、親しい間柄であったのだ。しかし彼もここ数日の間に何十回も襲撃を受けている。ナイトオブワンとして全て自ら撃退しているが、流石に昼夜問わず襲撃を受ければ心身共に疲労が溜まっていた。

今彼は、帝都ペンドラゴンにあるナイトオブブラウンズが使用して居るインバル宮で彼自身にあてがわれている執務室に居る。そして今ペンドラゴンを騒がせている連続襲撃事件について考えた――

ビスマルク自身襲撃されながらも今回の一連事件について調査し考えていた。そして大凡の答えに辿り着いた。

「どうやってこの問題を終結させるか…」

今回の一連事件は、間違いなく自身が敬愛するマリアンヌ様の次男であるレレーナ殿下が主犯である。レレーナ殿下は、現在アリエスの離宮で謹慎をされておりナイトオブブラウンズが3人で監視をしている事は知っている。しかしレレーナ殿下が、主犯である事は間違いない。と言うよりも離宮で謹慎しているかどうかすら怪しい。ギアスを使えばどうとでもなる。

事の発端は、オルフェウスを無理やりジヴォン家の養子とする為に実質拉致しレレーナ殿下の抗議を聞き流した事で間違いない。そしてそれに対する報復が、この一連事件だ。いや、勿論私のミスではあるが：どうしたものか。

既にその事案に関わっていたギネヴィア第1皇女やカリィヌ第5皇女、ジヴォン家そして私自身に関係する貴族達が悉く襲撃され重傷者も出ている状態だ。死者が出ていない事は、幸いであるがいずれ出るであろう事は間違いない。レレーナ殿下は、こういった場面で容赦する様な性格をしていない事は、幼少期から知っている自分が一番よく知っている。

「一番妥当なのは、オルフェウスをレレーナ殿下にお返しする事であるが：返したからといって、事態が終結する事はないだろう」

仮にもしオルフェウスを返すことで事態が終結した場合、事件の背後にレレーナ殿下が居たことが公然の事実となってしまう。そうすると今後他の皇族貴族から恨みを買ってレレーナ殿下が生活し難くなってしまうからだ。保身に長けたレレーナ殿下なら必ず事件と自分は、関係ないという事にするだろう。例えば当事者達がレレーナ殿下が主犯だと考えても大衆にまでその事実が、出てこないようにする為に違うと言い張るはずだ。

またギネヴィア皇女殿下方も何かしらの報復に出る可能性が高く、事態の沈静化には容易為らざるものがある。レレーナ殿下とギネヴィア皇女殿下方の両方の顔を立てる方法を考えなければいけない。

「シユナイゼル殿下か…」

咄嗟に帝国の若き宰相シユナイゼル・エル・ブリタニア第2皇子に相談する事も考えたが、シユナイゼルはビスマルクから見ても優秀であり常に優しげな仮面を着けているので何を考えているのか計りかねる時があるのだ。それ故に相談する事を躊躇ってしまう。

しかし時は、一刻を争う事態だ。恐らく既に機情局は、レレーナ殿下の手に落ちているだろう。その上、帝国特務局もレレーナ殿下によって因果を含められている可能性は高い。何故ならベアトリスが襲撃事件での機情局の対応について質しに行った帰りしな情報共

有の為に話せば、機情局では特に何も無かったと言うのだ。

この事件では、間違いなく機情局とレレーナ殿下が関わっている。何故なら皇族や大貴族を襲撃する事件が多発している時に、情報漏洩の摘発を始めたからだ。何も無いとは、思えない。そしてそれに気付けぬベアトリスでは、ないのだ。つまりベアトリスは、気付けなかったのか、忘れさせられたのか、敢えて何も言わなかったのかと言う事になる。忘れさせられた可能性もあるが、最悪取り込まれた可能性も無くはない。

そうなった場合、機情局と特務局がレレーナ殿下についていると言う事でありそれは、主君であるシャルル陛下にとって脅威になり得ると言う事だ。

もしそうなっていた場合、ナイトオブワンとして皇帝陛下の騎士として自分だけでも守らなければいけない。

ただ、そうは言っても現在進行形で自分が襲撃されている状態では、シャルル陛下を守る事も難しい。

しかも襲撃をされている理由が、「妻を寝取られた」「娘を弄んで殺した」「息子がパワハラで自殺した」「父が…」「甥が…」と外間が悪い内容ばかりなのだ。彼等とは一切面識がない。にも関わらず彼らは、「私が」と言う。その上彼等は、自分が言っている事が絶対正しいと思っている。

実際は、お前の妻は幼馴染の男と駆け落ちしているだろう！お前の所は娘じゃなく息子だろ！お前の息子は受験鬱で今も引き籠もって居るままだろ！お前の父は！お前の甥は！私は全く関係ない!!!なに何で私の事を恨んでいるんだ!?!風評被害も甚だしい!!!

いや、勿論分かっているが。恐らく記憶を書き換えられたか、思い込んでいるかのどちらかだろう。そんな事が出来るのは、帝国広しと言えどシャルル陛下とレレーナ殿下だけではないか。そして自分にこんな仕打ちをするのは、間違いなくレレーナ殿下だ。
The Almighty
全知全能を使えば、シャルル陛下のギアス能力を使用する事も容易いだろう。オルフェウスの事では、確実に自分も恨まれているだろう。

考えが甘かった……。オルフェウスにとってジヴオン家は生家であり、オルドリンとオイアグロは血縁者であるのだ。一緒にいた方が良さだろうと考えたのだが、レレーナ殿下にとってはいけないかった様だ。マリーベル殿下のメル家は、ヴィ家とも関係が良好でジヴオン家はその後援貴族。ヴィ家の悪い様にはならないだろうと考えたが、レレーナ殿下はエウリアと呼ばれる少女の心情を優先した。その上ギネヴィア皇女殿下なども関わった所為で政治的な意味を帯びてしまった……。その結果がこの騒乱だ。

自分だけならまだいいが、シャルル陛下にまで累が及ぶのは防がなくてはいけない。

「とにかくレレーナ殿下を抑えなければ……」

だがいい方法が思いつかない。下手に接触すればレレーナ殿下のギアスが飛んでくる可能性があり、面と向かって会うことすら憚られる。いや寧ろ真っ先に斬りかかれた際にギアスが使われなかった事は、幸いであった。

「ジヴオン卿と一度話した方が良さだろうな」

ビスマルクは、今後のことでオイアグロと会って事態打開策を考える事にした。しかし彼は、知らない。既にオイアグロ率いるジヴオン家にもレレーナの魔の手が迫っており、危機的状況になっている事だ。

日が暮れ辺りが真っ暗となり街灯の光が街を照らすようになった時、ビスマルクがインバル宮を出てオイアグロの元に行こうとした。それと時を同じくしてペンドラゴンで更なる事件が発生する――

ビスマルクが、インバル宮からジヴオン家の屋敷に向かおうとしている時、時を同じくして神聖ブリタニア帝国第5皇女カリーヌ・ネ・ブリタニアは、視察先の劇場から自らが住む離宮への帰路についてい

た。

「カリーヌ様、明日は午前よりホテル・グレートペンドラゴンでの親善パーティーがございまして、午後2時よりギネヴィア皇女殿下との会食が用意されております」

「こんな時に親善パーティー？」

「こう言った時だからこそ、貴族達と結束して行こうと言う事だと思われませう」

カリーヌは、乗っているリムジンで対面の席に座っている執事が明日の予定を淡々と言う事にイライラしていた。今自分たちの後援をしている貴族や企業の役人達が次々と襲撃されているのだ。中には、自身の母も襲撃され重傷を負わされているのだ。こんな時集まってパーティーなど警戒心が無さ過ぎるのではないかと思ってしまう。

「ご安心下さい姫様。姫様は、この身に代えて私が守ってみせます」カリーヌがイライラしている理由がわかる、彼女の選任騎士『ダスコ・ラ・クレルモン』は彼女を安心される為に口にしてハッキリと伝える。自分が守る故パーティーに参加して欲しいと。

カリーヌ自身が、自分も襲撃されるのではないかと不安に思っており、それ故にストレスからイライラしているのだ。その上機情局があるからさまに護衛名目で自分を監視している事もストレスの原因となっている。

「はああ…ダスコしっかり守ってね」

「イエス・ユア・ハインス。この命に代えても」

カリーヌの隣の席に座っているダスコは、体をカリーヌの方へ向け頭を下げる。

「では、明日のパーティーには参加の方向で宜しくお願いいたします」カリーヌは、思う。この執事、今日はやけに凶太くはないだろうか。そして同じ事をダスコも思っていた。昨日までの執事は、どちらかと言うとカリーヌの機嫌を損なわないように最大限の配慮と言葉遣いをしていたが、今日は少し皮肉混じりなような気がしていたのだ。

「今日は、どうかされたんですか？」

ダスコが思い切って執事に聞いてみる。すると執事は、赤みがかつ

た瞳でダスコを見て薄っすらと笑みを浮かべて見返してきた。その笑みを見てダスコは、ゾツとした。そして本能的にカリリーヌを抱いて車から飛び降りる。すると直後に先程まで乗っていたリムジンが運転手と執事を道づれにして爆発する。

爆風からカリリーヌを守るように体勢をとった為にダスコの体には、強烈な衝撃が襲う。

「ぐっ!?!」

「キャッ!?!」

爆風が収まりダスコがカリリーヌを離すと、二人は立ち上がるが先程まで乗車していた車が燃え盛る様を見つめる事となった。運転手と執事は、まず助からないだろう。そう思っていると護衛車から護衛の者達が降りて来て二人の安否を確認する。

「ご無事ですか!?!カリリーヌ殿下!クレルモン卿!」

「大丈夫だ!直ぐに新しい車を手配してくれ!皇女殿下を早く安全な場所へ避難させるんだ!」

「い、イエス・マイ・ロード!」

ダスコが駆け付けてきた護衛の者達に手際よく指示を出す、それに答え機敏に対応を始める護衛の者達。それを見ても未だカリリーヌは、放心状態のままであった。そんな主君の状態を確認するとダスコは、彼女の前に立ちしつかりと目を見て先程伝えた事をもう一度伝える。

「姫様は、私がお守り致しますので安心して、私にお任せ下さい」

「ダスコ…!」

「大丈夫」

カリリーヌは、第5皇女である。しかし年齢的には、未だ10歳とレレーナやナナリーとほぼ同じ年なのだ。当然こんな年齢では、まともに人に害されそうになった事など無くまして殺されかけた事など一度も無い。レレーナからして見れば「何でやねん!」とツツコミを入れたくなる程、順風満帆な生活を送って来たのだ。

そんな彼女が、今日初めて本気で殺されそうになった事で恐怖のあまりまともに思考する事すら出来なくなっているのだ。

そんな主君を落ち着かせようと必死に宥めるダスコ。すると再び

ダスコに本能が警鐘を鳴らす。

「伏せて！」

ダスコがカーリーヌを抱き地に伏せる。すると突然銃声が辺りに響き護衛の一人が倒れる。倒れた護衛は、血を流し絶命した。カーリーヌがその遺体を見て小さく悲鳴をあげる。

「イヤアア！」

「姫様！見てはいけません！」

ダスコがカーリーヌを抱きしめ視界に遺体が入らないようにする。すると再び銃声がなり近くにあつた車両に銃痕がいくつも作つていった。

「敵襲！」

「皇女殿下を守れ！」

護衛官たちが、銃を取り出し銃撃してくる襲撃者に対して、車や街路樹などを盾にして反撃をする。護衛官は、ハンドガンとサブマシンガンで対抗するが襲撃者は、アサルトライフルなどを中心にして武装しているので火力で差が出ている。

「閃光弾！」

護衛官の一人が車の中から閃光弾を撃つピストルを取り出し、それを空に向けて放つ。すると発射された弾は、光を放ちながらゆっくりと落下してくる。閃光弾の光を受け道路を挟んだ反対側に複数人の人影が浮き上がる。その人影の中に筒状の物を持っている人間がいる事にダスコは、気付く。

「RPG！」

ダスコの叫びと共に襲撃者の一人がRPGを発射する。放たれたロケット弾は、真つ直ぐに護衛官達が盾にしている車に向かい大きな爆発を起こす。

「ぐあああ！」

爆発に巻き込まれ吹き飛ばされる護衛官の叫び声が辺りに響く。さらに燃え盛る車から放たれる光によってダスコや護衛官たちの位置が襲撃者に丸分かりになってしまう。

「車はまだか!？」

「現在応援と共にこちらに向かつております！」

「ぐっ、あと何分で到着する？」

「あと7分です！」

護衛官たちの会話を聞きながらダスコは、思案する。如何にしてカリーヌを助けるか。このままでは、ジリ貧でカリーヌを守りきる事は出来ないだろう事は、明白であった。そんな時、ふと視線を向けた先にこちらをジツと見ている人影に気付く。

その人影は、全身を覆う外套にフードを目深に被った人物だった。身長的にまだ子供の部類だろう。襲撃者たちの中で唯一武器を持たず攻撃をしてこない様子からダスコは、そのフードの人間が襲撃者のリーダー又は連絡員だろうと予想をつける。あのフードの人間を撃てば襲撃者たちは、撤退してくれるだろうか…。

「ぐっ!？」

「なんだ貴様!？」

突如、襲撃者たちの方から叫び声が聞こえてくる。ダスコがよく見ると、襲撃者たちの中に真っ白な外套を纏い、金色の刃を持つ大剣を振るう大男が見えた。その大男の登場に護衛官たちは、歓声を上げる。

その大男は、帝国では知らぬ者なしと言われる帝国最強の騎士ビスマルク・ヴァルトシュタインであった。

「ヴァルトシュタイン卿！」

「クレルモン、皇女殿下を連れて離脱しろ！此処は、私が食い止める！」

「しかし!？」

「目的を履き違えるな！卿の任務は!？」

「!？」

「行け！」

「イエス・マイ・ロード！」

ビスマルクからの叱責を受けてダスコは、自身の主君を姫抱きにして移動を始める。ダスコに続いて護衛官たちも移動を初めて襲撃者たちから距離をとる。そしてビスマルクが連れてきた護衛たちと合

流して撤退を始める。ダスコたちは、ビスマルクが向かっていたジ
ヴオン家に向かい保護されることとなる。

それからビスマルクによつて襲撃者たちは、悉く討ち取られ事件は
終息する。

その遺体の中にフードを被った外套の人間は、含まれていなかった

襲撃事件の現場から少し離れた場所にある路地を進む一つの影。
その影は、襲撃現場にいた全身外套に包まれフードを目深に被ってい
る人物である。その人物は、暗闇の中で携帯を使つて会話をしてい
た。

《やあ、首尾はどう?》

「目標を始末する事は、出来なかつた様だ」

《そつか、なら仕方ないね。ごめんね態々ユーロから来てもらつて》

「気にしていない。それより此方こそ余り役に立てなくて済まない」

《それこそ構わないよ。元より脅し半分だからね。それに君には、だ
いぶ役立つて貰つたから感謝してるよ》

「そうか。済まないがもう戻らないといけない」

《うん、分かつてる。後は、彼が上手くするだろう。∴帰る前に一度
こつちに寄れるかい、アキトにもお土産が必要でしょ?》

「分かつてる」

《なら待つてるよ、おやすみシン》

「ああ、おやすみレナ」

そう言つて後にシンと呼ばれた男は、携帯を閉じポケットにしま
う。その後一言も発せず暗闇の中に溶けていった。

帝都の狂乱は、まだ終息する気配を見せていない

第13話 帝都狂乱―急

皇歴2014年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン

神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン皇宮 玉座の間で、皇帝シャルルは、ビスマルクと二人で密談を行っていた。

帝都の混乱具合を見てシャルルは、如何にしてレレーナの気を鎮めるかを考えていた。双子の兄のV・Vの話では、レレーナのギアスは自身の想像した力を発現する力だと言っていた。そしてビスマルクから報告で、レレーナが自分の『記憶改竄』のギアスを使用している可能性もある。機情局は、既にレレーナによって制圧され制御下に置かれており、特務局もギアスによる侵食を受けている。その上一部貴族は、大逆罪の名の下に粛清が行われ始めている。

自分の知らぬところで機情局が、機情局の情報や国防情報局の機密情報を不正に流出させていた貴族やその関係者を逮捕しようとしたのだ。しかも逮捕者リストの者達の多くは、逮捕時に抵抗もしくは逃亡を図ったとしてその場で射殺されている。この異常な事態となっても機情局から此方へ上げてくる報告は、普段と変わらず平凡な報告書だけであった。こう成ってくるとシャルルも流石に機情局で何かあったと考えるのは、当然の帰結であった。

本来であれば、政治などと言う俗事は一切他人に任せるが、今回はそういう訳にはいかなかった。皇帝直轄の情報機関である機情局は、皇帝以外の権限が及ばず宰相府や宮内省、帝国特務局を持ってしても干渉は難しいからだ。つまり事態打開のためにシャルルに機情局を問い質して欲しいと言う陳情が、宰相府を中心に多数上がっているのだ。既に現役の皇女までもが襲撃される事態となっているので、事は一刻を争う状態なのだ。特に粛清された貴族の後援を受けていた皇妃皇族たちからの陳情が多く、その筆頭はギネヴィア・ド・ブリタニアであった。

「ビスマルク。カリヌを襲撃した賊について何かわかった事はあるのか？」

「カリヌ様を襲撃したのは、陛下の覇権主義に反発するテロリスト

グループの構成員である事が機情局からの報告で判明しております」
「機情局からか」

カリリーヌを襲撃したのは、反シャルル主義派組織と呼ばれるシャルルの覇権主義に反発する者達であると、結論付けられた。理由としては、襲撃者の遺体の中に機情局や司法省広域捜査局がマークしていた主義者が含まれていたからである。この事から広域捜査局は、昨今の帝都混乱に乗じての皇女暗殺未遂事件として捜査を開始した。機情局もこの捜査に協力する事に成っているのだが、シャルルは何か釈然としない。そしてそれは、ビスマルクも同じであった。

「本当にただ皇族を狙った暗殺未遂と思うか？」

「分かりません。捜査機関では、そういう事と成っておりますが」

「ビスマルクの見解は？」

「私個人の見解としましては、今回の襲撃は恐らく狙いはカリリーヌ様ではないかと」

ビスマルクは、襲撃された現場に運良く駆け付けたがもしビスマルクが駆けつける事が出来なかった場合、カリリーヌは殺害されていた可能性が高いと考えている。理由は、襲撃された場所が丁度護衛部隊が最も離れる場所であり、護衛が少なくなる場所でもあったからである。勿論、警護の仕様上仕方ない事であったがこの情報を知っているのは少ない。にも関わらず今回襲撃を受けたという事は、襲撃者は事前にその事を知っていたのではないだろうか。すると警護をしていた『ネ・ブリタニア』の者か、警護騎士団の中に襲撃者に内通する者が居たという事になる。そうなればほぼ間違いなくカリリーヌは殺害されていただろう。一方で襲撃者達の中には、やけに護衛の者達を攻撃する者が多く、若しかすると狙いは護衛の方だったのではないかと思えなくも無かった。

「狙いが護衛の場合か…」

「レレーナ殿下にとってオルフェウスは、将来の自分の騎士でありました。それを奪われた腹いせに相手の騎士や護衛、後援者を狙ったとも考えられます」

「そうなるややはり主犯は、レレーナか…」

「捜査機関の捜査では、遺体の中に当局が把握している主義者が混じっていたので犯人グループは、陛下に反発するテロリストグループではないかと疑っている様です」

「襲撃者の中に主義者が居たと言うが、当然機情局も把握していたのであろう」

「はい。機情局もマークしていたと報告を受けています」

「つまりレレーナも知る機会があつたと言う事だな」

「…」

ビスマルクにそれを答えることは、難しい。何故なら今回の襲撃事件は、レレーナが裏で糸を引いていると言う証拠は何も無い。レレーナは、現在アリエスの離宮で謹慎中であり、ラウンズ3人が監視に当たっているのだ。彼らの話では「レレーナ殿下は、一度も外に出ておられない」との事だ。

当然ギアスを用いれば、誰にも見られる事なく外出する事は造作もない。レレーナには、犯行動機があり手段もある。しかし繰り返しではあるが、証拠がない。と言うよりも捜査をしている所がレレーナの息が掛かっているのだ、証拠など出るはずがない。証拠がなければただの推論、捜査機関は動かない。シャルルの強権を持つてすれば逮捕も処刑も出来ない事も無いが、まず間違いなく抵抗をされ『血の紋章事件』以上の惨事を招くだろう。迂闊に何かを言う事は、出来ない。「レレーナ以外に誰がいる?」

シャルルにも、ビスマルクの考えていることは分かる。しかしレレーナ以外に居るとは、シャルルには思えなかった。

ビスマルクにも答えられない。

シャルルを守る立場にいるビスマルクは、下手に動くとならばレレーナの攻撃対象になる可能性がある事を意識している。

「陛下。仮にレレーナ殿下が主犯であつたとしても殿下自身が認める事は、無いでしょう。また事件の切っ掛けと思われる、オルフェウスをレレーナ殿下にお返しになっても終息はしないかと。その為、まずオルフェウスを返し、その後機情局に犯人を逮捕する様に勅命を出されれば、レレーナ殿下が犯人を用意されるのでは、ないでしょうか」

？」

「レレーナ自身に事態の終息を命ずるか…」

「レレーナ殿下が主犯であった場合ですが」

「違った場合は？」

「最悪のケースですな」

そうこの対応は、レレーナが主犯であり全てがレレーナの管理下にあるからこそその話である。レレーナでない場合、帝国は誰かも分からぬ襲撃者に攻撃されている事になるのだ。まあその場合でも最後は、レレーナが粛清を行うであろうが…。

「…違う可能性も考慮すれば嚮主V・V・に御相談する方が宜しいかと」

「…そうだな。ギアスユーザーが犯人であった場合兄さんに依頼をした方が良いな」

皇歴2014年 アーカーシヤの剣

シャルルとV・V・そしてマリアンヌが計画している神を殺す計画『ラグナロクの接続』。その神を殺す兵器たる『アーカーシヤの剣』に二人の影が伸びる。

一人は、金髪で髪が地面に届きそうな程伸びている少年。もう一人は、同じく金髪で後ろ髪を編んでいて背中中央まで伸びている子供。「叔父上、こんな所に呼び出して一体何の用ですか？」

髪を編んでいる子供。レレーナ・ヴィ・ブリタニアが自身の叔父であり、ギアス嚮団嚮主V・V・に問う。

「分かつてる癖に」

「念の為ですよ」

レレーナは、穏やかな笑みを浮かべながらV・V・の方を見る。その笑みに緊張や怒りといった感情は、見えず何を考えているか分からない。

「シャルルが困ってるんだ」

「帝都での混乱ですか」

「うん。単刀直入で聞くよ？犯人は君かいレレーナ？」

「いいえ。僕は違いますよ」

「僕は、嘘が嫌いなんだよ？」

V・Vは、殺気を放ちながらレレーナに言う。

しかしレレーナは、何ともないと言わんばかりに澄ました顔でV・Vを見返す。その後苦笑を浮かべて口を開く。

「嘘じゃないですよ。僕は違います」

「…じゃあ君が知っている事を教えて？」

「良いですよ。でも僕今欲しいものがあるんですよ」

「またか」

「僕としては、父上に手を出すつもりは無いので叔父上には、必要ない情報ですけどね」

V・Vとしては、レレーナと敵対するつもりはない。レレーナがシャルルに手を出さないならば、態々レレーナのお願いを聞く必要は無い。ただシャルルから頼まれた上にマリアンヌの件で後ろめたさも有るのでシャルルの頼みは、なるべく聞いてあげたいと思っ

「…はあ、何が欲しいの？」

「僕としては、オルフェウスを取り戻したら良いんですけど、同じような事がまたあったら嫌なんでチャンスが欲しいんです」

「チャンス？」

「オイアグロと」決闘の儀を行う許可が欲しいんです」

「ああ、なるほど」

決闘の儀とは、神聖ブリタニア帝国に古くから残る伝統の儀式であり、皇族や貴族がお互いに何かを掛けて剣で戦う儀式の事である。現在でも皇帝の許可の下、皇族や貴族が行われている。

レレーナは、決闘の儀でオイアグロからオルフェウスを取り戻すつもりなのだ。そしてあわよくばオイアグロをその場で刺殺するつもりなのだ。V・Vは考えた。

「良いよ。シャルルに取り成してあげる」

「ふふふ。有難う御座います。では、帝都で襲撃事件を起こしている犯人でしたね」

「そう。誰？」

V・Vは、レレーナから犯人を聞こうとするがレレーナが口にしたのは全く違う事であった。

「僕は、彼にギアスを与えたんです」

「!？」

「物は試しだと思ひまして」

「そんな事!？」

V・Vは、レレーナの話聞いて驚愕する。確かにギアスやコードは、未だ分からない事が多く謎の力である。しかしコードユーザーでも無いギアスユーザーが他者にギアスの力を与えるなど聞いた事がない。もしそれがレレーナの全知全能The Almightyの力の範囲内だとしたら、只でさえ手に負えないレレーナが更に手に負えない存在になってしまう。

「ああ、ただ叔父上みたいに新しいギアスを発現させたのではなく、僕のギアス能力の一つを貸してあげたんです」

レレーナのギアスは、幾つものギアス能力を使う事ができるものだ。その中の能力を貸すと言う事は、任意能力を与えるのと同じでありそれはV・Vが契約して新しいギアスを発現されるよりも遙かに効率的に優秀な駒を作る事ができる。

「ただその間は、僕はギアス能力を一つしか使用出来なくなる上に常時ギアスを発動状態になつてしまふんですけどね」

いや、それでも充分だろうとV・Vは思う。

「…どんなギアス能力を貸してあげたの」

「父上と同じ他者の記憶を改竄する能力を」

やはりかとV・Vは、思う。シャルルからの報告では、帝国特務局総監であるベアトリスがギアスを受けた可能性を指摘していた。その際にベアトリスは、記憶を消された又は、操作された可能性があるとしてビスマルクは指摘した事を聞いていた。

記憶を操作すれば他者に自分への忠誠を誓わせる事も、自分の存在

を消す事も出来る。今回の帝都で襲撃を行なっている者が、そのギアスを使って計画を立てていたとすれば捕まる事は、まず無いだろう。「また面倒な能力を与えたね」

「簡単な能力では、直ぐに制圧されてしまうと思ひまして」

「…」

「ふふふ」

レレーナは、さも愉快であると言わんばかりの顔でV・V・を見る。V・V・は、久し振りにレレーナの異常さを自身の目でまざまざと見る事となった。

「結局誰に渡したの？」

「アレクセイ・アーザル・アルハヌス卿ですよ」

「…誰？」

アレクセイ・アーザル・アルハヌスは、帝国で要人警護を専門とする警護騎士団（ガーズ）の騎士団長であり、反皇族主義を掲げる主義者の一人であった。彼は、あくまでも反皇族でありブリタニア帝国自体を嫌っている訳では無いので、植民地政策について何かを言っている訳では無い。こう言った考えの主義者は、意外にもブリタニア内で一定の勢力を持っており仲間を集めるのに苦労する事は無い。

そして要人警護専門の警護騎士団なだけにはあり、要人の行動と言うのは非常によく分かっていた彼は、うまく皇妃や貴族達を襲撃していったのである。

「随分と御誂え向きな人物を選んだね」

「本当にいい人物を僕の監視に付けてくれました」

説明を聞きV・V・は、頭が痛くなる様だった。駒を与えたのは、シャルル達の方だった様だ。

もう少し身辺調査をしつかりとしてからレレーナの側に置かないと、色々な意味で危ないじゃないかとV・V・は思う。

「処分は、君に任せてもいいの？」

「いいですよ。事が終わり次第に」

「分かったよ」

V・V・としては、当初考えていた以上の成果があったので良かった

だが、やはりレレーナは”危険だなあ”と思いながらも”面白い”とも思いつながらアーカーシャの剣を去っていくレレーナの後ろ姿を眺めていた。

僕は、今ペンドラゴン皇宮からアリエスの離宮へ向かう車に乗車している。警護に付いているのは、機密情報局の者達である。今僕が乗っている車の運転手も機密局の職員の一入であるヴィクトルだ。当然ヴィクトルにも、ギアスを掛けている。

彼には、『ザ・ソウル』を使っていつでも体に乗っ取れる状態にして『絶対遵守』で完全に制御下に置いている。『ザ・ソウル』は、母マリアンヌのギアスでギアスを発動するとその人の身体に乗っ取り自在に扱う事ができる様になる。『絶対遵守』は、我らがルル兄様の将来のギアスであり、目を見た人物に一度だけ絶対の命令を出す事ができるギアスだ。

今回の件で、僕はかなり無理をしている。最近では、オルフェウスに任せる事まで自分でする様になっているので手が足りない。その為アレクセイの計画を監視する役として、ユーロブリタニアから日向シンを呼んでカリィヌ達の襲撃事件の現場に行つて貰つた。

シンとの関係は、僕とオルフェウスがウズベキスタンで任務を終えた後に情報リークに付いて調査する為に、ユーロブリタニアへ行つた際に出会つて以来である。

シンからの報告では、アレクセイは僕の要請を無視して当初の予定に無かつたカリィヌ襲撃を行った。皇族を狙えば後の計画に響くから止めるようにと言つておいたのに……ここで始末しても良いけど、まだ彼にはやつて貰う事があるし。まあでも、後でお仕置きが必要だね。

V・Vには言っていないが、ギアスを貸す力は実はかなり効率が悪い。これは、僕が意識的にギアスを貸し続けなければいけないのだ。つまり僕がギアスの発動を止めると自動的にアレクセイも使用

できなくなるのだ。アレクセイがギアスを使い続ける為には、僕がギアスを貸す力を発動し続けなければいけない。この事は、アレクセイも知らない事である。僕は、彼の事を信用も信頼もしてないしね。

まあしかしこれで、V・V・とシャルルへの牽制にもなるだろう。ギアスユーザーを一人とは言え作る事が出来る力があれば、迂闊に僕へ仕掛けて来ないだろう。本気だったら分からないけど…。

「殿下」

「うん？」

「皇帝陛下より決闘の儀の開催の許可が出ました」

助手席に座っているビスマルクが前を向いた状態でそう言った。多分振り向くとギアスが飛んでくると思っているのだろう。それに運転手も護衛も全員が機情局の人間であるので警戒しているのかも知れない。ただ甘いよビスマルク。

ギアスは、結界型や命令型、憑依型などで命令型、憑依型の多くは、目を合わせる事で発動できる。しかし中には、声を聞かせる事で命令を出す事ができるギアスもある。『コードギアス反逆のルルーシュ OST COLORS』に登場する主人公のライが使用するギアスは、声を聞かせた相手に自分の命令に従わせる事ができるギアスである。

これを用いれば、今ここでビスマルクに従わせる事が出来るが、シャルルやV・V・をこれ以上刺激するのは良くないと思うからしない。

「そっか、それは良かった」

V・V・との会話は、本当に何時やっても緊張する。今回も僕は、なけなしの演技力を使ってV・V・と相対していた。殺気をぶつけられた時なんかチビリそうだったけど、何事も相手が居る事では常に相手より優位である事を相手に見せなければいけない。常に余裕な笑みを浮かべてこちらの底を見せない様にする。何時もシュナイゼルがしている事だ。

「これでオルフェウスを取り戻せるよ」

「決闘の儀が開催されたからと言ってジヴオン卿が、オルフェウスを

掛けるとは限りませんよ。それにそもそもオイアグロが決闘の儀を受けるかも分かりません」

「そうだね。だからアレクセイには、もう少し頑張って貰わなくちゃね」

「？」

僕とエウリアからオルフェウスを奪った彼らには、それ相応の報いを受けて貰わなくちゃね。

レレーナとV・V・との会談が行われた翌日。

ジヴォン家の人間は、慌ただしく動き邸宅は人の出入りが激しくなっていた。何故この様な状態になっているかというところ、きつかけは一本の電話であった。

《マリーベル・メル・ブリタニアとオルドリン・ジヴォンを預かった。返して欲しければ近日中に決闘の儀を行い、衆人環視の中でレレーナ・ヴィ・ブリタニアを殺せ》

その電話を受けてジヴォン家当主は、急遽マリーベルとオルドリンの捜索を行った。しかし彼女達が外出先で誘拐された事が分かっただけであった。

ジヴォン家と特務局の護衛は、襲撃時に抵抗をしたが数の暴力によって押し切られてしまっていた。機情局は、前日に皇帝の勅命を受けて監視と言う名の護衛を外していたので戦闘には、参加する事はなかった。

オイアグロは、1日かけて捜索を行うも二人を見つかる事が出来なかった事を受けて、皇帝に謁見を願う出る。幸いすぐに謁見が叶った。そしてオイアグロは、異例ではあるが謁見当日に皇帝に対してレレーナに対して決闘の儀を執り行う許可を欲した――

第14話 帝都狂乱―結

皇歴2014年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン
神聖ブリタニア帝国の中樞、ペンドラゴン皇宮謁見の間。

その場所には、普段から多くの貴族役人達が皇帝の歡心を買おうと思つて集まっている。そんな中で注目を集めている人物が二人。

一人は、今日謁見を求めて来てそれが叶つた下級貴族当主オイアグロ・ジヴオン。もう一人は、先日ナイトオブワン”ビスマルク・ヴァルトシュタイン”に斬りかかつて謹慎処分となり今日解除された第17皇子レレーナ・ヴィ・ブリタニアである。

そして今、謁見の間は、響めきが起きていた。オイアグロがレレーナに対して決闘の儀を申し込み皇帝に許可を願ひ出たのだ。当日に皇帝の裁可を得ようとするのは、異例であるがそれ以上に下級貴族が皇族に決闘の儀を申し込む事は、異例な事であった。

さらに周囲を困惑させたのが、レレーナが決闘の儀を拒否したのだ。自分に利益が無いと、にべもなく断つたのだ。

オイアグロは、レレーナはオルフェウスを取り戻す為に受けると思っていたが、それが叶わなかつたことに驚いた。レレーナは、オルフェウスの事を取り戻そうとしないのかと疑問に思いながら、このままではマリーベルとオルドリンが危ないと 必死にレレーナへ決闘の儀を申し込むも取り付く島もない。

いつそ周りが哀れむ程、オイアグロは焦燥していた。レレーナが自分を見る目は、道端に転がっている石ころを見る様などうでもいいと言わんばかりで、決闘の儀にもこればかりも興味を示さない。

ギネヴィアやカリーヌがオイアグロに味方する形で決闘の儀を受ける様に言うも嘲笑で返される。オイアグロの心は、少しずつ絶望に染まつて行く。

尊敬する姉を殺す事になり、せめて娘のオルドリンと息子のオルフェウスを救いたいと思うもその手段が自分には無い。二人の為だと少し強引に事を運べばオルドリンとマリーベルを危険に晒し、殺す対象であるレレーナに懇願するしかない状況となる。オイアグロは、

自身の弱さを呪うしかなかった。

オイアグロの焦燥した顔を見ると少し心がスカツとした。僕の抗議を無視してエウリアを悲しませた元凶の一人。

万事予定通り、アレクセイにマリーベルとオールドリンを誘拐させ解放の条件に僕と決闘の儀をして殺す事を提示した。僕の方から決闘の儀を申し込んでもオイアグロが受けるとは、限らない上にオルフェウスを賭けるとも思えない。ならば向こうから賭けてもらう必要がある。

結果は、上々。オイアグロは、必死に決闘の儀を受けて欲しいと懇願してくる。愉悦だったが、同時に不快でもある。

オイアグロは、未だにオルフェウスを賭けてこないのだ。企業の利権やお金、騎士の名誉と言った僕にとっては、どうでも良い事ばかり賭けてくる。その上、ギネヴィアやカリーヌが騎士ならば挑まれた決闘は、受けるのが礼儀だと宣ってきた。

「僕は、騎士ではなく皇族であり機情局の諜報員ですから、それには当てはまりませんね」

「あんだそれでも男なの!?!」

「女は良いですねえ。襲撃されても自分は泣いとけば良いのですから。楽なお仕事ですね」

「なんですって!」

「弱肉強食のブリタニアに弱い皇族は必要ないでしょう。さっさと皇族など辞めてしまわれた方がよろしいのでは?」

「あんだだってジヴオン卿の挑戦を受けないなんて臆病者じゃない!」

「何故メリットも無い試合を受けねばならないのです? 時間の無駄ですよ」

本当にああ言えばこう言うとお互いに思っているだろうけど、部外

者が口を挟むな！これは僕とオイアグロの真剣勝負なのだから――

「レレーナ殿下。どうか、どうか伏してお願い申し上げます」

オイアグロがとうとう謁見の間で土下座までしてお願いしてきた。これはちよつと驚いた。ここには、多くの皇族貴族が居る。そして皇帝の御前でもある。これは、ジヴオン家の名誉に関わる事だ。

しかしそれだけこの男にとってあの二人、もといオルドリンとオルフェウスが大事なのだろう。それだけは、認めてやる。

「レレーナ。ジヴオン卿が此処までしておられるのだから、受けて上げられないかな？」

「そうだな。レレーナ、卿の騎士では無いと言う事は尤もだが、皇帝陛下の御前で此処までしているのだから受けてやらないか？」

シユナイゼルとコーネリアまで参戦してきた。これじゃまるで僕が悪者みたいだ。

皇帝の御前でこういった揉め事は、よく無いのだがシャルルもビスマルクも何も言わない。二人は、これが茶番である事を知っている。僕は、決闘の儀は受ける。それは、決定事項なのだ。ただ条件は、吊り上げないとね。やられた分は、倍以上にして返すが僕のポリシーだよ。

「そうは言いましたもお二人共、何故ジヴオン卿が此処まで決闘の儀に拘っているかご存知ですか？」

「…いや私は知らないが、兄上は？」

「いや、私も知らないな」

シユナイゼルとコーネリアは、ギネヴィアとカリーヌの方を見るが二人はオイアグロの方を見ておりシユナイゼル達の視線に気付いていない。

「ジヴオン卿、皆様にお教えに成つては如何ですか？それともギネヴィア姉上かカリーヌが説明されますか？」

まあ当然三人共黙りである。そらそうだろう。

皇族を守るべき貴族が自身の後援する皇族を守れず、他の皇族を害そうとしているとは言えまい。そしてそれを利用して僕を排除しよ

うとしていたとも言えない。テロリストにしてやられた貴族とテロリストを政争に利用しようとした皇族、これは皇帝の前で言える者は帝国広しと言えど居ないだろう。実質テロリストに屈したなど弱肉強食のブリタニアで認められる訳が無い。

「では代わりに私が説明しましょう」

「!？」

オイアグロが目を見開いてこちらを見る。

「そもそも原因は、昨日の午前にマリーベル姉上とジヴオン家次期当主オールドリンが何者かに誘拐された事です」

そう言えば謁見の間に響めきが起きる。シユナイゼルやコーネリアはおろか、シャルルやビスマルクも驚愕の表情を浮かべている。当然この情報は、極秘でありジヴオン家は限られた者にしかこの情報を伝えていない。機情局は、ジヴオン家にもモグラを送っているのであつさりとその情報入手事が出来た。

と言うよりも誘拐は、僕が命じた事だから始めっから知ってたけどね。

「誘拐犯は、ジヴオン卿に決闘の儀で僕を殺せば二人を解放すると言ったそうです、だからこそジヴオン卿は、急遽僕に決闘の儀を申し込んで来た」

「!？」

「なんだと!？それは本当かジヴオン卿!？」

「…」

コーネリアに問い詰められても何も言えないオイアグロ。それを見て本当だと皆が悟った。

後援する皇族と姪っ子の為に他の皇族を殺す。それに納得できる人間が何人いようか。テロリストに抗して守るべき皇族を見殺しにするか、屈して別の皇族を殺すか。どちらにせよ皇族が死ぬ。テロリストからすればどちらでも良いのだろう事は、誰でも分かる。それが分からぬ皇族貴族は、この場には居ない。

「…僕は、命を賭けるんだよ?それに対してお金や名誉?そんなチンケな物で僕が釣れると?随分と安く見られたものだ」

「…申し訳有りません」

「何を賭ける？」

「私の命を「要らない。そんな安物」っ!？」

「父上の御言葉にもあるだろう。人は、平等ではない。僕と君の命が等価？有り得ないよ」

命なんぞ賭けられても何の得にもならない。せめて自分の全てとかにしろよ…。

「勿論、オルフェウスだけじゃ足りないよ。元々僕のモノなんだから」

僕が欲しいのは、僕の命に似合うものだよ！

提示出来ないなら、僕が要求しちゃうよ。

「出せないかい？」

「…」

「なら僕が要求しよう。決闘の儀を受ける条件は、オルフェウスとジヴォン家の次期当主の座の二つで手を打ってあげよう」

「!？」

再び謁見の間で響めきが起きる。

ジヴォン家の次期当主の座。一見下級貴族の当主の地位だと思われるかも知れないが、その実ブリタニア皇族の為に破壊、諜報、暗殺などを行う特殊部隊『プルートーン』の隊長を務めているのがジヴォン家の当主なのだ。つまりジヴォン家の次期当主の座を寄越せとは、プルートーンを自らの指揮下に置かせろと言う事である。僕が欲しいのは、それだよ。ブリタニア国内で権力争いをするならば、プルートーンを抑える事は絶対必要であろう。

「そんな事認められる訳が!？」

「父上の裁可があれば問題無いのでは?」

「っ!？」

ギネヴィア、此処は専制君主国家で、皇帝が決めた事は絶対だ。勿論無茶は出来ないが、決めてしまえば何も言えまい。

「父上、この二つの条件を認めて頂ければ決闘の儀を受けようと思えます」

「…オイアグロ・ジヴォン、貴様はどうする」

「…っ。承知しました」

「ジヴォン卿！」

オイアグロがジヴォン家次期当主の座とオルフェウスを賭ける事に承諾すると、ギネヴィアがオイアグロの名を叫ぶ。

「良かろう。神聖ブリタニア帝国皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの名の下に、レレーナ・ヴィ・ブリタニアとオイアグロ・ジヴォンの決闘の儀を行う事を認める！」

『イエス・ユア・マジエステイ』

シャルルが宣言すると僕とオイアグロは、シャルルに礼をする。

オイアグロ。先ずは君からオルフェウスを取り戻すでしょう。そろそろ本当にエウリアを見るのが忍びない。僕も寂しい。

謁見の間での出来事の翌日。午前より決闘の儀の開催地となる競技場スタジアムには、既に観戦希望の多くの観衆が集まっていた。今度の決闘は、ブリタニア帝国の歴史の中でも珍しい皇族対貴族の闘いなので注目度が非常に高い。又皇族や大貴族の中には、今回の決闘の裏側を知っている者もあり、レレーナ・ヴィ・ブリタニア殿下の命とマリール・メル・ブリタニア殿下の命が天秤に掛けられている状態でどちらの皇族が死ぬ事になるのかを見ている者も存在した。

もう直ぐ僕とオイアグロの決闘が始まる。既に僕もオイアグロも競技場中央に向かい合って闘い合図が出るのを待っている。

オイアグロは、二本の剣を帯剣し目を閉じ集中している様だ。オイアグロの心中は、穏やかではないだろう。なにせどちらが勝っても皇族が死ぬという結果に変わりない。テロリストからしてみれば何方

でも良いのだ。それはオイアグロも分かっている、既に彼は負けているのだ。だからこそこれ以上負ける訳にはいかないのだろう。

一応僕の予定通り。これで少しはお灸を据えられたらう。後はこの決闘で勝ってオルフェウスとジヴオン家当主の座を手に入れて宴は終わる。

でも大丈夫だよオイアグロ。君は最後、僕に感謝する事になるんだから。

僕とオイアグロが、向かい合いその中間地点に審判役の男が立つ。

「これより、決闘の儀」を始めろ！両者前へ！」

その声と同時に僕とオイアグロが中央へ近寄る。

「両者！正々堂々一本勝負！始め!!!」

審判の宣言と同時に僕は、The Almighty『ザ・スピード』を使用してオイアグロに高速で近付き剣を振り下ろす。それをオイアグロは、二本の剣を顔の前でクロスさせ受け止める。一太刀で決められるとは思っていなかったが、あっさりと受け止められるとは思わなかった。ちよつと悔しい…。

オイアグロは、僕の剣を受け止めた後に右手の剣を横一文字に振るう。それを僕は、罅迫り合いの勢いで反動をつけて後ろに下がる。僕が飛び下がり地面に足が着いたと同時に、オイアグロが左手の剣で僕に斬りかかって来る。それを両手で持った剣で受け止める。

大人と子供の体格差があり、どうしても僕が飛び下がる距離よりもオイアグロの踏み込んで来る距離の方が長く逃げきれない。そして力でも大人と子供の差が出て来る。しかしそれを覆す力を僕は、持っている。オイアグロが斬りかかって来た際に『ザ・パワー』を用いて受け止め押し返す。その後オイアグロが後ろに下がったと同時に今度は、初撃を上回る速度で僕がオイアグロに斬りかかる。何度も何度も角度を変えて打ち込む。但し打ち込む剣の位置は、必ず同じ場所だ。

僕が、攻勢に出てオイアグロが防戦一方になる。

それでもオイアグロも一流の騎士。防戦になりながらも的確にカウンターを行なつてきて、あと一步踏み込ませてくれない。

その事は、さすがと言う他ない。

ギアスを用いて自身のスピードとパワーを上げて、更に未来線を読む。これほどドーピングを用いてもオイアグロを押し切れないのだから、この世界の騎士という生き物は怪物だとつくづく思う。

「くっ」

僕の剣がオイアグロの頬を少し掠める。

今のは少し入ったと思った。

オイアグロは、少し距離を取る為にバックステップで後ろに下がる。

「これ程の実力とは…」

お互いに打ち合いの中で相手の力量を把握し、これからの戦い方を思考する。オイアグロは、僕の力量に驚いている様子だ。そして此方を油断なく見据えてくる。恐らく僕がギアスを使用している事に、薄々気がついているのではないかな。

「やっぱり強いね」

「恐れ入ります」

オイアグロは強い。これは認めざるを得ない。

だけど僕は、ここで勝たなければいけない。オルフェウスとエウリアの為に僕が目指す理想郷を作る為に。

腕の立つ相手には、精神面での攻撃が有効だと誰かが言ってたから試すしかないね。

「これだけ剣が立つんだから、さぞ姉の存在は不愉快だったんじゃないかい？」

「…そんな事は、ありません。私は、姉の事を尊敬しておりました」

「なのにその尊敬していた姉を君は、殺した」

オイアグロの姉オリヴィア・ジヴォン。

オルフェウスとオルドリンの生みの母親であり、その実力はナイトオブラウンズに勝らずとも劣らないと評される程であった。

そんな彼女が死ぬ事になったのは、ある事件が切っ掛けであった。

「あの爆弾テロ事件が起きたせいで、君の姉は心を壊す事になった」「っ!？」

フローラ・メル・ブリタニア。

マリーベル・メル・ブリタニアの母であり、数年前に爆弾テロによって命を絶たれたブリタニアの皇妃の一人だ。

この事件は、爆弾を持った子供を一人の少女が離宮内に招き入れた事によって起きたとされており、その招き入れた少女がオリヴィアの娘オールドリン・ジヴオンだとされたのだ。故に特務局は、プルートの隊長であり母であるオリヴィアに娘オールドリンを殺害するように命じたのだ。しかしオリヴィアは、真相を知っていた。いや真相というには、余りにも小さい事だろう。

特務局の報告書では、爆弾を所持した子供を離宮内に招き入れたのはオールドリンとされていたが、実際にはマリーベルであり皇女の過失によって引き起こされたのだ。事実を隠す為にシャルルは、マリーベルの役を別の人間にさせるように命じたのだ。

「守るべき皇族の為に、娘を生贄に捧げるように命じられた君の姉は娘を殺すことが出来ず、使命と情の間で翻弄され心を壊した」
「何を」

「君の姉もあんな死に方をする事になるとは、思ってもいなかっただろうね。家の伝統に則って息子を捨てたのに、その上娘までも…哀れなものだ」

「貴方に何が…!?!」

僕の剣が再びオイアグロを捉える。今度は、左腕を掠める。

オイアグロ。僕の全知全能The Almightyの中には、アニメ版マオの『心を読む』ギアスも含まれている。君の心は、手に取るようにわかる。

後悔、悲しみ、虚しさ、そして憤りが君の心を占めている。

「姉を助けたかったんだろう?」

「!?!」

「壊れていく姉が惨めで苦しそうで、何より変わり果てていく姉を見たくなかつたんだろう?」

「くっ」

「たとえばその後オールドリンに恨まれたとしても、二人を守りたかつたんだろう?」

オイアグロは、本当は優しい性格なのだろう。苦しんでいる姉を見ていられなかった。

僕には、出来ない事をした彼を僕は非難しないしむしろ賞賛するだろう。自分が後悔すると分かっているのに、姉と姪を助ける為に実行に移したのだ。それでも利用させて貰うよ。僕の勝利の為に――

「でも本当は、疎ましく思っていたのだろう。男であるが故に当主になれなかった。実力はあるのに――」

「っ!?!」

「だから殺したんだろう。君の独りよがりの為に、娘から最愛の母を奪った訳だ」

「このっ!?!」

オイアグロが集中を乱して右手に持っている剣を大振りして横一字に振るう。

「!?!」

僕は、それを左手で持った皇族用にデコレーションされたゴテゴテの鞘で受け止める。オイアグロの剣は、木の部分にめり込み金属の装飾品に当たって止まっていた。それに少し動揺を見せるオイアグロ。当然その隙を見逃す手は無い。

「隙だらけだよ」

「しまっ」

僕は、右手で持った剣を上段から振り下ろす。それをオイアグロは、左手で持った剣で受け止めようとする。しかし僕の剣は、オイアグロの剣を叩き折ってオイアグロの左肩から胴体を切り裂く。決闘が始まってから同じ場所ばかりに打撃を与え罅を入れて折れやすくしていたのだ。まあこんなうまく折れてくれるとは、思わなかったが…。

オイアグロは、斬られた箇所から血飛沫を上げて前のめりに倒れ込む。その目には、僅かな光しか宿っておらず、まるで何かに懺悔するかの様な瞳であった。

「咄嗟に半歩後ろに下がった様だね。もし下がってなかったら左肩か

ら下を切り落としてたのに…」

「うう」

「ごめんねジヴオン卿。僕は、勝つ為なら何だってする。…僕、君の姉の事は殆ど知らないんだ。だからごめんね」

「…」

「オルフェウスは、返して貰うよ。それじゃ」

そう言っ僕は、倒れ臥すオイアグロに背を向けて出入口へと向かう。

「しよ、勝者！レレーナ・ヴィ・ブリタニア殿下！…救急隊急げ！」

審判の声が会場に響き渡る。これにより僕とオイアグロの決闘の儀は、閉幕する。そして帝都での騒動も終わりを告げることになる。

決闘の翌日に司法省広域捜査局が、マリーベル・メル・ブリタニア皇女とオルドリン・ジヴオンを無事保護した事が伝えられる。また広域捜査局は、今回の皇族貴族襲撃事件の首謀者として警護騎士団（ガース）の団長である「アレクセイ・アーザル・アルハヌス」を指名手配した。

後日機情局からの情報提供を元に広域捜査局が、潜伏先を突き止めその場所へ踏み込んだ。しかし既にアレクセイは、毒を服用し死亡していた。

捜査の結果、自ら毒を服用したと思われ逃走の末に自殺したものと見られる。その為広域捜査局は、被疑者死亡の状態で送検する事となった。

これにより皇族貴族襲撃事件は終息し、後に『帝都狂乱』と人々に呼ばれる様になった。

第15話 狂乱の裏側とその後

皇歴2014年 神聖ブリタニア帝国 帝都ペンドラゴン

オルフェウスがオイアグロに拉致されてからレレーナは、すぐに行動を開始した。

まず始めにレレーナは、機情局へ赴き機情局長官と副長官、副長官補にギアスを掛ける。その後長官の朝礼で幹部達にもギアスを掛ける。さらにその後幹部達がそれぞれの部署で行う報告会などで職員達にギアスを掛けていった。

そしてその後にビスマルクに抗議に行く。そしてそこで、ビスマルクに斬りかかった。これは、この後レレーナが計画した帝都狂乱に伴い自身のアリバイ作りが必要であったからである。

帝都での狂乱が、レレーナの起こした事であると分からない様にする事が目的であり、その為に公的組織に見張られる事が最も効果的であるとレレーナは考えたのだ。そうすれば、多くの帝国貴族、軍人、臣民は、レレーナが関係なく別のテロリストによるものだと考えるだろう。レレーナは、オルフェウスを取り戻してもその後の生活に影響が出るのを極力避けたかった。なるべく平穏無事に生活したいレレーナは、敵を増やしたくなかった。

元々敵は多いが、テロを起こしたとなると軍人や臣民からも攻撃される事になり生活しずらくなる恐れがあったからだ。

その後アリエスの離宮で謹慎する事になったレレーナは、機情局の職員をマリアンヌのギアス『ザ・ソウル』を用いて体に乗っ取り、次の暗躍を始める。

反ヴィ家と言われる大貴族や企業の役人たちの不正の現状証拠をアレクセイ達に送り襲撃させる。そしてレレーナ自身の諜報活動の邪魔をしていた貴族等に関して機情局を使って摘発し、抵抗すれば射殺も辞さなかった。

こう言ったレレーナによる復讐こそが、今回帝都で起きている動乱の正体である。この事を知っているのは察している者も含めて、ほんの僅かであった。

謁見の間での一件の夜。既に時刻は22:00を回っていた。

今レレーナは、帝都ペンドラゴンでも有数の高級ホテルのスイートルームに居る。一緒に居るのは、帝国一の美女でもなければ帝国一の女優でもない。そもそも男である。

騎士として凜とした姿勢で油断無く椅子に座る姿は、さながら名門貴族の当主の様な威厳があった。彼は、帝都での要人警護を専門に行う警護騎士団の団長アレクセイ・アーザル・アルハヌスである。

レレーナは、アレクセイに全知全能The Almightyの能力でギアスを貸す事に成功した。

正確には、レレーナが目を合わせた相手にレレーナが指定したギアス能力を一時的に貸す能力を作ったのだ。当然デメリットもある。貸している最中レレーナは、常時ギアスを発動している状態になる。その上そのギアス能力を貸している間、その能力をレレーナが使う事は出来ない。更にレレーナのギアスは、一度に二つまでしかギアス能力を発動できないので、貸している最中レレーナは一つしかギアス能力を発動できないのだ。V.V.やC.C.の様なコードユーザーとのギアスの契約には、劣るが指定したギアス能力を他人が扱える様になるのは、忙しい時に戦力を瞬時に増強したい時には便利な能力だ。

今回アレクセイには、レレーナから『記憶改竄』のギアス能力を貸出されている。そのギアスを使いアレクセイは、今回の襲撃事件を起こしているのだ。そもそも警護騎士団とは、要人警護をする組織なだけあり帝国皇族に対して非常に忠誠心が高いのだ。アレクセイが異常なだけである。そんな彼らを利用しようと思うと正攻法では、無理だ。そこでアレクセイは、記憶改竄の力を使い彼らを主義者に変えた。そうすれば後は、簡単である。そのまま襲撃事件を起すのみだ。そしてレレーナとアレクセイは、共闘関係にある。

「予定通りオイアグロは、僕に決闘の儀を挑んで来た。そしてそれは、承諾された」

「おめでとう御座います殿下」

「いや、君のお陰だよ」

赤いカーペットの上に黒い三人掛けのソファアークがコの字に置かれ、その内の手前側にレレーナが座り対面にアレクセイが座っている。二人の間には、優雅な時間が流れていた。二人は、ティーカップを手を持って紅茶を楽しみ、先にレレーナがカップに口をつけ紅茶を飲む。それをアレクセイは、目を細めて見ている。

「後は僕がするから、君はもう手を引いていいよ」

レレーナがそう言うのとアレクセイは、静かに首を横に振る。

「うん？」

「残念ながら殿下は、今日この場にて主義者と反ヴィ家の人間に毒を盛られお亡くなりになるのですから」

「何をいつ、ぐああー」

アレクセイの言葉に聞き返そうとしたレレーナだが、突然喉を抑えながら呻き声を上げる。そしてソファアークの上で腕き苦しむ。そんなレレーナを見ながらアレクセイは、口を開く。

「申し訳ありませんレレーナ殿下。しかし殿下が悪いんですよ、殿下が皇帝の息子だから」

アレクセイの言葉を聴ききる前にレレーナは、動かなくなる。目は虚ろで何も写していない。そんなレレーナを見てアレクセイは、自身の紅茶を飲み干した。そして椅子から立ち上がり窓へと近づく。そして其処から見える帝都の夜景を一望した。

「これでレレーナ殿下が決闘の儀でジヴオン卿に殺される事は、無くなった。約束通りマリーベルとオルドリッも始末出来る、悪く思わないで下さいレレーナ殿下」

窓に反射しているアレクセイの顔は、歓喜と狂気に染まり左目には赤いギアスの紋章が浮かび上がっていた。

「この異能の力があれば、たとえ相手が、皇帝であろうとシュナイゼルであろうと敵ではない。私達の理想のブリタニアを作る事ができる

！」

アレクセイは、初めレレーナに協力して帝国に仇なす貴族達を排除する事を目指していた。しかしレレーナから異能の力ギアスを貸され、部下や他人の記憶を改竄し続けてきた結果、彼の心は大きく歪んでしまったのだ。アレクセイは、次第に他人を信用出来なくなっていく、等々この力を自身に与えたレレーナが別の人間にも異能の力を与える可能性を考え、レレーナも排除する事にしたのだ。しかし――

「その理想を、君が見る事はないよ」

「!?」

アレクセイは、突如背後から掛けられた言葉に驚愕する。それは、先程アレクセイ自身が毒殺したレレーナのモノであった。確認する為に振り向こうとした時、体の中に違和感を感じた、その後、凄まじい痛みがアレクセイを襲う。体の中が焼けるような、グチャグチャにされるような痛みを感じ、アレクセイはそのまま体の力が抜ける様に倒れる。

倒れ様に後ろを見たアレクセイは、再び驚愕する。そこに居たのは、間違いなく先程毒殺したレレーナであったからだ。

「な……ぜ……」

「何故？自分が苦しんでいる事がかい？それとも僕が生きている事がかい？」

「……」

「君が苦しいのは、君が毒入り紅茶を飲んだから。僕が生きているのは、死んでいないからだよ」

「毒……を……のん……だは……ず」

「毒？何の事だい？僕は、ここに來てから何も口に……して……いないよ？」

アレクセイには意味が分からなかった。先程レレーナは、間違いなく毒入り紅茶を飲んでた。そして腕き苦しみながら絶命した筈だった。

「そもそも僕は、君が毒を入れるのを見ていたからね。飲む訳ないじゃん」

「馬鹿な、確か…に、死んだ…はず…」

アレクセイは、そう言って先程レレーナが座っていた席を見る。しかしそこには、何も無かった。レレーナの遺体はおろか、レレーナが腕き苦しんだ際に出来た染みや皺すら其処には存在しなかった。

「な…に…」

「君が見た死体というのは、これの事かい？」

レレーナがそう言ってアレクセイに右手を出す。その右手には、先程まで何も無かった。にも関わらず、いつの間にかグツタリとしピクリとも動かない虚ろな目をしたレレーナ自身が存在した。

「!?」

「可笑しなものだ。君にギアス^{異能}を、貸してあげたのは誰だった？如何して記憶改竄^{異能}以外のギアス^{異能}がある事を考慮しない？…いや考慮した結果が暗殺だったのかな？」

「…」

「見せてあげよう。これが『完 全 催 眠』だ」
The Complete hypnosis

そう言うレレーナが右手で持っていたグツタリとしてピクリとも動かない死んだ筈のレレーナが、まるでガラス細工の様に砕け散った。すると中から先ほど無かった剣が現れ、床に突き刺さる。

「なん…だと…」

「有する力は、完全催眠。この力は、目を合わせた相手の五感を支配し、以降僕が能力を発動する度に何度でも相手を支配する事ができる」

「!?」

「この力を持つてすれば、沼地を花畑に見せる事も蝶を龍に見せる事も出来る。君は、僕の支配下に居たんだよ」

「あり…え…ない。私…は、一度も…目を…合わせて…い…ない」

アレクセイは、レレーナから異能の力を貸されて以降一度もレレーナと目を合わせていない。それは、記憶改竄の力が完全催眠と同様相手の目を見る事が条件だからだ。レレーナが意識的に目を合わせない様にしており、アレクセイ自身もそれを理解していたからこそ今まで一度も合わせてこなかった。にも関わらず目を合わせる事で発動

するギアス異能の支配下にいるとは、どう言う事なのだ。アレクセイは思った。そんなアレクセイの心情を計ったかのように、レレーナは口を開く。

「逆に聞かすが、僕が最初に君に力を貸してあげた際に、僕と目を合わせただらう?」

「!?」

アレクセイは、今日何度目かも分からぬ驚愕をする。そして全てを察してしまう。

「私を…信用…して…いなかった…のか」

「そうだね。用心は必要だろう?それに、僕は君にダスコ・ラ・クレルモンを始末する様に言った。だが君はカリーヌ諸共殺そうとした。皇族に手を出せば事態がややこしくなると言ったのに…僕が用意したカリーヌの執事を記憶改竄で自爆させるなんて酷いねえ」

レレーナは、アレクセイに皇族へ手を出すのを控えるように言っていた。皇族へ手を出すと、後の計画であるマリーベル誘拐の障害になる可能性があったと言う事と、皇族保護の名目で否応無しに帝国は全力で対応する事になるからだ。つまり今後の計画に支障をきたす可能性が高く悪手だと判断したからである。

「それに、さっき言っただらう?」君が僕の紅茶に毒を入れるのを見ていた」って。君が裏切る事など初めから知っていたよ」

「!?」

レレーナは、『全知全能《The Almighty》』の中でレレーナが最も多用する”未来を見て改変する力”を使い、アレクセイに力を渡した後に彼がどうするのかを見ていたのだ。故に彼が自分を殺そうとする事など、初めから知っていたのである。それでもレレーナは、彼を利用した。切り捨てても心が痛まない駒として。

一応皇族には、手を出すなど言ってみたが、結局未来は変わらなかった。で此処で切り捨てる事が決まったのだ。

「覚えておくと良い。目に見える裏切りなどたかが知れている、本当に恐ろしいのは目に見えぬ裏切りだよアレクセイ君」

「…」

「それに借りた物は、返すのが道理だよ」

レレーナのその言葉を聞いたのを最後に、アレクセイは絶命する。そんなアレクセイを見てレレーナは、何とも無いように携帯を出し別の部屋に待機していた機情局の人間を呼び出す。

「あとは任せるよ、カルタゴ」

「イエス・ユア・ハynes」

レレーナは、カルタゴと呼ばれた男に後の事を任せて部屋を出る。そして明日執り行われる決闘の儀に備えてアリエスの離宮へ戻って行ったのだった。

皇歴2014年 帝都ペンドラゴン アリエスの離宮

レレーナとオイアグロの決闘が終わった当日の夜。オルフェウスが、機情局の職員に付き添われてアリエスの離宮へ帰ってきた。

「心配を掛けたな、二人とも」

「オルフェウス〜!」

「オルフェウス!」

オルフェウスがアリエスの離宮へ帰って来ると、玄関でレレーナとエウリアがオルフェウスに抱き着く。二人同時に抱きつかれて、オルフェウスは支え切れずに後ろに倒れ込んでしまう。しかし、そんな事御構い無しにしがみ続けるレレーナとエウリア。目に涙を溜めてオルフェウスに抱き着くエウリアと、涙をボロボロと流しながらしがみ付くレレーナ。

そんな二人を見て、いかに二人に心配を掛けたかを感じるオルフェウス。そしてオルフェウスは、二人の頭を仕方ないなと言う様な顔で優しく撫でる。その光景は、まさしく家族の様であった。

二人に散々泣かれたオルフェウスは、二人と共にリビングへ向かう。そして久し振りにエウリアの料理を、3人で和気藹々と話しながら食べる。その後、レレーナと一緒に風呂に入りレレーナの頭を洗ってやる。お風呂を上がったからは、寝室で所謂川の字で寝る。既

にレレーナが真ん中で眠りに付いている状態で、左右を挟むオルフェウスとエウリアは今回の件について話をしていた。

「今回、レナ凄く頑張ったのよ」

「みたいだな。帝都では随分と暴れた様だし、決闘の儀ではオイアグロ相手に殺し合いを演じる事になった様だしな」

オルフェウスは、ジヴオン家に連れて行かれて直ぐにオイアグロを殺そうとするも及ばず、結果ジヴオン邸で軟禁状態となってしまったのだ。オイアグロの実力を体験したオルフェウスにとつて、レレーナがオイアグロと決闘をすると言うのは心配で仕方なかった。そして無事にレレーナが勝った事に安堵していた。

「無理させたな…守るって言ったのに」

オルフェウスは、眠っているレレーナの寝顔を見ながらそう口にする。

「また助けて貰っちゃった」

「エウリアも心配かけたな」

「私は、何も出来なかつたわ」

今回エウリアは、オルフェウスを連れ戻す為に何かをしようとするも何も出来なかつた。本来であればそれは、可笑しな事ではない。しかしレレーナが行動しているにも関わらず、自身は何もしていない事に悔しさと苛立ちを感じざるを得なかつた。

「普通はそうだ。レナが凄いんだよ、だから自分を僻むなエウリア」
「でも」

「俺も本当は、レナを守る側なんだ。なのにまた助けられた。嚮団から助けられ、居場所を与えられたのに」

「オルフェウスは、騎士として立とうとしているわ！それにレナと一緒にE・U・で諜報活動をしているじゃない！」

オルフェウスもエウリアもレレーナに大きな恩を感じている。だからこそ二人ともレレーナの為に何かをしたいと思っっているのだが、なかなかレレーナのいる場所は難しい場所で、役に立つのも難しいと二人は思っていた。今回の一件でも自分達の力不足を感じざるを得ず、どうすればいいのかと自問自答をするオルフェウスとエウリア。

「エウリア。少なくとも俺は、君がいる事に支えられている。だからこれから二人で出来る事を増やして行こう」

「…そうね、何時迄もウジウジしてられないものね。私も頑張るわ！オルフェウス！」

「ああ、頑張ろう」

「む…む…」

オルフェウスとエウリアが、レレーナを挟んで今後頑張ろうと意気込んでいると眠っているレレーナが寝言を漏らす。それを見てオルフェウスとエウリアは、顔を見合わせて笑みを浮かべる。

今日、アリエスの離宮には久し振りの団欒があった――

帝都ペンドラゴン 宰相府 宰相執務室

神聖ブリタニア帝国の若き宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアが仕事をしている場所が、帝都ペンドラゴン皇宮にある宰相府である。この場所でブリタニア帝国の重大政策等が思案されて、帝国全土で法律等が反映される事になっている。この場所こそが帝国の中枢と言っても過言はない。

帝都狂乱の主犯とされるアレクセイが自殺した事が判明した当日の夜、宰相執務室で二人の男が内密の話し合いをしていた。

一人は、宰相執務室の主。フワリとした金髪で淡い紫色の瞳を持つ帝国第2皇子シュナイゼルである。

もう一人は、シュナイゼルの最側近の軍人でありブリタニアの伯爵位を持つ貴族でもある、明るめの茶髪に水色の瞳を持ついろんな意味で中性的なカノン・マルディーニである。

「シュナイゼル殿下。今回の帝都狂乱に関する報告書です」

そう言ってカノンがシュナイゼルに、昨日終結した帝都狂乱に関する報告書を机の上に提出した。それを手に取りシュナイゼルは、報告書を読んでいく。そして数分で報告書を読み終わった後に、報告書を

机の上に戻す。

「ふむ、やはり妙だね」

「はい、機情局の動きに不審な所が多々見られます」

「うん、それにレレーナの動きにも妙な所があるね」

「レレーナ殿下ですか？」

「ああ」

カノンのレレーナへの印象は、まさしく悲劇の皇子と言った所だ。

数年前に起きたアリエスの悲劇で母マリアンヌを失い、自身は意識不明で2、3年程病院のベットの住人となっていた。その間に同母兄妹達は、皇帝の勘気に触れ戦争直前の日本へ人質同然に送られた。そして戦争が起きて、二人の皇族は死亡した事となる。実際には遺体は見つかっていないので推定でしかないが、当時10代前半の子供二人まして妹は目と足を不自由にしておりとても戦時を生きて行けるとは思えない。故に死亡したものとしてブリタニアでは扱われている。レレーナが目を覚ました時には、レレーナは独りぼっちになっていたのだ。

「レレーナの噂は知っているかい？」

「噂ですか？」

ここ最近ブリタニア帝国では、アリエスの悲劇はマリアンヌ皇妃ではなくレレーナ殿下が狙われたのだと噂するものが居るのだ。その為皇帝は、レレーナを隠しテロリストたちから守っていたのだとされているのだと言う者も存在する。だからこそ入院中のレレーナは、面会謝絶だったのだと。

その証拠にレレーナが意識を取り戻した時に、レレーナの側には正体不明の子供が二人存在していた。意識不明で動けなかった筈なのに一体何処で二人の子供と知り合ったのか？実は、この二人の子供は皇帝直属の配下で、レレーナの守り役だったのではないかと、だから子供を無理矢理連れて行ったジヴォン家とド・ブリタニア家に対する仕置きを今回行なわれたのではないかと言われている。帝都狂乱は、皇帝の勘気に触れた貴族達に対する粛清であったのだと噂されているのだ。

シュナイゼルにとってこの噂は、気になるものであった。あの俗世にこれっぽっちも興味を持たない自身の父であり、皇帝であるシャルルが一人の息子の為に今回の様な粛清を行うだろうかと疑問に思ったのである。

実際シャルルは何もしていない。しかし噂とは本当に無責任なもので、それが事実であるかは関係ないのだ。

だからこそシュナイゼルには、見極める必要があった。

「彼の事をもう少し調査してくれるかい？」

「分かりました。では幻影の毒に調査を命じます」
フアントム・ヴェノム

「ああ」

帝都ペンドラゴン ブリタニア皇宮 玉座の間

ブリタニア皇帝が執務を行うブリタニア皇宮の中心部。

シュナイゼルがカノンと密談をしているのと時を同じくして玉座の間で、皇帝シャルルとその騎士ビスマルクが二人で話していた。

「オルフェウスは、レレーナ殿下の下に帰ったようです」

「そうか」

ビスマルクは、シャルルにオルフェウスが帰った事を報告する。

「しかし今回は、久々に肝が冷えたわ」

「私が思慮が足りなかったばかりに、申し訳ありません」

「よい。現状あれの事を最も理解しているであろう兄さんですら手に負えんのだ」

「はっ」

「しかし何もしない訳には行くまい」

「監視を付けますか」

「うむ」

「しかし普通の者では、監視にはならないのでは？」

「適任者がおる」

ビスマルクからしてみれば、ナイトオブブラウンスですら力不足だろ

うと思えるレレーナの監視任務。それを行える適任者とは、一体誰なのか皆目見当も付かなかった。

「入れ」

シャルルがそう言うと、玉座の間の大扉が開き一人の少女が現れる。その少女を見て目を見開いて驚愕の表情を浮かべるビスマルク。

玉座の間に入ってきた少女は、妖艶な表情を浮かべてシャルル達の下に歩いてくる。

「レレーナの監視は任せるぞ、マリアンヌ」

「ええ、あの子の事は私がしっかり見ておくから安心して頂戴。ふふふ」

第16話 はじめてのお使い in アゼルバイジャンー前編

皇歴2015年、神聖ブリタニア帝国はアゼルバイジャン共和国に宣戦布告した。

ブリタニア帝国のアゼルバイジャン侵攻軍の指揮は、帝国第17皇子レレーナ・ヴィ・ブリタニアが行うこととなった。

レレーナ率いる侵攻軍は凡そ7万人規模で、直参将軍に立候補したラチエツト将軍、シユナイゼル宰相より派遣されたアルベルト・ボツシ辺境伯率いるアルガトロ混成騎士団、エリアー1より押し掛けてきたジェレミア・ゴツトバルド辺境伯、本国からキングズレイ・ウォーレントン辺境伯、オットー・ブリュガー伯爵などが配属となっている。主力はラチエツトが所属していたブリタニア中央戦域軍第4師団であるが、海軍のインド洋艦隊もこれを支援する事になっている。

対するアゼルバイジャン共和国軍は陸海空軍及び大統領親衛隊で構成されており、国防省のアゼルバイジャン共和国軍参謀本部の指揮下に置かれている。又準軍事組織として内務省の国内軍と呼ばれる国内での軍事作戦や重要施設の防衛、治安維持活動を主任務とする警察権を有する軍事組織と国境警備庁国境軍、沿岸警備隊、国家保安省特殊部隊などが存在する。

アゼルバイジャンでは徴兵制が導入されている為、常時12万の兵力を有し戦時においては60万人を動員することも出来る。

戦争において数は非常に重要である。しかしアゼルバイジャンが60万の兵を導入してもブリタニアの7万の侵攻軍を相手取るには些か力不足である。ブリタニア軍は兵士も兵器も良質で、アゼルバイジャンにとっては7万ですら非常に脅威であった。また幾ら60万人が動員できるからと言って直ちに60万人全てを動員できる訳ではない。60万人を支える兵站が必要なのだ。当然その様な巨大な兵站をすぐに用意出来る筈もなくその為アゼルバイジャンは、宣戦布告を受け次第E・U・へ『対ブリタニア戦線防衛協定』に基づき増援

を要請した。そしてE・U・は、トルコ州に配備されている第105軍団第112連隊を派遣する事を議会にて決定した。さらにアジアの雄こと中華連邦が、内密に義勇軍を派遣する事をアゼルバイジャン政府に到達した。これによりブリタニア帝国対E・U・中華連邦の図が形成された。

またアゼルバイジャン共和国政府は、戦士の国と呼ばれる中東のジルクスタン王国に傭兵派遣を要請していた。

皇歴2015年 アゼルバイジャン 首都バクー 大統領府地下司令部

アゼルバイジャン大統領府は、首都バクーにあるアゼルバイジャン国立美術館前のイステイックラリヤット・ストリートを挟んだ反対側にある赤茶色の花崗岩の外壁部分の上に白色の大理石の外壁をもつ12階建の建築物であり、九年ほどの年月掛けて建造された物である。その大統領府には、戦時体制用の地下司令部が存在する。

大統領府地下司令部は、戦時において大統領と副大統領、首相、内務大臣、財務大臣、国防大臣、参謀総長（大将）などが詰めて戦争指揮を撮る場所である。現在旧イラン領アルダビールに集結していたブリタニア帝国のアゼルバイジャン侵攻軍が、国境を越えてアゼルバイジャンへ侵攻を開始した事を受けて政府は戦時体制へ移行し大統領達が地下司令部に詰める事となった。

そして今、地下司令部は緊張に包まれていた。

「国境軍が壊滅！第1防衛ラインを突破されました！」

「現在、陸軍第2第3軍団がアグジャバデイ及びキュルダミルに防衛線を構築してブリタニア軍と交戦中！」

「キュルダミルの空軍第416戦闘爆撃機隊壊滅！」

「第5軍団との音信途絶！」

「防空司令部より入電！カスピ海上空を高速で移動する機影あり！数12！ブリタニアの爆撃機です！！」

「攻撃予測地点は!？」

「このまま進行すれば首都バクー上空に入ります!」

「防空軍がミサイル迎撃を行います!」

「ミサイル6発が命中! 6機の爆撃機がバクー上空に侵入しました
!!!」

「!？」

「何だ!？」

突如地下司令部に大きな振動が伝わる。司令部の要員が原因を調査すると、先ほど防空軍の対空ミサイルを掻い潜ったブリタニアの爆撃機による空爆の振動である事が判明する。空軍のエアカバーが消失した状態では、ブリタニアの攻撃を防ぎ切れなかったのだ。そしてこの空爆によりアゼルバイジャン軍の参謀本部がある国防省が半壊し、多くの犠牲を出す事となった。

司令部内の喧騒は凄まじく、ブリタニアと戦っている現場の状況がリアルタイムで送られて来る。

しかし送られて来る状況は決して良いものとは言えず、アゼルバイジャン共和国軍の防衛戦が瓦解寸前である事を示していた。飛び地になっているナヒチェヴァンを防衛していた陸軍の第5軍団は音信途絶、第2第3軍団は防衛線を下げて戦闘を継続するもエアカバーを担当する空軍第416戦闘爆撃機隊が壊滅しブリタニア軍の空爆に晒されている。また首都バクーに設置されている国防省がミサイル攻撃を受け参謀本部共々機能不全に陥っていた。

「大統領。このままでは…」

既にアゼルバイジャン共和国軍の防衛線は崩壊寸前であったが、それでも持ち堪えていたのは中華連邦より派遣されている義勇兵とジルクスタン王国からの傭兵が奮戦していたからだ。

しかしその奮戦も長くは続かない。

ブリタニア軍が旧イラン領アルダビール、パールハザード、ダブリーズからアゼルバイジャンへ侵攻している時、侵攻軍司令官のレレーナはアゼルバイジャンの首都バクーにあるイズミア・ストリート沿いにある5つ星ホテルのスイートルームに滞在していた。

そこでレレーナとオルフェウス、エウリアの三人は、ホテルの中庭が見える一階窓側の席でそれぞれ朝食を摂っていた。レレーナはサンドイツチにココア、オルフェウスはフレンチトーストに紅茶、エウリアはフレンチトーストにサラダ、紅茶を食していた。

そんな最中に突如轟音が辺り一帯に響き渡る。

「今のは…」

「空対地ミサイルが国防省を破壊した音だろう」

「凄く大きな音だったわねえ」

「となると作戦も第2段階へ移行するタイミングだね」

レレーナは、朝食を食しながら今さっき発生した衝撃と轟音が何かを、一緒に朝食をしていたオルフェウス達に確認しながら現在の侵攻作戦の推移を予測する。

「そうだな」

「ならそろそろ部屋に戻ろうか」

「そうね」

レレーナの推測が概ね正しいことを認識しているオルフェウスが部屋に戻ることを提案し、オルフェウスとエウリアがそれに同意して席を立つ。そんな二人の動きを見てレレーナもココアを一気に飲み干して二人の後を追う様に席を立ち部屋へと戻っていく。そんな3人の様子を見るものは、誰もいない。このホテルには、今一般の宿泊客は存在しない。

戦時中であるからと言うわけではない。ホテルそのものがレレーナ達ブリタニア側に接収されている状態なのだ。

勿論本来であればアゼルバイジャン当局も異変に気付き様子を見に来る処だが、現在はブリタニアとの戦争中であり又ホテル側も既にギアスに寄って抑えられている状態では、誰もホテルの異常に気づく事が出来ない状態になっているのだ。その為現在ホテルは、レレーナ

達の貸し切り状態となっている。

そんなホテルの中を我が物顔で悠々と歩いて移動してレレーナ達は、自身が宿泊している最上階スイートルームへと足を運ぶ。

スイートルームのリビングには壁に埋め込まれた大きなスクリーンがあり、スクリーンの前にはL字ソファアが設置されている。ソファアとスクリーンの間には、ローテーブルがあり卓上にココアの入ったコップが置かれている。

スクリーンの両側には、長テーブルが置かれており、それぞれ2台ずつパソコン^Pが設置されている。そしてそのPCを扱う機密情報局員が並んで座っていた。彼らの背後には、彼らと同じ色の局員制服に身を包みギャリソン・キャップを被った中年の男“カルタゴ”が立っていた。

又部屋の隅には、碧瞳に金色の髪を右側から左に流したオールバツクの白人系少年と茶色の瞳に黒い髪をセンターで分け、後ろ髪は肩を少し超えるくらいまで伸ばしている黒人系少年が立っている状態を待たされていた。二人は、帝国宰相第2皇子シユナイゼルの推薦でレレーナの従卒として配属となった“シユネー・ヘクセン”と“レド・オフエン”である。

レレーナ達が入ると部屋に居た全員がレレーナ達の方を向き最敬礼をする。それにレレーナが答礼するとモニター付きの局員達はモニターに向き直り、カルタゴはレレーナをソファアまで誘導し大型スクリーンを交えながら侵攻作戦の推移を報告する。

「作戦の状況は？」

「現状では第2段階を行なっている最中です。ナヒチエヴァン自治区は、ラチエツト將軍率いる第1部隊によって完全に沈黙。アルガトロ混成騎士団を中核とした第2部隊は、敵の第2防衛線を攻略中です。ジエレミア卿率いる第3部隊は、既に湖岸沿いのアリアートを攻略して此処バクーを目指して侵攻中です」

「うん。大凡予定通りだね」

「はい、国防省と参謀本部はノシャール空軍基地からの新型地中貫ミサイルによって壊滅。参謀本部に居た国防相は、局員が偽装した救急隊

員達によつて既に捕縛致しました」

「宜しい。この戦争も直に終わるね」

「しかし凄まじい戦果ですね、アーニヤ・アールストレイムと言う少女は。たった一人で敵軍の3分の1を屠つたのですから」

「本当にね。さすがマリアンヌだ」

アーニヤは今作戦においてラチエツト將軍率いる第1部隊に配属される事となり、ナヒチエヴァン自治区への侵攻作戦に参加していた。当初周囲はアーニヤを最前線で闘わす事に反対をしていたが、レレーナはアーニヤは皇帝陛下の推薦で参戦している事、実は相当な実力者であると陛下から聞かされていると答え最前線で闘わす事を変えなつた。勿論アーニヤ自身は、何の事だか分からず狼狽していた。レレーナ自身も実際まだ子供のアーニヤには可哀想だと思いつつも、精神に寄生して居るマリアンヌの力が有れば死ぬ事は無いだろうと考えていた。又もし仮に戦死したとしてもマリアンヌが依り代を失う事となり、自身の脅威が一つ減るだけであると思えば多少の良心の呵責はあれ予々問題はないと判断したのだ。

ただマリアンヌの事を知っているのは、レレーナとオルフェウス、エウリア、そして今回ギアス嚮団から引き取つたレレーナの影武者役の4人だけであり、それ以外の周囲の人間はレレーナが大変鬼畜に見えるドン引きしていた事をレレーナは知らない

——そんな事は知らないレレーナは、作戦状況を踏まえて第3段階へ移行する事を決める。

「では、作戦を第3段階へ移行させよう」

「イエス・ユアハイネス」

「国防相を此処へ」

レレーナの命令を受け入口のそばに控えていた機情局員が国防相を連れて来る為に部屋を一旦退出する。その姿を横目にレレーナは、第3段階について確認を行う。

アルファ ベータ
「 α と β は、私と共に大統領府へ向かう。カルタゴは、ガンマ デルタ γ と Δ を率いて議事堂を抑えろ」

「イエス・ユアハイネス」

「乙は、大統領府前に例のモノを運び込め。Hは、騒ぎに対応しようとする警察を抑えろ」

「了解」

レレーナの指示を受け全員が動き始める。そんな中先程国防相を呼びに行った局員達が戻って来る。彼らと共にいる少し焦げたスーツを身に纏っている煤で汚れた金髪中年の男が、このアゼルバイジャン共和国の国防責任者である国防相だろうとレレーナはあたりをつける。まさにその通りであり、国防相はレレーナの前で膝を床に付けて両肩を局員達に抑えられる態勢でレレーナの方を見上げる。

「くっ！離せ！私が共和国国防相と知っての狼藉か!？」

国防相は、横柄な態度をとりながら周囲を威嚇した。しかし彼の両肩はしっかりと抑えられているので周囲に対して毛筋程の畏怖も与えられていなかった。其れどころかレレーナは、詰まらなそうに真っ直ぐ国防相を見ていた。レレーナには直ぐに分かったコイツはクズだと。なら良心は痛まない。

「何だ貴様!?!子供か?・目障りだからどこかへ失せろ!」

紫色の瞳に真っ直ぐと見詰められ居心地悪そうな国防相は、語気を粗めてレレーナに叫ぶ。余りに見苦しいその姿に嫌悪しつつ、まだ年若いシユネーとレドを部屋から退出させる。これは、レレーナ也の彼らへの配慮でもある。国防相の姿を見せるのは、まだまだ子供の二人には精神衛生上余り宜しくないだろうと言う判断だ。そしてギアスを知らず、又ギアスの支配下に入っていない二人にこれから先の事を見せる訳にはいかないからだ。

「小僧！貴様もさっさと出て行け！」

シユネーとレドが部屋を退出した後も尚部屋にいるレレーナに対して国防相は苛立たた気に言う。しかし尚レレーナは、詰まらなそうな瞳で国防相を見続ける。そして最後には溜息を吐きながら独白する。「はあ。こんな男が一つの国家の国防の責任者とは…こんな男の命令で死地に送り込まれるのが何の罪もない無垢な民達とは、哀れな」

その独白は、国防相へは聞こえなかった。

「貴様！何を言っている!?!」

「君には、言っていないよ。目障りだ、早々に終わらせよう」

レレーナがそう言うのと国防相の両肩を掴んでいた局員達が、国防相の両目を見開かせレレーナの方へ顔を向かせる。

「なっ!?!何をする!?!」

狼狽える国防相は、必死に顔を逸らそうとしたり拘束を解こうとするが鍛えられた局員達の拘束を解く事は出来ず、真っ直ぐにレレーナの方へ向けさせられる。そして彼がレレーナを見た時、レレーナの両目はまるで血のように赤く光っており彼を一層恐怖させた。

「なん…何だそれは!?!」

「君の知る必要のない事だ。レレーナ・ヴィ・ブリタニアが命じる!我が奴隷となれ!」

レレーナのその言葉と共に国防相の瞳を赤へと染まる――

第18話 はじめてのお使い in アゼルバイジャンー後編

皇歴2015年 アゼルバイジャン 首都バクー

僕に乗っている黒塗りのワゴン車は、首都バクーのイステイツクラリヤット・ストリートを大統領府に向けて走っている。車両の前方には、黒塗りのセダンと赤と青のランプを屋根に付けた白塗りの車体に青い文字でY・P・Xが書かれているパトカーが先導している。後方には、黒塗りのワゴン車が走行している。

僕に乗っている車も前後の車も、警察の車両にもギアスを掛けて僕の支配下に置いている。唯一ギアスが掛かっていないのは、同じ車両に乗っているオルフェウスだけ。運転手も国防相もギアスの管理下だから何も話さない。お陰で車の中では僕とオルフェウスの二人だけが淡々と会話をしている。

「大統領府に着いたら予定通り地下司令部の制圧を第1目標として建物周囲はα隊、裏口はβ隊に処理させる。目標は15分以内が望ましい。15分が経った場合、無条件で乙隊は正面車寄せにトラックを入れて例のモノを準備してもらおう。15分以内で制圧出来た場合は、その時点でトラックを車寄せに運ばせる」

「了解。だがα隊だけで正面戦力は足りるのか？」

オルフェウスは、α隊の戦力で大統領府の正面戦力を排除できるのか疑問に思った様だ。実際α隊だけでは戦力不足だろう。大統領親衛隊と警察が警備についており、襲撃を受けた場合20分以内に軍の特殊部隊が救援に駆けつける仕組みになっているからだ。α隊は約20人の部隊で、大統領親衛隊と警察は合わせて100人前後居るだろう。軍の即応部隊も合わせれば150人は超えるだろう。しかし

「大丈夫だよ。その為の民兵だから」

「ホテルの客やスタッフだろ？役に立つのか？」

そう。流石に機情局の局員だけでは戦力が足りないので、その分を

補うものとして利用するのがホテルの客やスタッフ、周辺にいたアゼルバイジャン人たちである。彼らをギアスで支配下に置き即戦力として大統領府や議会、首都バクーの主要道路に配置しているのだ。

しかし当然ギアスで操っている素人などまともに戦えるはずも無い。そんな事は、百も承知。

「役に立たさせるさ。それが指揮官の役目だからね」

どんなに使えないカードも要は使い方次第だ。人数による圧迫、同時多発的に起きるテロ、肉壁、逃走経路の遮断など戦えなくとも活用できるやり方は存在する。

「さあ。さつきさとお使いを終わらせよう。僕は忙しいのにシユナイゼルにお使いを頼まれて機嫌が悪いんだ。体のいい様に利用しやがって」

「口が悪くなってるぞレナ。それから忙しいのは趣味に時間を掛けて書類仕事を後回しにしてるからだろう…」

おつといけない。王子様口調、王子様口調。こういう事は常日頃から気を付けていないと、ふとした瞬間に失敗してしまうかも知れないからね。気を付けなきゃ。

あとオルフェウス、趣味じゃ無いよ。新技術と新システム、新兵器の開発は趣味じゃ無いよ。開発は趣味じゃなくて仕事でしょ！仕事イコール趣味のワーカーホリックじゃ無いよ僕は！？仕事は仕事と割り切ってるよ？自分が生き残る為の創意工夫だよ？それは、軍の為になっているのだから立派な仕事でしょ！違うの！？

「新技術や新システム、新兵器の開発は、立派な国家への貢献でしょう？」

「確かに開発そのものは凄いんだがなあ」

オルフェウスが何か言いたそうな目で僕を見てくる。

黒のワゴン車の車列が大統領府の正面車寄せに到着し、ワゴン車に乗車していた国防相と護衛に扮したレレーナ達が下車する。それを

出迎えたのは、大統領府正面玄関の警備責任者である親衛隊員の中佐である。

「お待ちしておりました、国防相。お怪我は？」

「ああ、大丈夫だ。この勇氣ある少年達が助けてくれたからね」

中佐の氣遣いに、国防相は薄っすらと赤く染まった瞳をレレーナ達の方へと向ける。それにつられて中佐もレレーナとオルフェウスの方へ視線を向ける。

「オズ・ランペルージ准尉であります！」

「レナ・ランペルージ士官候補生であります！」

オルフェウスとレレーナはそれぞれ敬礼をし、中佐に嘘の自己紹介を行う。二人は兄弟の設定で、開戦によって動員された新人と学徒であると偽った。そして爆撃によって灰燼となった国防省参謀本部から国防相を救出した事にしたのである。

と言うのも流石に警備の厳しい大統領府に侵入するのは、ギアスを使っても難しい。どこに行っても人、人、カメラ。その上、大統領を含む要人達は地下司令部にいたので騒ぎを起こすと地下司令部に侵入するのに手間が掛かり、共和国の増援が来てしまう。増援が到着するまでの所要時間は15分であるから、それまでに制圧するには地下司令部を落とさなければならぬ。

となれば、まず地下司令部の鍵を内側から開けてもらう必要がある。そしてその際に一緒に中に入れる様になければならない。国防相と一緒にあれば入る事も容易だろう。

「そうですか、しかし規則ですので、大統領府に立ち入る際には身元照会を行わせて頂きます」

親衛隊の中佐が国防相にそう言うと、僕とオルフェウスの方を向いてそれでいいねと確認してくる。当然確認される事など予想済みである。

だから

「勿論です！」

僕がそう答えて自身の偽造した身分証を提示したその時、『ドン！』とけたたましい大きな音と強烈な光、熱風が正面玄関に居た僕達を襲

う。それは、僕の乗車していた車が爆発した時に出た音と光、衝撃だ。「あつっ!？」

爆発した車のすぐ側にいた僕は、爆発で発生した衝撃と熱風をもろに受ける事になった。

確かに「派手にしろ」とは言ったが、何も僕の側の車を爆破する事はないじゃないか。まさか僕の事を狙ってやった訳じゃないよね？ギアスで操っている筈なのに、まさかV・Vの部下でも紛れてるんじゃないだろうな？

「一体なんだ!？」

「シルヴァンシャー宮殿方向のあの建物の屋上からだ!」

「早く！大臣を中に避難させろ!」

ヒューという音と共にミサイルが再び車の車列に向かって来る。それが車に命中し、大きな音と衝撃波を放つ。

「だから！危ないって!？」

「大臣！こちらです!」

「撃て撃て！反撃しろ!!」

突然の強襲によって警備の者達は、混乱に陥ってしまう。僕の声は、警備の人間には聞こえていない様だ。よかった。

しかしそこは大統領府の警備を任せられた者達、直ぐに状況を分析して体制を立て直す。最優先に国防相の身の安全を確保する為に、国防相を大統領府内に避難させる。その際に、僕とオルフェウスも護衛の人間と共に奥へ進む。既に身分照会の事も忘れられ、そのまま奥へ地下司令部に繋がるエレベーター前に到着する。

エレベーターに乗るのは、国防相と僕、オルフェウス、共和国兵に扮した機情局員2名、大統領親衛隊員1名である。大統領親衛隊員の一人以外全員がブリタニア側の人間が乗っているエレベーターは、真つ直ぐと地下司令部に向かって降りていく。勿論、大統領親衛隊員の一人も局員二人に抑えられ僕のギアスの支配下に入りました。

エレベーターが地下司令部に着き、扉が開く。少し廊下を歩いた先には、アサルトライフルを携えた二人の護衛官が立っている。ただその二人以外に廊下に立っている者はいない様なので、素早くギアスを

掛ける。そして地下司令部の扉を開けてもらう。

「国防相が到着しました!」

「おお、ご無事でしたか!」

「ご無事で何よりです!」

「怪我の具合は大丈夫なのか!?!」

瓦礫の山と化した国防省より生還した国防相、地下司令部に詰めていた閣僚や職員からは拍手を以って迎え入れられた。拍手をしている者の中には、初老の白髪に薄水色の瞳、グレーのスーツを身に纏った男性も加わっていた。アゼルバイジャン共和国の大統領である、イリハエル・ハリエルだ。

「ご無事で何よりです、国防相」

「ご心配をお掛けしましたが、この通り健在でございます大統領」

「今は戦時下なので大変ですが、貴方の力も貸してくれ」

「勿論です大統領!戦争に勝つ為に微力ながら私も協力させて頂きませう!」

「おお!」

大統領は、ブリタニアからの侵攻に対してE・U・や中華連邦、ジルクスタン王国などからの助力を得て戦争に勝利するか、せめてブリタニアとの休戦協定を引き出す事を目指しているのだろう。そう言う意味で「力を貸してくれ」と言ったのだろうけど、国防相の方はあくまでブリタニアが戦争に勝利する為に僕へ協力すると言っているのだ。二人の会話は、ズレている。しかしそれに気付いていないのが大統領、貴方の負けた原因だよ。他者の協力などあったらいいねぐらいの物で、基本的には自分で出来る様にしておくべきなんだよ。

「さあ、さっさと終わらせよう」

「?何だね君は?」

体感時間の停止ギアス。アニメR2において登場したギアス嚮団からの刺客ロクの使用するギアス。結界型のギアスで、範囲内に含まれた人間の体感時間を停止させる強力な力だ。ただ使用中に使用者の心臓が止まってしまおうと言うリスクがあるが、これはギアスを発現する際に影響があると思われる体内のR因子の量が影響しているも

のと思われる。実際僕が使用する際には、心臓が止まると言うリスクは存在しなかった。まあ心臓の動きが、ゆっくりになるせいで疲労することに変わりないけど…。

このギアスの結界に地下司令部の人間を全員含めて、動きを制して警備の人間を全員射殺し武器を奪っておく。反撃されると危ないからね。そしてギアスを解除する。

「…っ!?!何だこれは!?!」

ギアスの解除を受けて動き出した大統領達は、目の前で一瞬にして現れた惨状を見て驚愕する。当然だろう。彼ら視点で見れば、一瞬にして司令部内にいた兵士達が胸から血を流しながら倒れ込んでいくのだ。仮にギアスの存在を知っていたとしても驚くだろう。そして同時に自身の身の危険を肌で感じるだろう。死神がその手に持つ大きな鎌で自らの命を刈り取ろうとしているのを感じ、それでも何も出来ずにただその時を待つしかない。絶望と恐怖に打ち震えながら最後の瞬間を。

でも僕は、優しいからそんな思いをさせないよ。君達には、何の恨みも憎しみも持っていないからね、一瞬で楽にしてあげよう。

「時間が惜しいから手早く済ませるよ。レレーナ・ヴィ・ブリタニアが命じる！君達は、我が奴隷となれ!!」

「あ…」

僕の絶対尊守のギアスで、ハリエル大統領を含む地下司令部の要員を支配下に置く。ここまでの所要時間は、12分29秒である。大統領府襲撃から凡そ20分で緊急時即応部隊と呼ばれる特殊部隊が大統領府へ到着するとの事なので、あと7分30秒程時間がある。

しかし幾ら地下司令部を制圧しても大統領府の中を完全制圧した訳ではない。今も正面玄関や裏口では、機情局の部隊とギアスで操った民兵達が大統領親衛隊や警察と銃撃戦を繰り広げている。その様子は、地下司令部のモニターからも確認する事が出来る。あと7分で敵の増援が来るので早急にこの敵を排除する必要がある。

勿論その計画は用意しているが、その為には最低制限圧しなければならぬ場所が複数あるのでこれから短時間でそれを成し遂げる。

まずは、地下司令部より偽の情報を流して警備の人間を分散させ正面戦力を減衰させる。

「地下司令部より！テロリスト達が南側外壁から5Fに侵入！速かに対処されたし!!!」

《第3小隊、了解！》

機情局の部隊にも直接僕が指揮を取ろう。

「α1、1時の方向にスモーク弾射出」

「α4、α6、ポイントS8に移動、移動後10時の方向階段下の部屋にグレネード」

「α11、α17、α18は、中央階段を登り北側通路に向けて一斉射」

《イエス・ユアハイネス！》

「β3、南側5Fに向けてRPG」

「β10、β12、β16、β19は、非常階段から7Fへ迎え」

《イエス・ユアハイネス》

このようにして兵士一人一人に対して指示を出して作戦を優位に進める。

勿論、モニター越しに兵士配置を見ているとはいえ、全てを把握できる訳では無いのでギアスの力を使っている。『ナイトメアナリー』に登場するルクレティアの地脈や物理的構造を把握するギアス『ザ・ランド』とサンチアの周囲の生命の気配を読むギアス『ジ・オド』の二つのギアスによって、建物内の構造と内部の人間の動きを全て把握して作戦を指示しているのだ。そこにレレーナ自身の頭の回転の速さを用いれば原作のルル兄様の様な事も出来る。ただ時間が無い以上、目標を最低限に設定して対処に当たる必要がある。

「殿下、正面ロビーの敵の排除が完了しました」

「よし、乙隊に例の物を正面玄関前まで運び込ませろ！」

「イエス・ユアハイネス」

僕が指示を出すと共に外部から侵入した機情局員が答礼をして無線で作戦本部へ連絡をする。すると大統領府近辺で待機していた乙隊のトラックが移動を開始して大統領府正面車寄せにトラックをつける。

「じゃあ後は台本通りにお願いしますね大統領？」

「はい。分かりました」

僕の問いに僅かに瞳を赤く染まらした大統領がそう答えるのを聞いて、僕とオルフェウスと機情局の二人は地下司令部を後にする。

エレベーターが上がり、地上に出て扉が開くと、そこはまだ戦場であった。その為、僕は再び体感時間の停止ギアスを使って共和国側の動きを封じ、拳銃で一人ずつ頭に弾丸を打ち込み沈黙させる。そしてギアスを解除して悠々と正面ロビーへ向かう。

正面ロビーを抜けて玄関の車寄せには既にZ隊がトラックを到着させており、中からブリタニアが誇る軍事力の象徴が現れる。

神聖ブリタニア帝国軍が開発した革新的戦術兵器 ナイトメアフレーム KMF。その最新型がそのトラックの中に収納されていたのだ。第4世代の「グラスゴー」を発展させた機体、第5世代KMF　「サザーランド」だ。それが2機配備されている。

サザーランドは、新型機なので今回の侵攻作戦にも少数しか配備されていない。バクーに用意した2機を含め、ラチエツト將軍とアーニヤ、アルガトロ混成騎士団長のホツジ边境伯、ジェレミア边境伯の6機しか配備されていないのだ。それぐらい開発ほやほやの新機体を、今回僕が使う。

と言うか、やつとサザーランドだよ！長かった。今世15年でようやくと原作アニメで出てきた主力KMFが登場した。

正直、紅蓮とかランスロットとか知っている身としてはサザーランドなんて大した事ないよなと思わなくもなかったが、グラスゴーとは違うよ。グラスゴーとは。機動性能と言い、精密動作と言い第4世代のKMFとは一線を画す性能だよ。

グラスゴーは、僕が自分用に改造したから何とか操縦できたけど、操縦するには些か苦痛を感じるものだった。パイロットへの配慮が足りないんだよアレは。

その点サザーランドは、パイロットに対する配慮も欠かさない。これならもう少し楽に戦争が出来そうだ。

そんな事を考えながらサザーランドに乗り込む。すると大統領府

内で戦闘をしていた α 、 β 隊が当初の作戦目標を制圧した事を報告してきた。それと同時にアゼルバイジャンの緊急時即応部隊が間も無くこの場所に到着する事が伝えられた。

戦力は、E・U・で開発された対地攻撃用垂直離着陸機^{V T L}　ガゼル
6機と装輪式戦闘車3両に装輪式装甲兵員輸送車3両の構成だ。

「オルフェウス！敵の地上部隊の増援は任せろよ。航空戦力は僕が受け持つよ」

「ああ」

オルフェウスは、そう答えるとサザーランドの1機に搭乗して地上部隊の迎撃に向かった。僕は、もう1機のサザーランドに搭乗して大統領府の壁面をスラッシュハーケンを用いてよじ登り、屋上で敵の航空戦力の迎撃の準備をする。すると程なくして6機のVTOLがこちらに向かってくるのを確認する。

「さーて、もう一踏ん張りしますか」

大統領府の屋上を登ったサザーランドのコックピット内で両手の指を絡めて腕を伸ばしながら背筋を伸ばす。背筋を伸ばした後、首を回して首筋と肩をほぐす。その後、アニメ版マオの人の心を読むギアスでVTOLの搭乗員達の思考を読みながら、VTOLの動きを未来視で観る。するとVTOLのパイロットと思われる人物達の声や思考が読める。

《司令部、アタッカー目標接近》

《了解、大統領の安否は不明である。早急に安否確認を》

《了解》

可哀想に。まだ大統領を助けられると思っっているんだね。

もうとつくに僕の手には落ちていっているのに。…マオのギアスって通信相手の会話内容まで把握出来るんだね。驚いた。あくまで範囲内の人物の思考であるが、相手の会話内容を理解する為に一度内容を思考するのでマオのギアスでも把握出来るんだね。

《目標に接近。屋上に何かあります》

《確認した。…KMF?》

どうやら僕が存在に気づいたようだ。

《KMF!?何故、テロリストが：まさかブリタニアか!!!》

《司令部！目標屋上にKMFを確認！指示を!!》

《KMF?数は?》

《1機のみです》

1機?ああ、彼等の位置からはオルフェウスの機体は見えなかったのか。

《司令部より、KMFを破壊し作戦を続行せよ》

《アタッカー了解。これより作戦を開始する》

アタッカーと言うのは、コールサインみたいなものかな？

《アタッカー1より各機へ。これより作戦を開始する！敵KMFに注意せよ!!!》

《了解!!!》

敵のVTOLが作戦空域に入る。それは同時にサザーランドのアサルトライフルの射程に入ったと言う事。

さあ、最後の戦いの幕開けだ。

《屋上に接近!》

《アタッカー2、アタッカー5は北側へ。敵KMFの注意を引きつけよ》

《アタッカー2、了解》

《アタッカー5、了解》

6機の編隊の中から2機が離脱して建物北側で移動する。残りの4機の内1機は南側へ向かい、3機は真っ直ぐ此方へ向かってくる。

僕は、排除する順番を瞬時に決めて対処する。サザーランドの左手に握られているアサルトライフルを此方に接近しているVTOLに向ける。そして火器管制レーダーを照射する。所謂ロックオンというやつだ。

《!?ロックオンされた!》

《回避行動!》

パイロットがそう言ったすぐ後に、僕のサザーランドの銃口が火を噴く。ダダダダダと重低音がコックピット内に響く。まあ実際は、リニアライフルなので火を噴く事は無いのだけれど…。そしてアサル

トライフルから射出された弾丸は、敵のVTOLへ向けて真っ直ぐに進む。VTOLの編隊は直様回避行動を取るが、1機に弾丸が複数弾当たりバランスを崩す。

《アタッカー5、被弾！メーデー！メーデー！！》

アタッカー5と自称したVTOLは弾丸が機体に命中した事により体勢を崩して、大統領府の車道を挟んで反対側の国立美術館へ墜落してしまう。

《アタッカー5が屋上からの攻撃により墜落》

《アタッカー4はカバーに回れ》

《アタッカー4、了解》

《ターゲットを破壊する！屋上を集中攻撃！！》

《了解！》

各機がその命令に呼応して、VTOLの左右の短翼の下に装備されている空対地ミサイルを僕に向かって発射する。しかし当然この建物はアゼルバイジャン側の建物であり、未だに大統領をはじめ多くの警察、軍人、官僚などが滞在している。その為、建物を壊すかも知れない強い兵器を使う事は無い。ミサイルに関しても威力が最も低い物を使う事は予想できていた。そしてそんな威力の弱いミサイルなど処理する事は容易である。

僕は、サザーランドをこの狭い屋上の中で動かしミサイルを回避する。回避しきれない物に関しては、アサルトライフルで迎撃する事で自身へのダメージを最小限にする。

《なっ!? 躲された！》

《なんて奴だ！》

僕のサザーランドが行なった回避行動に相手側が驚愕した一瞬の隙を突いて、再びアサルトライフルを発砲する。

発射された弾丸は、空中を浮遊するVTOL一直線に向かう。そしてコックピットの窓を貫通しパイロットを貫く。そしてパイロット席の後ろに座っていた乗員すら貫いて機体に穴を開ける。当然パイロットを失った機体は、操縦されることが無くなりそのまま墜落する。

《アタツカー3が墜落》

《アタツカー4は背後に回り込め。アタツカー2は作戦を変更、南東方向へ移動し側面から攻撃せよ》

《アタツカー4、了解》

《アタツカー2、了解》

《アタツカー6は、高度を上げて上空から攻撃せよ》

《アタツカー6、了解：クソ！高度を下げろ!!!》

アタツカー6が高度を上げ始めた直後に、サザーランドの弾幕がアタツカー6を襲う。それを受けて慌てて高度を下げるアタツカー6。

V T O Lのパイロット達の通信を僕も聴きながら未来視のギアスで彼等の動きを観測する。何処にV T O Lが来るのかが見えているので弾を当てるのも造作もない。ミサイルやミニガンを交わすのだけは、凄く気を遣う。特にミニガン。この狭い屋上でミニガンの弾幕を躲し続けるのは、本当に骨が折れる。正直、屋上担当になったのを後悔している。

：いや。オルフェウスがして怪我でもしたら大変だから、僕が担当になってよかったのか：はあ。

あつそこ。

《アタツカー4、被弾!》

《アタツカー4、屋上より高度を下げて退避せよ》

《アタツカー4、了解》

アタツカー4は、高度を下げて屋上の死角である低高度へ移動する。しかし突如してアタツカー4は爆散する。

《アタツカー4が墜落》

《なんだ!?!》

《遅いぞレナ》

アタツカー4が屋上の死角に入った直後にアタツカー4が爆散し彼方側が驚愕している時に、僕のサザーランドのコックピットの上モニターにはオルフェウスの顔が映し出されていた。画面越しに見てもイケメンだ。それよりもオルフェウス早くね?もう終わったの?

《こっちは終わった》

「早いね」

《建物の仕込みももうじき済むらしい》

「そう。ならこっちも終わらせようかな」

僕とオルフェウスがそんな会話をしている頃アゼルバイジャン側は、地上にいたオルフェウスの機体に気付く。

《もう1機居たのか!?!》

《残り3機です》

《編隊を組み直す。アタッカー1が先頭する》

《アタッカー2、了解》

《アタッカー6、了解》

残り3機となったVTOLの強襲部隊は、編隊を組みなおし此方に挑もうとしてくる。しかしその直後――

《司令部より作戦中止！地上部隊が全滅！繰り返す！地上部隊が全滅した！直ちに作戦を中止し撤退せよ!!》

《…アタッカー、了解。全機作戦を中止、当空域を離脱せよ！殿はアタッカー1が担当する》

《…了解》

どうやら彼らの方は、地上部隊がオルフェウスによって全滅した事で作戦を中止させ撤退するようだ。ふむ、このまま撤退させてあげても良いけど、やはり今後の事を考えてインパクトは大事だよな。

――ごめんね、逃さないよ。

撤退行動に入り此方から距離を取ろうとしている機体。まず一番離れている機体に向けてアサルトライフルを放つ。此方に背中を向けた状態では、回避するのは難しいだろう。当然のように射出された弾丸は、敵機体に当たる。その中の1発が噴進機に命中し機体を制御出来ずに墜落した。

《アタッカー2、墜落!》

《クソー!》

殿を務めている指揮官機^{アタッカー1}が味方の墜落を受けて悪態を付いているが、そんなもの付いている暇はないよ。直様サザーランドの両胸部に

備え付けられているスラッシュハーケンを指揮官機に向けて射出する。ガアンツという鈍い音と共にスラッシュハーケンは、指揮官機の機体両側に引っ掛かり其の儘ハーケンのワイヤーを巻き戻す。その巻き戻る勢いを利用して僕のサザーランドは空を跳ぶ。

《しまった!?!》

そして指揮官機の上に飛び乗り、そこを起点にもう一度飛び上がる。跳び上がった先には、VTOL編隊の最後の1機が飛行してる。その最後の1機を右腕に装着されたスタントンフアーを展開し叩き付けて撃墜した。更にハーケンに引っ掛かった指揮官機も踏み台にされた事で地上に墜落した。

結果、緊急時即応部隊は僕とオルフェウスによって全滅する事となった。

その直後に大統領府が凄まじい爆音を響かせ大爆発を起こし、崩壊していく。アゼルバイジャンは、事実上この瞬間に敗北した。そしてだめ押しとばかりにアゼルバイジャン全土に大統領府地下司令部に居るハリエル大統領の無条件降伏宣言と自決の映像が放映される。

瓦礫の山と化した大統領府の瓦礫の上には、レレーナの駆るサザーランドの威容が屹立きつりつしていた。

「これでお使いも完了だね」

緊急事態省

アゼルバイジャンの首都バクーにある緊急事態省。大統領府や議会、国防省などが機能不全に陥った為に臨時防衛司令部が設置された場所である。その省内の大会議室では、軍人や文官などが今後の事に関して話し合いをしている。

「緊急時即応部隊は全滅。大統領府は瓦礫の山と化しブリタニア側によって占拠され、議会も同様にブリタニアに占拠されている状況」

「ハリエル大統領は、無条件降伏を宣言し自決。駄目押しとばかりにブリタニア軍が南方より接近している」

「もはや勝ち目はあるまい」

「E・Uは主力部隊？」

「アルメニアの国境を超えた際にユーロブリタニアの聖ミカエル騎士団によってトルコ州を強襲され撤退した」

「…議会を占拠しているブリタニア側に降伏する旨を伝えなさい」

大会議室で行われている話し合いを纏めるのは、現状この場にいる最高位の初老の女性であった。彼女は、断腸の思いで降伏する事を正式にブリタニアへ伝える事を命じる。そしてこれからの祖国の行く末を案じずにはいらなかった。

幕間2 ルルーシユ兄様の受難

皇歴2009年 神聖ブリタニア帝国 ペンドラゴン皇宮

神聖ブリタニア帝国第11皇子ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは、現在母リアンヌと共にインバル宮を訪れていた。

「母上。どうして今日は、インバル宮へ行かれるのですか？」

「今日は、ビスマルクに用があるの。用のついでにルルーシユに稽古でもつけて貰おうと思っついて来て貰ったのよ」

「えっ」

リアンヌの言ったことを理解するのにルルーシユは時間がかかった。

ビスマルクとは、帝国最強と言われるナイトオブワン『ビスマルク・ヴァルトシュタイン』の事だろうかと考える。ナイトオブワンに稽古をつけて貰うとは、一体どういう事だろうか。まさかそう言う事だろうか。

ルルーシユは、自他共に認める運動音痴だ。体力の無い温室育ちの萌やしっ子である。弟のレレーナ・ヴィ・ブリタニアと妹のナナリー・ヴィ・ブリタニアは、母に似てその年にしては体力があり運動能力も才能もある。しかし兄であるルルーシユには、体力が無く運動能力も決して高いとは言えない。だがその代わりルルーシユは、弟や妹以上の頭脳を持ち合わせている。その為他の皇族の中でも将来は、有望であろうと思われる期待されているのだ。まあそれが反ヴィ家の皇族貴族にとって反感を抱く一つの要因となっているのだが…。

そんなルルーシユにリアンヌは、ビスマルクと稽古をせよと言っているのだ。ルルーシユは思う、僕は今日が命日となるかもしれないと。

「レナ、ナナリー。僕は、二人の幸せを何時迄も願っているよ」

ルルーシユは、此処にいない二人の弟妹への最後の言葉よろしく二人の将来を案じる言葉を呟く。

「…何言ってるの貴方？」

そんなルルーシユを見て首を傾げるリアンヌ。

マリアンヌとしては、たかがビスマルクとの稽古。そんなに気にする事は無いと思っっているんだが、それは元同僚であるから言えるという事に意識がいつていない。ナイトオブブラウنزは、ブリタニアでは一種の憧れの存在なのだ。ルルーシュにしてもそれは同じで、最強の称号に憧れる人は万国共通で沢山いる。ただマリアンヌには、それが理解できなかったようだ…。

「ビスマルクと稽古などした暁には、僕は死んでしまっているのではないかと…」

「大丈夫よ！貴方お兄さんなんだからレナとナナリーを守れるくらい強くならなきゃ」

「それはそうですが…」

そんな事をルルーシュとマリアンヌが話していると、二人は目的の部屋に到着する。部屋をノックして許可を得ずに入室するマリアンヌ。それを見てそれで良いのかと驚いてしまい動けなくなっているルルーシュ。始めこそ突然の入室者に対して警戒をしていた部屋の主は、そんな二人を見て苦笑いを浮かべる。

「来たわよビスマルク」

「マリアンヌ様、まだ返事もしていないのに入室されたら間違っって斬りかかってしまい兼ねませんので、せめて返事を待って頂けませんか？」

「あら、貴方に斬りかかれても避ける事ぐらい訳ないわ！」

「マリアンヌ様は、大丈夫でもルルーシュ殿下はそうはいかないでしょう」

「大丈夫よ、貴方がそんなミスをする筈ないですもの」

「…」信頼頂き光栄です」

帝国最強と名高いビスマルクですら母上には形無しだ。それどころかビスマルクは、母上と話していると仕方ないと言うか達観している様な雰囲気醸し出しながらどこか嬉しそうにしているんだよね。何でだろう？

「それでマリアンヌ様、本日はどのような用向きでございましたか？」

「ルルーシュに稽古を付けて欲しいのよ」

ビスマルクが母上に訪問の理由を問うと母上は、あつけらかなに答える。そして母上の答えを聞くとビスマルクは僕の方へ視線を向ける。それは優しさのある視線ではなく、此方を探るような見極めるような視線だ。

「お、願います。」

「あら、ルルーシユ。そんなに畏まらなくても良いのよ？ただのビスマルクよ？」

母上。ただのビスマルクは、帝国最強の騎士ビスマルク・ヴァルトシユタインですよ。何処に畏まらなくていい理由がありますか？ビスマルク相手にそんな自然体で居られるのは、帝国広しと言えど母上だけでしよう。

「マリアンヌ様。私はこれでも帝国最強の騎士『ナイトオブワン』ですよ？ルルーシユ殿下の為を思えば、まずは基礎訓練を御自ら成された方がよろしいのでは？」

「ダメよ。まだナナリーも幼いし、レレーナの悪戯にも手を焼いているのよ」

いや母上。ナナリーの基本的な面倒は僕とレナが見ていますよ？レナが悪戯に夢中なのは事実だが、母上はむしろそれを後押ししていただきますよね!?

「マリアンヌ様、貴方がレレーナ殿下の悪戯に助言をしている事は、このビスマルクの耳にも届いておりますぞ」

「あら、何の事かしら？」

母上、流石です。ビスマルクに睨まれて微笑みで返すなんて、僕には出来そうにありません。そしてビスマルク、母上に微笑まれて頬染めるのはどういう事だ…。

「…はあ。仕方有りませんな、このビスマルクがルルーシユ殿下だけでも一人前の男に仕上げてくださいに入れます!!!」

何故かビスマルクが訓練にヤル気になった。なつてしまった。どうしよう、僕は明日生きていられるだろうか…。

あとビスマルク：レナも可愛いけど男の子だからね。はあ。

この後、ビスマルクに日頃のレナや母上の悪戯の鬱憤を晴らすかの

ような猛特訓をさせられ、心身共に疲れ切ったのは言うまでもない。

皇歴2017年 エリアー1（旧日本国） トウキョウ アツシユ
フォード学園

アリエスの悲劇が起きて俺とナナリーが、レナと引き離され日本へ来てから7年が経過した。この7年間色々な事があった。

日本へ来てすぐに親友とも言うべき存在、日本国最後の総理大臣“枢木ゲンブ”の一人息子“枢木スザク”と出会い、そして戦争によって引き離された。最初は嫌な奴で暴力的な奴だと思っていたが、共に過ごす内に真っ直ぐで優しく相手を思いやる事の出来る奴である事が分かり距離が縮まった。目と足を不自由にしているナナリーにも嫌な顔一つせずに良くしてくれて、信用のできる奴だと思った。

だけど俺の祖国である神聖ブリタニア帝国が日本へ宣戦布告を行い、日本は1年も保たずに降伏する事となった。その際にスザクの父枢木ゲンブが自決した。俺とスザクとナナリーの3人で戦火の中を逃げ延びていたのだが途中でスザクと引き離される事になり、俺とナナリーはマリアンヌ^母の後援貴族であったアツシユフォード家の庇護下に置かれる事となったのだ。スザクがその後どうなったのかは分からない。戦火に飲まれて死んだのか、はたまた何処かで生き存えているのか。願わくは何処かで五体満足に幸せに生きていて欲しいと思う。

今の俺には、最愛の妹一人守るのもアツシユフォードの力を頼らざるを得ない。もう一人の最愛の弟に至っては、アリエスの悲劇以降会う事も叶わず守ってやる事はおろか一緒に遊んだり食事をしたりすると言った些細な事もしてやれない。それどころか弟は、俺とナナリーがエリアー1・日本で生きている事すら知らないだろう。兄として本当に申し訳ないと思っている。唯一レナが自分で生きている事だけが救いだ。側によく分からない奴を置いている事は別だが…。

自分が弱い事を痛感させられる現実に嫌気が差すが、それでもナナリーだけは何としても俺が守ると決めている。例えそれ以外の全て

を賭けたとしても、ナナリーだけは俺が守る。守れなかったレナの分まで俺が…。

「ルルーシュ！黄昏てないで早く決めてちょうだい!!」

突如俺にそう言うてきたのは、俺とナナリーを保護しているアツシユフオード家のご令嬢であり私立アツシユフオード学園高等部生徒会会長である「ミレイ・アツシユフオード」その人である。煌びやかなブロンドヘアに青い瞳、豊満かつ健康的な肉体を持つ、100人の男に聞けば全員が美女であると答えるであろう美貌を持つ女性。彼女の明るく愉快で先の読めない発想は、俺の日陰暮らしで憂鬱とした思考を転換してくれる。その上俺を元皇族と知ってなお、生徒会副会長として扱き使う彼女の物怖じしない性格は確かに俺の精神を助けてくれている。

だが――

「…会長。これどう見てもお見合い写真ですよ？しかも会長ではなく、俺へのお見合い写真ですよ？貴族令嬢ばかりですよ」

「そうよ！あんたの将来の伴侶を決める写真集よ！」

「会長！俺は公式的には死んでいる事になっているのに、お見合いなんて出来るはずないじゃないですか!？」

「勿論分かっているわよ！でも何時迄もここには居られないでしょう？あんたもう高2よ!?!あと1年で卒業する事になるじゃない。お祖父ちゃんだってもう歳だし、うちの親はあんたの事教えられてないし…。」

「…まさかルーベンの体調でも悪いのか？」

「いえそんな事は無いわ」

ならどうして今お見合いの写真なんて持ってくるんだ。俺は結婚するつもりなんて無いのに。ナナリーを側で支え守って行くつもりなのにどうして。うん、断固として拒否だ！拒否一択だ!!とするとどうやってこのお見合い写真攻撃を収めるかだが、下手に断り続けるとお見合い写真がナナリーの下へ行く事になるかも知れない。それを防ぎながら俺への写真攻撃をやめさせるには…。

そもそも何故こんな事が始まったのか、考えられる事は幾つか思い

つくが、情報が足りない。

「ほら眉間にシワが寄ってる」

そう言つてミレイは俺の額を人差し指で突いてきた。

「そんなに難しく考えなくても良いわ。お祖父ちゃん曰く、これはあんなとナナリーとアツシユフオードの為らしいよ」

「俺とナナリーとアツシユフオードの為？」

確かにお見合いが成立すれば、アツシユフオードは俺とナナリーを隠し続ける必要がなくなりその上で結婚先の貴族に俺を紹介したという恩を着せる事ができる。俺は日の光の下堂々と力を発揮出来るようになり、かつ貴族の後ろ盾を得る事で政治的な駒になるリスクを避ける事が出来る。だがナナリーには、いったいどんなメリットがある。俺が公の場に姿を現せば、必然的にナナリーも連れて行かれるだろう。貴族の後ろ盾が、俺と俺の結婚相手の二つだけではナナリーをあの皇帝から守る事は出来ないだろう。それではダメだ。

これの一体何処がナナリーの為だと言うのだ!?

「ルルーシユ。貴方何か勘違いしてるんじゃない？」

「勘違い？」

「お祖父ちゃんが、貴方と結婚させたいのは私よ！私！ミレイ・アツシユフオードよ！」

俺と会長？

「貴方が下手に公に復帰させたら、うちは貴方の生存を知っていないがらそれを故意に隠蔽した事になるのよ？そんなリスクのある事をうちは望まないわ。だから私と貴方を結婚させたいのよ」

「なら何でこんなお見合い写真を…」

「結婚相手くらい自分で選びたいでしょ？」

「そう言うことか…」

ルーベンとしては、アツシユフオードが俺とナナリーの生存を隠蔽した事を隠しておきたい。だが何時迄も俺とナナリーを囲うのも限界がある。自分が死んだ後の事を考えて、俺をアツシユフオードに取り込もうと言う算段なのだろうと考えをつけた。だからわざと俺が嫌がりそうな貴族との縁談を多く持つてきて、俺が全てを拒否した後

にミレイとの婚約を提示するつもりだったのだろう。そうすれば俺が妥協してミレイと婚約すると考えたのかもしれない。

俺としては、何時迄もアツシユフオードに囲われているつもりは無いのだがルーベンはそのを知らないのだ。それにルーベンとしては、レナとの関係もある。

レナは、今やオデユツセウスやシユナイゼル、ギネヴィア、コーネリアなどそうそうたる面々と共に名を連ねる次期皇帝候補の一人なのだ。俺やナナリーのことで、レナの機嫌を損ねたくは無いのだろう。ただでさえアリエスの悲劇以降アツシユフオードとヴィ家は疎遠になっているのだから。だが、俺やナナリーを使えばレナに取り入れるかも知れない。ルーベンならいざ知らず、ミレイの両親の技量では俺たち兄妹を利用せずにレナに近づくのは無理だ。その為に俺とミレイを婚姻させヴィ家との繋がりを確かなものにしたいのだろう。

「ルーベンは、そんなにレナとの関係を重視しているのか？」

「レレーナ殿下？ 私はそこまでは聞いていないわねえ。殿下の話は1年ほど前に本国で開催された戦勝祝賀会でお会いした時くらいよ？」

「ああ、E・U・侵攻作戦の祝賀パーティーか」

「そうーそれ！流石に軍人に文官、貴族院議員、貴族、大企業の重役なんか一杯来てたわ。流石次期皇帝候補って言う感じね。まあ本人は、挨拶もそこそこに三人掛けのソファァで横になってゲームしてたけど」

何をやっているんだレナ…。まあだが、元気にやっているようで何よりだ。

数年前に意識を取り戻して直ぐに、ボワルセル士官学校へ入学し2年で飛び級卒業をして話題になった。11歳の子供が士官学校を卒業した事もそうだが、何より士官学校で多くの伝説を残して有名であった。上級生の傾きかけていた実家を救済しその上級生と友人になつてあげたり、自身に対抗心を持った大貴族の子弟がKMFで事故を起こしそうになった際にコックピットから救助したり、同級生一同に渾名を貰い敬意を持って接せられてたりと、あの子は本当によくやっている。

「あんた本当にブラコンシスコンよね。殿下の話はそんな可愛いものじゃ無いでしょ！士官学校のタチの悪い上級生の実家の企業の株を買い占めて上級生を下僕のように扱ったとか、ヴィ家と敵対していた大貴族の子弟とのKMF模擬戦で相手をコックピットから引きずり出したりと、同級生全員からThe Darknes Rulerと呼ばれ恐れられたりと大概でしょ!？」

「え!？」

「え!?!じゃないわよ!あんた普段クール系のイケメンキャラを装っていないながら、弟妹に関する事になるとボケキャラになるのは何なの!？」
「やだなあ会長。俺は、レナとナナリーの事でボケた事など一度もありませんよ」

「無自覚なのね…。」

なぜか呆れられたような眼差しで此方を見てくるミレイ。一体なんなんだ。

「…そう言えば、レレーナ殿下と言えば自分のした悪戯を他人のせいにするのが上手だつて噂を聞いたのだけれど」

「ああ、レナにはそういういった才能があったからな。実際それで俺やナナリーに対して嫌がらせをしていた貴族たちの婚約が破談になり、取引が中止されたり、直接命を狙ったりと色々起こしていたが、結局ビスマルク以外にはバレていなかったよ」

「寧ろナイトオブワンにしか気付かれなかったのが凄いわ」

そうレナにはそういった才能があった。その才能があったからこそあの皇帝の直属の機関である「機密情報局」へ入局できたのだろう。正直レナがああ男の直属の部下となつたのは業腹だ。しかしレナがその才能を持ってあの帝国の中で生きていけている事は嬉しく思う。それに最近では、軍属にもなつたようでエリア総督を任せられるようになったのであの子の事を知る機会が増えたのは僥倖だった。と言つても機情局の副長官と兼任で総督の方は、代理執政官を置いてほぼ一任しているようだが…。

「道理であれだけの功績を残せるはずね。それだけの才能があればア

ゼルバイジャン侵攻作戦からE・U・侵攻作戦なんかも出来るわけ
ね」

「…そうですね。弟が戦地に身を置いているのは複雑ですが、あの子
が上手くやれている様で安心しています」

俺がそう言うのと対面の席に座っていたミレイは「そう」と言い、酷
く穏やかな優しい笑みを浮かべていた。不覚にも一瞬見ほれてし
まった。

「じゃあ早くお見合い写真見ちゃいませよ！」

「何が「じゃあ」なんですか、全く。」

俺は、ミレイにせっつかれていそいそとお見合い写真を開いては閉
じ開いては閉じといった作業を繰り返す。なんでこんなに多くお見
合い写真が送られてくるんだ。俺はそんな事を考えながらミレイと
共にお見合い写真を処理していく。

この時俺は知らなかった。

この大量のお見合い写真を送ってきているのがルーベンではなく
本国に居る愛する弟からである事を。愛する弟は、俺とナナリーが生
きている事を最初から知っていた事を。そしてこの後、緑の髪をした
少女や赤毛の少女などと関わって俺の婚約話が大事になるなど…。

俺は知らなかった。

「レレーナ殿下、また兄君にお見合い写真ですか…」

「ルーベン、僕は兄様に幸せになって欲しいんだよ。だからこうやっ
て良い縁を繋いで貰おうと」

「御自分の所に来ている縁談を流しているだけでは？」

「…ふふ」

「はあ」